

とある科学のハードミサカ

イエス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一位一方通行のクローン？が色々あつてミサカの体を得て色々する話

目次

科学と魔術

プロローグ

Kenaz

魔術師

挿話 とあるハードミサカのOS事情

機械仕掛けの尻尾

挿話 命が失われたその時

聖なるひと

上条当麻はヒーローなのか？

愛し子

序章 守られし者

一章 妹達

二章 情報

挿話 ヒーローになれぬ者

三章 砕けるは緑色の硝子玉

四章 襲撃者

五章 救済準備

六章 愛される者

終章 あげつない終わり。

サマーバケーション「海」

序章 悟る者

一章 火野神作

二章 海、そしてバーベキュー

三章 アポカリプティックサウンド

96

91

86

84

80

74

68

59

53

51

47

45

41

34

30

23

18

16

9

3

1

終章	優しさ	101
再覚醒		
序章	キタブール・アジフ	111
一章	座標移動	115
二章	御坂美琴	122
三章	好き	130
四章	大覇星祭開幕	136
五章	科学的神性	143
六章	第五位	153
終章	神の視野	159

科学と魔術 プログラーグ

筋ジストロフィー治療実験

シユウエストターズ
義妹達計画

最終報告

チャイルドエラー

本計画は置き去りを対象とした

筋ジストロフィー治療実験である。

被験者の人格をデータ化し完全に肉体と切り離すことで人格データを作り出す。

レールガン超電磁砲御坂美琴から提供されたDNAマップを元に作り出した受精卵を培養し人格データを肉体に入れることで実験成功とする。

肉体は培養したものでありクローンではない。

この実験が成功すれば筋ジストロフィーの治療及び不死化の可能性が見いだせる。

しかし、第一実験以外の第三十四実験、計三十三実験での失敗を確認。

人格データの作成過程で被験者の精神が崩壊することにより被験者が死亡する為である。

第一実験での成功理由を論理的・学術的観点で証明することができない以上損害を最小に抑えるため、実験を凍結し研究チームはシユウエストターズ義妹ダイクプロセッサ外界演算育成計画に転移とする。

樋口製薬・第七薬学センターの一室でレールガン超電磁砲御坂美琴はディスプレイを見ていた。

「はは、何よ。クローン計画なんてなくて、ちゃんと私のDNAマップは正当に使われてるじゃない。ドナー提供で髪質や体質が変わったって聞くし、きっと私と同じような体格の女の子が成功したのよね。これ。髪色が私そっくりになって、見間違えたんだわ。」

乾いた笑みを浮かべて、力なく地面に座り込む。

安堵した表情で、清々しい表情で。

自身のクローン計画を暴きにきた彼女は、クローン増産計画が凍結されたことと自身の提供したDNAマップが正当な方法で使われた事に安堵したのだった。

実験内容がクローンに別人格を移植するという事実には、彼女は気がついていない。

哀れなものだ。と私は思う。同時に幸せだ。とも。

「シユヴェスター義妹？どうかしましたか？とミサカは問います。」

「なんでもありません。貴方はあなたの仕事をしてください。私は終わりましたよ。」

「およそ46秒で完了します。とミサカは計算します。」

目の前にいる御坂美琴と瓜二つの彼女こそ、御坂美琴が探っていたクローン。

超電磁砲増産計画の軍用クローン。シスターズ妹達。

私と違って模造品の体に作られた人格を叩き込んだ量産型。

肉体の製造もたった14日で終わる短命中の短命。

彼女は死ぬためだけに作り出された人形だ。

そう。人形。

「一つ、聞きたいことがあります。」

「なんですか？こちらは作業中なのに。とミサカは心の中で悪態をつきます。」

「軍用クローンの癖に随分感情豊かなね。まあ、貴方はクローンってどう思ってるわけ？」

「…そういえばあなたもクローンでしたね。確か、アクセラレータ一方通行の。とミサカは貴方について思い出します。」

Kenaz

私の能力は、データプロセッサ 外界演算

一度でも友好関係を築いてしまえば、相手からの如何なる攻撃、反動、攻撃的影響を受けない能力だ。

対能力者に対する絶対的最強能力とも言えるこの能力だが、弱点として能力的な攻撃手段はないこと。

まあ、他にもいろいろできることはあるんだけど。

「ちよつと聞いている？おにーさん達と遊ばない？」

「ちよつとそこだからさ？・ね？」

はつきり、ナンパと言うものは扱いづらいと思う。

相手は下心ありありの下品な誘いだが、ここで攻撃がなければ私はどうする事もできない。

「いやっはは、私約束があるからー」

夏の暑いこの季節、こう絡まれてちや機嫌も悪くなるどころ。さつさとどうにかしてこの場を切り替えなきやならない。

これもあれも全て、忌々しい実験のせい。

体がせっかく健康的なりズムを取り戻したというのに、研究所が機能していないなら意味がない。

「えーいいじゃん。」

にしても、こいつしつこいな。

まあ？この美少女を目の前に声をかけないのも可笑しい話。でも自分の容姿を少し考えたほうがいい。美少女にモテるブサメンなんて、魂が美しいかとしてつもなく人柄のいいやつに決まってるのに。

「あ、おーいー」

この私がナンパにしつこく絡まれてると、前方からツンツン頭の高校生がやってきた。

私に向かつて手を振っている。知り合いではない。

少々薄気味悪い雰囲気の男だが私に向かう感情は善意しかない。たぶん、呪われてるんだらうな。

「いたいたーもーなにやってんだ？勝手にどっか行ったら駄目だって

「あ、連れがお世話になりましたー。」

彼は私の手を掴んで強引にナンパ男たちから私を遠ざける。かつてない幸運、絶好のチャンスに身を委ねて彼についてく。雰囲気はすこし薄気味悪いけど……

しばらく、角を何回か曲がったところで彼は歩きを止めた。

「あ、勝手に手握って悪かったな。絡まれてたみたいだから。あ、俺上条当麻。」

「いえ、助けていただきありがとうございます。私はミサカIIアウターゴッツといます。」

相手から名乗られたので私も名乗り返す。夏休みだというのに制服姿から部活終わりか、補修を受けてきたのだろう。私からしたらパツとしない容姿の彼は、私と出会う前からなにやら焦っていた様子。落とした財布でも探していたのかもしれない。

「ミサカ？御坂美琴ってやつの家族？」

「はあ？ミサカが名前です、名字はアウターゴッツ。ミサカとお呼びください。」

上条さんはどうやら頭が悪い。

「何かを路地裏で探してました？お手伝いしましょうか？」

「ん？あー、いいんだ。ちよつとした再会を願って歩いてただけだからな。」

「会いたいのですか？その人と。」

「え？会いたっていうか、忘れ物をだな。」

「あーなら、落とした場所に戻っているかとしれませんね！行きましょうー！」

「学生寮ですか……オートロックが多いですよね？あー、でも隣からとびうつれないほどでもない。」

「あの一、ミサカさんは女の子ですよ？上条さんと二人きりって……」

「あ、ええ。でも私ほどの美少女と噂になるのも嬉しいですよ？それに私と上条さんはお友達ですし、私が『助けて』って出会ったお

友達です。』と言えば済む話ですよ♪」

「それは、それで上条さんは悲しいでせう。」

落とし物の落とし場所は上条さんの自宅らしく、上条さんの自室のある階まで来たところ。

「あん？土御門のヤツゲロでも吐いたんじゃねーだろーな。」

「あちゃー、大変ですね。ロボット数台がかりの清掃ってヌタウナギのヌタいらい。」

「ヌタウナギ？実験か何かか？」

「父は生物学の研究をしまして……」

「はーん。」

「あら？でも誰か倒れているのでは？」

ロボットの影から、珍しい銀髪の髪の毛のようなものが見える。

倒れているのであれば、吐いて窒息死する恐れもある。髪が長いよううで、ここからではどのような体勢で、倒れているのかはわからないが、まずい。

「大変！嘔吐して倒れているのであれば窒息しかねません！」

「なんだって！早く起こさないと！」

「横向きにー！」

そこで初めて気がつく。血の特有の鉄臭い匂い。

そして男子寮にしては甘ったるく、不快なフレグランスの匂い。

そこには、シスターさんが背中から血を流して倒れていた。清掃ロボットはシスターさんから出てきた血を拭き取っていた。

「あ、」

明らかな傷害事件、いつからこんな事になっていたのかは分からない。

上条さんの部屋は角部屋だ。しかもこの階は7階のはず。ここまですぐエレベーターで登ってきていたけれど、エレベーター内の階数ランプなんか一度たりともついてなどいないし、エレベーター自体もとも一階にあったのだ。

もう犯人は逃げたあと。

とりあえずシスターさんを病院に連れて行かなきゃならない。

「なんだコレ！何なんだこれ！」

「落ち着いて。」

「落ち着いてられるか！おい、一体誰にやられたんだお前！」

ここは学園都市、実験都市でもあり生物学を専門とする私の父は、医療もすこし齧っていたそうで、応急措置として、薄い人工皮膚を作り出すスプレートの開発をしている部下も居る。

まだ試作段階で液体絆創膏の方が効果があるものの、こういった重症患者に対しては応急処置ぐらいに役立てられるのかもしれない。

「応急処置だけはします、ちよつとエレベーターの方を向いていてください。」

「あ、ああ。わか……」

「上条さん？」

私は途切れた言葉の原因を確認するために振り向いた。

そこには日本人ではない男がそこに居る。

真っ赤な髪に、黒い服、ピアスに入れ墨にタバコ。

童顔の変質者だ。

「ひっ！上条さん、あなたのお隣さんって飛んだ変質者ですか？」

「ち、違う、断じて違うからな！」

「つまり、不審者ってことね！この子を襲ったのもあなたなのかしら！」

「うん？僕達魔術師だけど？」

「……………うっわ。」

とりあえず、対応は上条さんに任せるとして、早急に、迅速にこの子の手当をしなければ。

傷からして、刺されたのではなく切られた。

時代劇で見たことのある傷……真剣で切られたんだろう。模造刀だと殴るか刺すというものになるので、よっぽどの居合の達人が相手側にいるのかもしれない。

刀は切るための道具と聞いた事がある。断面はきれいなはず……

「ケナーズ」

その言葉が聞こえた途端、オレンジ色の光が溢れ出した。

「ひっ！」

熱い。熱くてたまらない……こんな初めてだ。

なんで私がこんな目に会わなきゃならないの？

「やれやれ、どうインテックスを回収すれば……うん？」

いや、炎はここまで到達していない。

私と炎の間に人間が、上条さんがいるから。

変質者は驚いた顔をして、そして何かをつぶやいたと思ったら、服が弾けた。

全く意味がわからない。

逃げなければ……逃げなければならない。でもここは角部屋。通路は変質者がいる。

こんな高さから飛び降りるのは自殺者ぐらいだ。

……いや、方法はある！

「上条さん、私を突き飛ばしてください。」

あれからどれほどたったのか、程よい茂みに身を隠して、息を殺して上条さんを待つ。

結局突き飛ばしてくれないので、自力で7階から降りた。自分で落ちて。

わかったことは、自分で落ちたときもダメージない。めっちゃチート。

惨めでなんて情けないだろう。たった二人の人間を救えないなんて。

軍用クローンとはいえ、心まで強くはない。生きるために作られたこの体はそれを許さない。せめて私がこの世に生を受けた時の肉体だったら……いやいやあの体はもう捨てたんだ。生きるためには、たとえ這いつくばったとしても……私は生きるためにここにいるんだから。

「ありがとうなんだよ。手当してくれて。」

「当然のことよ。私はミサカIIアウターゴッツ。」

「私は禁書目録。アウターゴッツの人間ならわかるよね？」

「…まあね。」

「驚いたんだよ。まさかこっちにアウターゴッツ家の人間がいるなんて。」

魔術師

「ああ、ええつと、今後の方針なのですが……あの、その上条さんが怒っていることは百も承知ですけど、とりあえずインデックスちゃんの治療をですね？」

目の前の上条当麻は怒っていた。

魔術師相手に敵前逃亡をした。や自らをおいて逃げたことに対してではなく、7階から飛び降りた。ということに対して怒っているのだ。

ここが学園都市ということ忘れてまで、私を心配してくれているのだろうか？それにしたって、お人好しがすぎる。

「能力がありますので。それに殿ぐ苦労さまでした。」

「まあ、無事で良かったよ。取り敢えず治療ったってどうやってするんだ？病院は……使えないだろうし。おい、お前の中に傷を治すようなモンはないのか？」

背負ったインデックスに対してなにか、縋り付くように上条さんが食い気味に聞くけれども、インデックスは小さな声で無理だよ。とだけ喋った。

超能力者には魔術は使えない。

科学と魔術を組み合わせようとした実験で、「超能力者は魔術を使うことは実質不可能」と結果が出ていたはずだ。

その超能力者は超能力者^{Level 5}だけを指すではなく、無能力者^{Level 0}から超能力者^{Level 5}まで、学園都市の開^{カリキュラム}発を受けたもの全てを指している。

一度だけ、その資料を見たことがある。

能力者に魔術を扱わせても、魔術師を開発して魔術をあつかわせても体の穴という穴から血を吹き出させて死亡したと。

「無理ってなんでだ？俺の右手のせいなのか？」

「いえ、私も無理です。その、彼女の言う魔術と私達の超能力では回路が違うようで。」

「回路が違う？」

「うん……そう。ええつと、超能力は才能ある人で、魔術を使うのは才

能の無い人。才能ある人が、才能がない人の為のものを使うことは出来ないんだよ。」

「なら、この街じゃ。」

そう、彼の交友範囲ではまず魔術を使える者は居ないだろう。そもそも 魔術を知っている人物でさえ、世界的に考えてもほんとに存在することを本当に知っている人のほうが圧倒的に少ない。

「チクシヨウ。」

「あの、」

「……なにかほかの方法があるのか？」

「えっと、」

「？」

「アウターゴッツ家はその、魔術師の家系です。」

「え？」

上条さんはしばらく固まる。

こんな、機内にお医者様のお客様はいらっしゃいますか？でたまたまいたような。

爆発物が取り付けられてしまったトレインにいろんな得意分野や人が集まり、皆で協力して助かった。そんな小説の中の出来すぎたお話のようなことが現実で起こる。

「でも、ミサカは使えないんだろ？」

「……父が魔術師です。」

「いや、外にいる父親に来てもらうにしても、俺達が行くにしても、時間が足りないんじゃないじゃ……」

「あ、あ！あの、父が研究者です、学園都市に居るので、その。」

「本当か！なら！」

「治療できます！」

・

竜宮生物研究所。その土地に私の家もある。

研究所では詳しく知らないが医療器具の開発をしていたりもしている。

父は医師免許を持っているが基本的に植物の交配や屋内プラント

の生産実験もしているため、研究所自体は工場のような出で立ちだ。その隣にある研究所敷地内には似合わない豪邸が私の家だ。

電気は灯っているが使用人もいるため父の所在は不明。

ただ玄関は明かりが灯っていて人影がうごめいている。完全にパです。ありがとうございます。

そもそも今日はとても、とても帰りが遅くなってしまった。どこかで火事でもあったのか警備員アンチスキルの乗るパトカーや救急隊員の乗る救急車や消防車のサイレンが過ぎ去っていったのを耳にした。

きつと心配してくれてるんだ。

「えっ？人？」

「開けてもらっても？」

「ああ。」

私がインデックスを背負っているので上条さんに開けてもらおう。するとどうだ、ドアを開けると同時に黒髪の青年男性が飛び出てきた。

白いワイシャツに、紺色のベストを着て黒いスキニーパンツを履いたおよそ二十代前半ほどの。

「ミサカちゃん！こんな遅くまでどこで何して……ああ！ミサカちゃんが男連れてきた!!!え？もう無理！パパもう、無理！」

「だ、旦那様！」

玄関にいたのはパパと家令のアルバートだ。

パパは私が家に堂々と男の子を連れてきたことに対して、キャパシティーオーバーになり倒れてしまった。

そんなパパを慌ててアルバートがその身を支える。

「え、大丈夫なのか？」

「多分。取り敢えずインデックスを運んでしましましょう。ミカ！ご主人様が帰ったわよ！」

慌ててやってきた専属侍女のミカにインデックスを預けて客間に慎重に運ばせる。

それを尻目に、困ったように眉を下げて落ち着き払った声でおずおずとアルバートは私に質問を投げかけた。

「ミサカ様、これは一体？それにあの少女は？」

「アルバートすぐに彼女の治療を。あの子はインデックス禁書目録よ。わかるでしょう？」

アルバートはアウターゴッツ家から連れてきた者で、魔術も扱える。そもそもこの研究所自体ほぼ体内で構成されていて、多少の後ろ暗いことぐらい簡単にもみ消すことができるメンツばかり揃っている。

魔術師が科学者としてやっていけるのかと心配していたみたいだけど、パパ曰く簡単に科学者としてこの街に受け入れられたそうだし、それに、魔術師といっても殆どがたしなみ程度の者が多いそう。

「インデックス禁書目録！……っ！し、失礼ながら、なぜそのような者を？それに彼はその。」

「彼は上条当麻。ナンパから助けてもらって、人探しを手伝ったのよ。そしたら魔術師に襲われた。彼が殿を努めてくれたからまあ、帰ってこれただけ。」

「襲われた？魔術師に？どういうことかな？」

目をカツ！と開いて気絶していたパパが私の肩を掴んで、怪我がないかを確認する。倒れてきたにもかかわらずものすごい筋力なこと。

その後上条さんの方に目を向けて、また目を見開いた。

まるで死人と再会してしまったかのように。

「あ、え？上条当麻君？」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、僕は彼のお母さんの又従兄弟だから。よく来たね。君のお母さんは上条詩菜って言うだろう？竜宮の近縁のくせにえらい不幸体質な親戚なんて有名だよ。テレビでも有名だったし。こっちに来てる事は知ってたけど、娘が居たから。うん、よく来てくれたよ。」

完全に嫌味なんですけど。

上条さんは少し青ざめている。

いやそりやそうさ。歓迎されてないから。

父は竜宮の家系で、その家系も代々魔術師の家系だ。私がそうさせ

た。

父と母は国際結婚だった為、夫婦別姓だった。

二人共魔術師だったのに、出合いは学園都市の研究所、社内結婚というやつだ。

ちよつとした事件でその研究所をやめて、新しく所長になった故に、集めた機材やデータ、実家から持ってきた霊装や呪具から何までを、上条当麻の右手の不思議な力と不幸で壊されたくないのだ。

「パパ。禁書目録インデックスの治療。」

「禁書目録？ミサカちゃん。パパを困らせないでくれるかな？君は何にどんなことに頭を突っ込んでるんだい？」

「早く。」

「もう。」

渋々といった様子で、ミカの後を追っていくパパを見送って、取り敢えず上条さんの手当をするために、リビングへと向かう。

「あつちはあつちで、取り敢えず火傷は無いですか？炎使いのようだったから。」

「あ、ああ。そつちは？7階から飛び降りて平気なのか？」

「まあ。能力で傷一つ負いませんでした。あとは、インデックスが回復するのを待つしかないみたいですわね。」

ソファに座ると程なくしてメイドが飲み物を運んでくる。

まずは相手の魔術師の所属を明らかにしたい。

身につける装飾に関して私は詳しくないため、少しづつキーワードを見つけていかななくてはならない。

「何か、アレが言つてた名称はありますか？」

「名称？あー、ステイルⅡマグヌス？とかカンザキとか言つてたな。」

「カンザキ？どこかで聞いたことがある。」

「本当か？」

「カンザキ……んん？神裂火織？天草式十字凄教あまくさしきじゆうせいぎようの頭じゃない！」

「あま？！」

「隠れキリシタンの末裔ネセサリウスのようなものの、めつちや強い人間ですね。確か彼女現在ネセサリウスは必要悪の教会に所属していたはず……なら、ならどう

して彼女が？本物の図書館ならなんでこんなことに？」

「まっ、待ってくれ！ついていけない。それって常識なのか？」

ああ、思わず熱くなってしまうた、こんな事話してもよくわからないだろうし、どうやって説明しようか。

「世界一般的に常識ではないので安心してください。えっと、あなたが今まで興味が無かった界限のヤベー奴が身内を何かしらの理由で攻撃し、それに私達は巻き込まれた。ですね。とんでもない事になりました。」

「とんでもない事って？」

「それは、」

「内乱とか、そんなものじゃないのかな？実際、血の繋がりのある身内でも起こることだしね。」

私の代わりに、パパが上条に答えを教える。

少し苛立ちながら、そして上条当麻を警戒しながら。

「スプレーで応急処置がしてあってよかった。傷の割に出血量は少ないし、簡易的な魔術と医療でなんとか塞がったけど、しばらく安静にしておかなきゃならない。」

「……アンタ、研究者だろ？上にこの事報告するのか？」

「ん？僕が報告しなくても、上はきちんと把握してるから問題ないよ。」

「問題ない……」

「ああ、改めて僕は蒼《アオイ》。科学者であり魔術師さ。」

ニコリともしない挨拶に、どこか上条さんは悲しげな表情をする。諦めた顔だ。

「ちよつと。」

「ミサカちゃん、こればかりはね？上条君が詩菜の息子だからって、彼の周りにはトラブルが多すぎる。こんな事今まで君はしでかさなかつた。」

「あら？それは私がパパにとって『都合の良い子』をしてきたからよ。」

「なら、今回も——っ！」

そうして欲しい。そう言う前に、パパは弾かれたようにリビングの

窓、厳密に言えば敷地を区切る門を見つめる。

「早いな。」

夏ゆえに、開け放たれたバルコニーの薄いカーテン越しに、一人の女が立っているのが見えた。

武器は大太刀。

「竜宮蒼さんですね？私は神裂火織と申します。」

挿話 とあるハードミサカのOS事情

最期ラストに一度トだけの奇跡オーダ。

それは、この分霊わたくしの消失と引き換えに起こすことができる世界の法則さえも覆せるほどの奇跡。

本霊に還るのではなく、存在を霧散させて本霊に戻るため加護者にたいしてほかの分霊わたしが向かうことが叶わないことがある為その処置がなされることがある。最期に一度だけとか、言ってるけど分霊なんてたくさん居るから一生のお願い程度感覚である。

私からして十二世紀。

突如として飛来した私に村の長はなぜここに来たと尋ねてきた。

もし現代だとしたら確実にエイリアンとか言われるだろうけれども、その時代は取り敢えず神にしとけば良いだろって言う感じに、てきとうだった。

実際の所私自身明確な存在では無く、その世界を回り道に通った神様が気まぐれに放り投げたちっぽけな分霊といったところだろう。

はじめは自己の固定化のため取り敢えず誰かに願われたかっただけだ。そんな時たまたま小さな声が聞こえた。

「神様がいるなら、どんな奴でもいい。オレを助けてくれ。」

その声こそ、本霊が求める暇つぶしのための物語のキーキャラクター。

私の愛ヒロインし子。輝みちしるべける星。

助けを乞う愛ヒロインし子を助けて英雄譚を作って、それを本霊まで届けよう。私は張り切った。

張り切って、その呼び声の主がいる世界が異世界だと気が付かないまま、なんの調整もなしに世界の壁のようなものを跨いでしまった。だからこそその十二世紀。

小さな声を聞いて現れた救いの女神様になるはずだった私は村の井戸の真ん前に突然現れた何者かになってしまった。

【助けを乞う声が聞こえたので来てみたけれど、時代を間違えた】と言うのは少しだけ恥ずかしかったから、ただ何となく、暇潰しに。とだ

け答えて、その者たちに加護をかけた。

別にいいだろう。こんなお茶目な出来事も、話を彩るスパイス的なものになる。すぐに声の持ち主は見つかって、この村の者たちの中で幸せに暮らすのだ。と。

そう思っておよそ九百年が過ぎた。

それでも見つからなかった。

いつの間にか世界の色々な色や音が見えなくなり、村はいつの間にか竜宮と名乗り私を至宝として見るようになっていた。

魂が剥き出しのままの私ではこの世界だと消耗していくだけ。

本来なら永遠であり、消えたとしてもいつの間にかまた現れるようなそんな存在の筈の私であったにも関わらず、あと四半世紀の命だと。その程度の存在にまで成り下がったと実感させられた。

このまま消えるなんてとんでもない！

人間に成り下がってでも、動物に成り下がってでも愛し子を見つめるのだ。と。

この手で抱きしめて、理不尽だろうとも怒ってやるんだ。この私を呼び寄せておいて迎えにも来ないなんて！

そしてその最後この魂を燃やし尽くして、最期に一度だけの奇跡を呼び起こす。

エネルギーを消耗しすぎて私は本霊に戻れないかもしれないけれど。

この身を人間に落として、やっと確保できた百年。

この残りの百年に願いを込めて、きつと愛し子を見つけてみせる。たとえ手遅れだと言わせてしまっても。

機械仕掛けの尻尾

外では戦闘の騒音が聞こえてくる。

窓を締め切り施錠して、インデックスをミカに背負わせて上条さんを引っ張って地下室への階段へと急ぐ。

パパに戦闘を任せているためか、チラチラと後ろを見ている上条さんは、不安の為か声を張って叫ぶ。

「おい！ミサカのお父さんいいのか！相手は魔術師だろ？」

「科学者やってる魔術師だから大丈夫！パパは基本盾役なのよ。シールドだって一応持つてるしホームよ？科学や魔術から奇跡まで術はたくさんある。」

ドン！と破裂音がして、窓が、家全体が振動する。

窓から見える研究所の一室、倉庫が爆破されたようだ。

確かあそこには、シーツやらなんやらが置かれてたはず。

「ミサカ様。シエルターに行きましよう。」

「そうね。このミカとともに地下シエルターに入って下さい。地下室はミカが開けるまで絶対に何があろうとも開けないこと。」

「いや、おい！」

「インデックスは任せました。私は家を守るために動きます。ミカあなたは上条さんの護衛をするように。」

「……………仰せのままに。」

家と研究所の地下室はつながっており、それぞれ入口は一つずつ階段があるのみ。

シエルターは研究所側の地下室にしかないため急がなければならぬ。

シエルターは1週間ほどの食料がある為、放置しても大丈夫だろう。

取り敢えず、武器は一階にある。倉庫の真逆に位置しているけれど、出口は倉庫の近く。

あの魔術師がこつちに降りてこなければいいけど。

「よし、まだ来てないみたい。」

重々しい雰囲気のドアを力いっぱい開いて上条さんとミカをシエルターに入れる。

上条さんは納得行っていない顔をしているけれども、これは仕方ない。

今回ばかりは上条さんがいないほうが立ち回りしやすい。

あまり、重火器を使うところを見られたくないから。

シエルターから少し離れた場所にその道具はおいてある。

基本的に秘匿したいものばかりで、多分魔導書の類も保管しているはず。

義体技術の研究を行っている研究者に作らせた『筋電多関節人工尾』カスダム・ドラゴンテイル。

重量2・3キロ。全長1・27M。計24個の回転関節と交換可能なアタッチメントからなる尻尾。

ヘビ型ロボットを参考にした形状と動作を参考にし、操作を筋電義手を参考にした、腰につけるタイプの機械だ。

尻尾のアタッチメントは、錫杖の先端のような飾りがあるものから、仕込み針、仕込みナイフやレーザーまで揃っており、今回はレーザーのアタッチメントを使う。

動力源はこの体から微弱に放出されている欠陥電気レディオノイズだったもの。

能力が外界演算ダイクプロセッサに変更されて、電撃は出せないものの、静電気程度の衝撃なら出せるため、それを動力エネルギーとして使用する。

通常の間人ではすでに尻尾というものが失われているため、この研究所で扱えるのは私のみ。

かつて、尻尾を器用に動かしていた頃を懐かしんで作らせたもののため、なによりしなやかな動きができる物を仕立てさせたのだ。

その他には、正式名称は忘れたものの、拳銃。

打ち方は知っているし、扱ったことも十分ある。

持てる知識を以て、相手取らなければならない。

「さて、炎対策はどうしようかな？ 魔術師ってことは、仕掛けがあるだろうし。」

防火シャッターが降りているのか、2階よりその先は進めないようになつていた。

助けを乞う声も聞こえないため、巻き込まれたものはいないと考え、てしまつていいだろう。

一階や二階は二階の突き当たりのドア以外が開け放たれていた。つまり、ネズミはそこにいる。

ホームで戦うのは初めてなので、出力がどれほど出るかはわからない。

「うん？あの時飛び降りた。禁書目録インデックスは一緒じゃないのかな？あの子を保護したいんだけど。」

突き当りから2つ目の角の部屋。普段は休憩室として使われている部屋から魔術師が出てくる。

「住居不法侵入。来るまでに周囲をドローンで確認しましたがなるほど、ルーン文字を印刷してラミネート加工ですか。」

「彼から聞いたのかな？」

「ラミネートはおよそ200℃程度で加工するそうですね。」

「……まさか！」

「歪められたルーン文字ってのは、どうなるんですかね？」

先制は私のレーザービーム。と言つてもただのポインターだけど、相手の目に直接当てる。

「なっ！」

彼との距離はそれほど離れてはいない。

レーザーで目くらましをした直後、私は彼に接近して、足を振り上げる。

狙うは相手の股の間。つまり金的。

私が千年以上生きてきた中でやはり後々になつても余韻が残る攻撃方法で最も簡単なものはこれだ。

四肢を奪うにしてもナイフを取り出して突き立てるのでは時間がかかりすぎる。

なにより相手は衣服で覆われているものの繁殖器具を攻撃されたのであれば、本能的に守りに行くはずだ。

災害時に性犯罪が増えるように、人間は理性という枷を持っていても、結局は生物。繁殖行為は大切なものだ。

それに、私のスニーカーには先端に鉄板が仕込まれている代物。普通に蹴るだけでもかなりのダメージが入る。

「な、魔——ぎやあ!!!!!!!」

詠唱も動作もさせない痛みを与えれば、魔術を使えなければ相手はただの人間。

普段は行えないような手を使ってでも倒さなければならぬ。

悶え苦しむ際に前屈みにならざるを得ない。その顔面目掛けて筋電多関節人工尾の尾先をぶち当てる。

目潰しだ。

彼が言いかけたことは、なんで魔術が使えないんだ？
だろう。

さてはて、なんでかわかるかな？わからないだろうよ。

言葉を紡ぐ時間を与えない以外にも、私の能力が関わっている。

私の能力の根源は現実改変能力。

一度でも友好的になった相手からの攻撃を一切受け付けないのも、現実を改変しているから。

事実は改変できないから、相手が殴ったが私は傷付かないと言う現実が残る。

ただし、この敷地内でのみに限るが、その能力は拡張される。

この敷地は龍脈の噴出点に存在しており、一時的なエネルギー源となっている。

演算とか魔術とか、そんなもの関係ない。私がわざわざ魔術師として存分に蒼が振る舞える場所を捨てさせ、学園都市に来たのか。

別に蒼のためじゃない。

単純に力の出力の仕方が魔術より科学のほうが、私の元いた世界に似ていたから。

彼が魔術をとっさに使うことができなかつたのは、演算で相手に小さな小さなパニックを起こさせているから。

日本語で表すと口と口を誤認させるような、トとトを誤認させるよ

うな些細で普段なら間違えないものを勘違いさせている。

「再現。これは科学とも魔術とも違う私の法則。」

異世界産の技術をこの世界でなんとか作り上げた私の傑作を喰らうがいい！

「一体何をー！」

局部の痛みには耐えながらその魔術師は立ち上がる。

相手は私よりはるかに高身長。

そして私は私が意図して能力を使うことにより、自らの行動で肉体的損傷を受けないことがわかつているからできるこの攻撃。

私は筋電多関節人工尾カスダム・ドラゴンテイルを地面に叩きつけて、短距離で魔術師の鳩尾に飛び込む。

「皆は言う、もっと他があるのでは？とー！」

「ぐはあっー！」

簡単にいえば、機械の力でメチャクチャな速度を出した頭突き。

メチャクチャ科学の力。嘔吐いてゴメンね？だけど不法侵入してくるあなたが悪いから。

魔術師は窓から飛び出て落ちていった。

都合よく窓が開いてるなんて、日々の行いの良さがにじみ出てる！下には植え込みがあるし、死にはしないでしょ。魔術師だし。

さて、パパの方はどうなってるやら。

挿話 命が失われたその時

五条と言う男がいる。

その男は、外から科学者として学園都市に潜入し、科学者として街で暮らしている竜宮の元に潜入した魔術師だ。

・

竜宮が代々保有している仮称「宇宙からの御子」の調査及び竜宮の一族の者の取り入れを命ぜられていた。

竜宮家現当主には四人の子供が居り、当主として有力視されているのは当然長男である。

俺に割り振られたのは、科学の都市に科学者として移住した三男、竜宮蒼であり、一番期待値の低い男のマークを命ぜられていた。

当初、取りあえずマークというものに憤慨してみたものの、蓋を開けてみれば一番の目的である仮称「宇宙からの御子」は三男の蒼に付いていき、科学の都市の住人にいつの間になくなっていった。

魔術結社マジックキャバルに所属しない一族単位での魔術師集団では簡単に学園都市に入り込むことができる。単純に科学者としてその街に引越すからだ。

竜宮への監視も彼自身の監視も当初有りはしたが、竜宮は純粹に科学者として働き、彼への監視も学園都市へのスパイではないとわかったのか、ふと気がついたときにはその存在が消えていた。

竜宮の元に部下として潜り込んで数年がたったあと、竜宮蒼は海外のアウトゴーツツ家の四女、アイリーンと結婚することになった。彼女は学園都市へのスパイであったため、また監視はあったもの一人目の子供を身籠り、その監視もなくなった。

そして生まれた男子が竜宮朝歌^{あさか}。

その翌年に体外受精で生まれたのが、竜宮聖朝歌^{みさか}。

第二子は後の第一位アクセラレータ一方通行のクローンであり、アイリーンはまるでその子をかの御子のように扱った。いや、その行動は当然だったのだろう。

その聖朝歌は仮称「宇宙からの御子」そのものだった。

正直信じられなかった。人間でない力の塊が意思を持ったものが、人間の子供としてこの世界に誕生し、その力に耐えうる肉体が存在していたことに。

聖朝歌嬢……ミサカ嬢曰く、あれ程適応する者は供物として捧げられたとしても珍しかったそうだ。

しかし、家族四人の幸せな生活は、そう長くは続かなくなった。

およそ3年前ミサカ嬢が筋ジストロフィーという病にかかってから、家庭は崩壊していった。

当然ミサカ嬢を夫婦は最優先した。

朝歌坊っちゃんはその悲しみを、一人学生寮に移り、音信不通。そこで夫婦は必死に探しはしなかった。

夫婦の最優先はミサカ嬢であったからだ。

夫婦はありとあらゆる治療法を探し、探し抜いたある日、アイリリーンが何者かによって暗殺された。

刺客は魔術師で間違いないだろう。余り竜宮は語らなかったが、ミサカ嬢はブツブツと何かを呟いていたのを覚えている。

数週間たち、ミサカ嬢は自由に動くことすら不可能になった頃、御坂美琴という少女のクローンを使った量産型能力者計画レディオノイズと言うものの表向きの実験として、筋ジストロフィー患者を対象にした体の移し替え実験シユヴェスターズ義妹達計画を計画し、第1実験のみ竜宮が担当して行った。

とうぜんながら、ミサカ嬢の指示に従って行われた第1実験のみ成功し、その他の実験は失敗に終わった。

カスタマイズされた新しいミサカ嬢は、より強くなっていた。

アルビノであった体をリユースティックに変えて、クローンの体を強度のある軍事クローンに変えることで肉体的には成長したそうだが、やはり一方通行のクローンよりも適合率が低かったそうだ。

そこで俺はミサカ嬢から第一位の調査を依頼された。

かつては五条の手先であった己が、今や宇宙からの御子の手先となったとあればかなりの出世者だ。

彼女は惜しみなく科学と魔術の知識を我々に与えてくれた。

その殆どが人類には未だ不可能であり、彼女自身も、『得意分野でないので詳しくない』と言っていたとおり、何十世代先の科学知識を有し、何百年もの前のすでに失われた魔術の術式を有していた。

彼女の持つ魔術はプロトタイプであり、脳の汚染度が高い代償がある代わりに、強力なものばかり。それこそ神話に登場する神々の権能を振るうかの如き術ばかりだ。

「教えたのだから、給料分働いてね五条さん。」

念押しされて俺は絶対能力者進化の研究チームに参加したのだ。

第一位、アクセラレータ一方通行と直接面会することは叶わなかったが、彼の実験のモニタリングをするうちに、立ち振舞から察するに、相当危険人物であることだけは確かだった。

しかし幼少期のミサカ嬢を知っている俺は何故か、アクセラレータ一方通行に惹かれ、いつしか詳しく分析し行動を予測しようとしていた。

そしてミサカ嬢との共通点をどんどん見つけていく。

攻撃パターンは大胆かつ直線的な力のゴリ押し、そして派手を好む様だ。

考えながら物事をこなしているように見え、突発的な発想により攻撃方法を変えていた。

そして何より、クローンミサカへの問いかけ。

彼は人形を相手にしているだけ。と説得させられているはずだ。それなのに、わざと恐怖を煽る笑い、問いかけ、表現をする。まるで、謝らせるために怖い言葉を使う大人のように。

ミサカ嬢もそれを好む。単に脅しているだけなのかもしれないが、実験動物がおイタをした際、わからないだろうにも関わらず責め立てていた。

そこである仮設が浮かび上がってくる。

一方通行はクローンミサカを殺したくないのではないかと。

モニタリングしていて、これまで一度も野外実験の終了、つまりクローンミサカを殺害する瞬間を映したことがなかった。

第1実験でさえ彼の能力により弾丸が跳ね返り死亡に至った、自己

防衛範疇の事故。

無力化して実験を終了させようとしていた。

データは残っているはずだ。音声データがなくとも、何かしら読唇術で読み取れるかも知れない。

探し、再生し、そしてまた探す。

その間の実験にもビデオカメラを仕込んだりして約数週間がたった。

そしてやっと見つけた。衝撃的な事実を。

それはミサカ2号から。

ミサカが死ぬ直後、つぶやかれた言葉がある。

『もしやあなたが……』その直後にミサカは死亡していた。

アクセラレータ
一方通行の能力を受ける前に。

それ以降、どのミサカであれその言葉に似た言葉を発している。

『あなたこそ』

『あなたは、』

『なんてこと！あなたは』

確認できるだけでも、ミサカは必ず一方通行に対してそう言葉を発して、自決している。

心の底から恐怖やらなんやらが湧き上がってきた。

今まで一方通行は一度もミサカの殺害をしていない事になる。

何故か、その原因はミサカ嬢にあるだろう。

聞くところによると、ミサカ嬢の体が作られたのは量産型能力者よ

り前になる。

およそ2年前。

天井博士というクローン量産の責任者によると、プロトタイプ0号と

フルチューニング00000号の次にミサカネットワークへの接続テストを行っていないクローンミサカとして01号リユースタイプというものが作られている。第

1実験のミサカ000001号とはまた別の個体で、正式名称

シユウエスターズリユースタイプ『義妹達01号聖朝歌』それがミサカ嬢の肉体となっている個体

だそうだ。

もし、ミサカ嬢の抱え込んだ知識から何までがミサカネットワーク

に漏れ出していけば？

ミサカ嬢からミサカネットワークに関して情報は出たことがないため推測の域を未だに出ないが、個性の強いあの方の影響を無意識下にクローンミサカが、死の直前に受けるとしたら？

情報は高いところから下に降りていくのが自然の流れるように、強いものから低いものに流れていくとしたら、ミサカ嬢の探す愛ダーリン子というものは一方通行で間違いないだろう。

まだ確認していない最新の実験映像がある。

そこに、確証が持てるものがあれば、そう思って、俺はビデオカメラの映像を再生する。

場面は真つ暗な路地裏。

戦闘音が銃声がどんどん近くなり、足音が2つ、こちらに向かってくる。

『だいたいよオ。オマエら最期に何言おうとしてるんだ？』

『それは、実験に関係あることですか？とミサカは意識をそちらに向けて返答します。』

戦闘音が止み、足音も止み、男女の声のみ音声拾われている。映るのは二人分の足のみだ。

『気になってたんだ。オマエら、結局自分で死ンじまってるから、よくわかんねエ。』

『良くはわかりませんがこれまでの個体全て、最期にあなたに銃口を向けたことに酷く……間違いであると感じています。とミサカは返答します。』

『蘇生させようとするんだが、無理つウのおかしな話だよなア？血流を動かして心臓を動かしてもアリヤなんだア？』

『理解不能です。ネットワークの奥底に、基盤の様に知識があるかのような、断片的な映像で、助けてくれ。その声が聞こえた。そういった映像が。とミサカは思い出します。』

『助けてくれ……か。』

『……ッ！』

『ン？』

『その声……わかりません！ミサカは！ミサカは』

『おいまたか？』

『誰の記憶なのか、叫んでいます！助けるべきものに銃口を向け、銃弾を当てたミサカを！糾弾する声が！ミサカは、そんな、あなたは、あなたに!!』

映像にはしやがみ込み、頭を押さえるクローンミサカ。そしてそのミサカに駆け寄り、心配そうに手を伸ばす一方通行が。

『ああ！ミサカは！ミサカ！ミサカミサカ!!なんてこと、誰ですか？許して、ミサカを！』

一方通行の顔が苦痛の表情に変わる。

そして右手を振り上げ、ミサカの右手を、ミサカが自分に向けた握る銃を弾き飛ばした。

普通ならありえない。クローンミサカが感情を露わにした叫び声など。

『シユヴェスターですか、この記憶も感情とやらも、他のミサカは死ぬ直前になって、奥底のシユヴェスターの記憶に干渉して、しまつていた。苦しいです、とミサカは。』

『シユヴェスター？』

『感情というものは、このようなものだったんですね。わかります。とミサカは他のミサカに同調します。』

ミサカはあなたを愛している。だから他のミサカは、自分でとミサカは結論づけます。このミサカも』

言葉はそこで途切れ、フラッシュユが起こる。

フェードアウトして、映像がものを表示する頃には、頭がまる焦げになった死体と、呆然とそれを見つめる一方通行がそこに映っていた。

その後は他と同じく、他のミサカが後片付けしていくだけ。

とんでもない事実。

この実験の要である、クローンミサカを一方通行が殺害するという物が全くなされていなかった。

一方通行はどんな理由があれクローンミサカを生かそうとし、ク

ローンミサカはそれの手を拒否し自殺している。

気がついてしまったのなら、知ってしまったのならもう止まることは出来ない。

五条はこの事を報告するべく、受話器に手を伸ばした。

聖なるひと

三人をシエルターに残したまま外に出てみれば、いたるところに戦闘痕が刻み込まれており、道や草原などは土がむき出しになってしまっていたりとひどい有様だった。

戦闘音は未だに続いており、ワイヤーとワイヤーが擦りあうギョルギョルギョルと言うような耳障りな音が聞こえている。

街灯が破壊されているため、月明かりを頼りに辺りを警戒しなければならぬのが面白くない。

少しだけ進もうとしたところで、蒼の叫び声が聞こえた。

「ワイヤーー」

ひんやりとした何かが素肌にほんの少しだけ食い込む。

一歩後ろに下がり、レーザーで前を照らしてみると、途中で先のようなものに光が遮られた。

暗所故に張り巡らされたワイヤーに気がつけなかったらしい。

危なかった。あそこからさらに進めば怪我をしてだろう。耳障りな音は本当にワイヤーがこすれる音というわけだ。ワイヤーを辿って見れば、一人の人間に行き着く。

豊富な胸をまるで強調するようにTシャツを胸の下で結えて、ジーンズは片足のみハーフパンツの長さほどに切っている。

先程はよく見えなかったが、かなりヤバ気な服装の痴女でいらっしやる。

「怪我をしたくなければ引いてください。」

「勝手に敷地に入ってきた侵入者の言葉にしては傲慢すぎやしないですか？敷地内から出ていってください。」

「お断りします。」

神裂火織と名乗っていた女は壊れたもう一つの街頭の上に立ち、こちらを見下している。

その女を中心に、七時の方向にパパがいる。すり傷だらけで頬から血が汗のように滲んで白衣を汚した。

「なんじのつみをせんでいしそのさばきをくたす刑法代130条より抜粋、不退去罪を参照。」

私が呪文を叫ぶと同時に、神裂火織が戦闘態勢になろうとして、目を見開いた。

「な、動けない？ 超能力？」

「道よ。開けよ。」

「っ！」

神裂を中心に張り巡らされていたワイヤーがそれぞれ音を立てて落ちていく。

サルワール。その言葉に意味を乗せて発動させるものだ。

「神裂火織。たしか聖人と呼ばれる者の中にいましたよね？ 拳銃って効くんでしょうか？」

「効きますよ。今の私に防御の術がありません。無抵抗の相手を殺すことができるなら、話ですが。」

「1つ言っておきましょう。命に価値はないです。」

持っていた銃を眉間に突きつけても、彼女は強く私を見つめて、口を開いた。

「ならば私も1つ言っておきましょう。インデックスを引き渡さないのであれば、あの子が一番苦しむことになるのです。」

「何故？」

「完全記憶能力というものはご存知ですか？」

「ええ。まあ。稀によくいる。」

「そのせいで、インデックスは死んでしまう。だから、だから！ 私達はあの子の記憶を消さなければ！」

見えない何かによって、体を拘束された神裂火織は焦ったように叫ぶ。

正直言って、なんでインデックスが死んでしまうのかはわからない。

魔術書の毒はなんとかしてるんだろう。そもそも記憶を消せば毒が消えるだなんて事、そんなの必要なときに魔術書を読んで、必要ななくなったら記憶を消して毒のダメージがなくなるとか、そんな都合のいいことなんてない。

なら、なんで？ 記憶しすぎてパンクして死ぬとか思ってるの？

「面白い嘘ですね。この私が、記憶しすぎて死ぬとかそんな絵空事なこと知らないと思ってるんですか？一度何も知らない赤子に約千年の記憶も四十億年分各地で集められた情報を脳みそに叩き込んだことがあります。人間の記憶の限界を調べるためにね。結局それは1年半程しか生きませんでした。」

しかし、死因は福山型先天性筋ジストロフィー。先天的な遺伝子異常による病死でした。」

その瞳が動揺して視線が揺れる。

「結果が出ています。」

いくら幾万の本を暗記したとして。いくら長生きしたとして。

四十億年もの情報量に勝るものなどない。

何故私がそれを知っているのでしょうか？答えはかんたんです。なぜなら——」

銃口を眉間から人中に移動させる。

流石の聖人も恐怖を覚えるのだろうか？体が小刻みに震えている。武者震いだといいいけど。

この圧倒的な蹂躪も全てはバックアップのパパのおかげ。

私は別に魔術の呪文を叫んでいるだけ。魔力を練らないこの言葉は呪文としては形を成さず、単なる言葉の羅列に過ぎない。

能力者が呪文を唱えることで、相対する魔術師にインパクトを与えて注目させる。その裏で魔術師のパパや部下が私の指定した呪文を唱える。

私の能力のおかげで、今回聖人相手に誤魔化せた。

「——この私こそ十二世紀の日本に飛来したガイウチュウウカラノカミサマ仮称『宇宙からの御子』だからです。」

知っているでしょう？と聖母のように笑いかけてみても反応は返ってこなかった。

「無反応ですか？教えたのは冥土の土産なんかじゃないんですし、生き残ってくださいいね？まあ、打つのは人中にですけど。」

引き金を引くその瞬間、建物のほうから叫び声が。

聞き慣れない男のもの。

「それは本当なのか？四十億年とはっ!!!」

ぎこちない動きで、継るように私のもとに寄って来る。

物陰に隠れていたパパがそれを制するように立ちはだかる気配がするものの、まるで気にしないように無理矢理足を引きずって私のもとに近付こうとする足音があった。

「やかましいですね。それがどうしたって言うんで——」

その瞬間、大きな地響きと共に1階から光線が溢れ出した。その光線は建物を突き破り、遙か彼方宇宙まで届くほど、高く高く柱を作っていく。

「ったく！必要悪ネセサリウスの教会には後できっちり請求させてもらいますからね！さあ立ち上がりなさい聖人。殺さないであげるから、あれをなんとかしなさい！相

応の対価を払ったのならばインデックスは助けてあげるから！」

上条当麻はヒーローなのか？

地下シエルターに急いで向かってみれば、分厚い扉が引きちぎられて通路に転がっていた。

その近くには上条さんが右手を前に構えて、光を受け止めている。右手で何かをマイナスにしているような、そんな感覚を感じ取ることができる。

「なんてことー！」

インデックスが何かをつぶやいているが、うまく聞き取れない。

そもそも言葉として成立しているかさえわからなかった。

「そんな、なんで魔術を？使えないはず……」

「ちよつ、何？仲間なんだからそれくらい知つて欲しかったのだけどー！」

「そんな、こんなの。」

「あれは何？」

「わかりません。初めて見る魔術です。」

「そう。ならやることは一つね。」

「一体何を？」

訳かわからないといった様子の魔術師達は、私を静かに見下ろすだけ。うまくサポートしてくれるといいんだけど、突貫工事もできていないこの不格好なチームには圧倒的な力が必要なんだ。

「アイツみたいに拳で勝負すんのよ。たとえ術者でも意識を刈り取っちゃえば、あんな複雑な術式なんて形成できないだろうし。」

簡単に、殴つて倒す。それだけ。

筋電多関節人工尾カスタム・ドラゴンテイルで勢いよくインデックスの方に向かうと、上条さんカスタム・ドラゴンテイルに向かっていた光が、すべてこちらに向く。筋電多関節人工尾ではインデックスに刺さってしまうだろうから拳だ。

光に包まれる直後、後ろからワイヤーが飛んできてインデックスの体勢が崩れると同時に、また光が柱となり、天井を焦がした。

インデックスの向く方に光が放たれていくようだ。

「魔術師！私の言うとおり、魔力に言葉をこめなさいな！」

光をかき分けるかのように私はどんどん前に進んでいく。それじゃあ埒が明かない。

「道を示せよ……！」

「さ、道を示せよ……！」

神裂が復唱する。そうすると、私を拒むように降り注いでくる光の柱が二股に分かれて、光の壁のように私の横を通過していく。

私のために道が切り開かれた。

「警告、第六章第十三節。新たな敵兵を確認し戦闘思考を変更、戦場の検索を開始……完了。最も難易度の高い敵兵『???』の破壊を? 胥」

「私が最も難易度の高い……ね？流石にそうだ。」

そうでなければおかしい。私の能力でインデックスの攻撃は通らないもの！

でも、それだけじゃない。悪いけど書庫に干渉させてもらう。

「致命的な知識汚染を確認。魔術の術式の逆算に成功しました。舩??? 臆? 賣? 罫? 膊? 釣芋? 鎬? 跌芍? 膨?、対古神道用の術式を組み込み中……失敗。再検索を行います。」

私を撃破するに値する術式を組めないよう、再検索を何度も何度も繰り返している。

やるなら今だ。

開かせた道を無理やり進んで光に押し戻されないようにインデックスの頬に手を伸ばし、思いつきり殴りつける。

「悪いけど、そう簡単にやられるわけには行かないのよ！」

コキンと、関節の音が聞こえてインデックスがぶっ飛んだ。大丈夫。感覚的には首の骨は折れていないはず。

私が確認をするその前に、私の横を上条さんが駆け抜けて、そしてインデックスの頭を右手で掴んだ。

何かが碎ける音がして、インデックスがまた何かをつぶやいたが、眠るように意識を失ってあたりが呼吸音のみとなる。

「不味いです！上！避けてください！」

そう、神裂の声がしたので上を見ると羽根がふわふわと舞い降りてきた。

それが壁に当たると爆発音とともに衝撃波で上条さんとインデックスが吹っ飛ばされる。

私は影響外だが、それは次々とぽっかり空いた天井から降り注いでくる。

光が羽に変わったようだ。至るところで爆発し、連鎖的に羽根は爆発していく。

「くそっ！神様よお、インデックスが何をした？」

責任転嫁は止めてもらいたいもの。こんなことになったのは人間のせいだというのに。

「はは、いいぜ！この世界があんたの作ったシステムの通りに動いているっていうなら、まずはその幻想をぶち殺す！」

そう言って上条さんは右手を上突き上げて羽根を一枚一枚消していこうとする。

でも、もう遅い。

わからないの？その動作こそ、失策。

あなたが動く度に余計な風が生まれて羽根が舞い上がる。

あなたが一枚一枚消そうと藻掻くせいで、インデックスを安全地帯に運べない。

「やっきのー！」

「あつ、道よ示せよー！」

一瞬、たった一瞬だけ羽根が降り注ぐことのない空間が生まれる。助けることができるのはたった一人。インデックスだ。

連鎖的な爆発がインデックスと上条の体にダメージを与えていく。インデックスの服を引っ掴んで神裂に向かって投げた。

「オラアア!!!」

無事ではすまないだろうが、生きることにはできる。

それに彼女なら、何を差し出しても治してくれと懇願するものもあるだろう。

ついでに爆風に翻弄される上条さんを掴んだとき、体が浮遊するか

のように、ふわりと浮いた。

今更だけど、右手はなにか……能力やそういった類の物を無効化する能力なのかもしれない。

ああ駄目だ。下手に人間なんか助けようとするから不幸を踏むんだ。

吹っ飛ばされる方向には壁。

「あつ。」

・

「お疲れ様だね？検査の結果は異常なし。おでこの内出血以外健康体だね？」

カエルに似た医者はそう笑っているけど冗談ではない。痛いし、恥ずかしい。

くつきりはつきり分かってしまった。

これもあれも全部ウニ野郎が悪い。

上条さんなんて敬語なんていらねえね。あんなのウニ野郎さ。

あのとときの浮遊感は、上条の右手が私に触れたことにより、私の能力が打ち消されでもして、能力が機能しなかったから、爆風に飲まれて吹き飛ばされたからだ。

いろんなことをしれたのはいいけど、おでこに痣ができた。痛い。

「まったく！私のこの美しくプリティーでキューティーなおでこちゃんに、傷が付いたというのにまあーだ寝てるのね？」

「まあ、彼は全身に爆風をうけたみたいだからね？仕方ないんじゃないや

いかな?ともかく行くかうか?」

診療室から出るとそこには神裂と炎の魔術師が待ち構えていた。律儀に最敬礼のお辞儀をした神裂は、まるで高官に報告をする兵士のように背筋を整えた。

「今回の件は、多大なるご迷惑をお掛けしてしまい、大変申し訳ありませんでした。」

「まあ、昨日は散々だった。おでこに痣で来ちゃったし、研究所は地下から天体観測ができるようになったしね。」

「はい。今回の件、イギリス清教がすべて全額負担。御遺族にも誠意を持って対応すると、貴方に誓います。」

「良い判断よ。私としてはそこらへんきつちり、パパあたりと調整してくれば。お金で解決できるなら、それでいいわ。」

昨日の件で、私の専属の使用人の体の一部が見つかった。

上条を庇ったのかまきこまれただけなのか、なんでインデックスはあんな事になったのかはもう知ることが出来ないけれど、科学の街で科学者の使用人が魔術が原因で死亡する。というのはかなり問題視されるものらしく、イギリス清教が誠意を持って対応してくれるほど、大事なのかも。

「上条当麻に会っていかないの?あれこそインデックスを救った救世主でしょ?」

「……本来であるなら、そうするのが正しいでしょうが、インデックスの待遇についての調整をしなければならぬので。それに、貴方を知ってしまった以上報告しなければならぬので。」

「あつそつ!なら不法侵入した魔術師ちゃんたちはさつきとこの街から出ていってほしいわね。」

「君、かなりフランクになったかな?」

「いい子でいるのを止めることにしたのよ。」

あの様子から上条当麻のことなんかまるで分からないようだ。

そりゃ、一日、そのたった数時間の出会いで相手を心配しろだなんて人間には出来ないだろうし。

私は、どうだろう?なんで助けようとか思ったのかはどうでもいい

けど、上条当麻を高く評価してる。

異能を打ち消す右手を持った高校生。

奇跡も加護も打ち消すから不幸になるらしい。

今まで命を狙われたり、見世物にされそうになってきたりしたため、パパは嫌がった。

でも、昔を覚えていないほうが良いかもしれない。

「上条当麻くんは、記憶喪失だね？喪失と言っても物理的な物だから消失といってもいいんだよ？」

「喋ったり歩いたりは？」

「できるよ？ただ、思い出の記憶がないんだね？」

「はあ。運のいい。」

「色々教えてあげてほしいんだよ？よろしくね？」

カエルの顔をした医者は一方向的に押しつけて歩いていってしまう。めんどくさ。

上条当麻と書かれたプレートのあるドアの前にいつの間にか誘導されていた。

ここまで来てしまえば、顔を出したほうがいいと思う。

ノックを2回すると、「どうぞ。」と上条の声が聞こえてきたので、ドアを開ける。

個室のその病室は角部屋で、光が多く差し込んでくる。

上条当麻はベッドから起き上がっていた。

上条の近くの窓は開け放たれており、そこから風が入り込んで白いカーテンがひらひらと揺れる。

「あの、病室を間違ってますか？」

上条当麻はわざとそう言っただけの反応を窺っていた。

丁寧な言葉を使うように気をつけて。

カエルの医者曰く、イメージブレイカー幻想殺しと言う能力が彼に備わっており、それは奇跡を殺す奇跡。

しかしそれは奇跡しか打ち消すことができない。それによって生じる物理現象や反応を打ち消すことは出来ないらしい。

羽は爆発するだけだった。爆発によって生じた衝撃波と熱が私と

上条にダメージを与えたのならば、それは打ち消すことができない物。

「私にそんな冗談効かないからね。」

「あはは、引つかからなかったか流石だな聖朝歌は。」

「一応、私の名前フルネームで言ってもらっても？」

「え？童宮聖朝歌。俺の遠縁の親戚だろ？」

「やっぱり記憶ないんですね。残念。」

上条当麻は目を少しだけ泳がせたあと、バツの悪そうな顔をする。

原因は分かかってないようだ。

「私はミサカリアウターゴッツと名乗る者ですよ。上条さん。」

愛し子

序章 守られし者

肉体と魂の関係性は考えうる限り、互いの強度が釣り合わなければならぬ。

だからこそ、頻繁に行われる体の調整をしに病院に行く度に、困った顔をされてしまう。

体を鍛えれば、精神も鍛えられるという言葉があるのであるならば、逆もしかり。魂が体を強化していかうとするのだ。

そのために、医者は「改良の計画を建てるのが難しいんだよね？」と毎回私に意見をしてくるが、自然な流れなのでどうする事もできない。

「ミサカ嬢、お疲れ様です。」

「五条が新しい世話係なのね。男はあまり良くないと思うの。同性がいいわ。」

「そういうと思ってました。新しく雇うまでお供するだけですから。」

「まあ、良いけど。」

誘導された車の後部座席には、極々自然にギターケースが鎮座しており、これからどこに行くのかがとてもわかり易い。

ギターケースの中にはメタルイーターMXと呼ばれている対戦車用のライフルが入っているはずだ。

入手経路は五条の関係先が大いに絡んでいる。

五条が一番手に入りやすく、殺傷力が高いのがこの銃だっただけで、特に意味はないだろう。

「狙撃手は私の得意分野ではないのだけれど？あなたがやるのかしら？」

「とんでもない。反動だけでヘルメットが粉々になるものを素人の俺が扱うんですか？能力者のお嬢様とは違うんですよ。」

今回は誰かしらに依頼されたとか、助けるだとかそういうものではなく私のための行動だ。

願ってやまない愛ダーリンし子を探し当てたのだから。
ただ、堂々と会いに行くには少し障害がある。

彼を利用しようとする者が現れたのだ

彼は元々とある実験に参加しているのだが、それは問題ない。五条をその計画の研究者として送り込んで工作させたりしていた。

その計画自体五条の働きかけと奇跡によって現在休止中にまで追い込んでいる。

やっと、日のもとで会えると思った途端、外部からの研究者が彼を利用しようとしているという事が発覚した。

掠め取られるなら、掠め取られる前に殺さなければならぬ。

甘言で彼を誘惑し、絵空事を並べて落胆させる奴を殺さなければならぬ。

まだ彼はあしらっているが、気が変わったらどうだ？

「無風です。誤差はないでしょう。」

「こういうのもオートにできないわけ？ 追尾とか。」

「それは難しいですね。距離、700。」

雑居ビルの屋上に移動した私達はそれぞれ双眼鏡とスコープ越しに標的を確認する。

スコープにはコンビニから出てきたか弱そうな少年を確認できた。

重そうなコンビニ袋を手を下げて歩く彼に、突然近づいて行くナイ

スパイ的なジャージアクセラレータの女がいて、何か腰に手を当てて注意するように、そしてなぜか一方通行はいやいや聞いているというこれはどんな

ことまさか彼は年上好きであるおんなはもしかやカノジョ
!?!?!

「おいおいおい！誰だあのジャージ美人??」

「警備員アンチスキルです。現在彼女の保護下に一方通行様アクセラレータはいます。」

「保護下?!ひとつ屋根の下ってことか?!春?春なのか?!ウエディングは近いってことかコンチクショウ!!クソおクソお赤ちゃん抱っこしてえ。末永く祝福してやる。」

「落ち着けストーカー!保護下だって!それに彼は子供としてしか認識されてないって!」

「そんなことない!同じ学校じゃないし先生と生徒の関係じゃないな

らありえる！あれくらいのは母性掻き立てられて愛情から結婚するやつだって！年下の男の子ってゆーてるもん！」

「まず落ち着いて!!おちついてください!!」

冗談はさておき、

二人の動向を確認して見るあたりまるで親子のような振る舞いであることがわかる。

まるで夜中に抜け出してコンビニに行った反抗期の息子を追いかけてたしなめるように。

「彼女は黄泉川愛穂。警備員で、当麻君の通う学校の体育教師でもありますね。」

「体育教師？心配になってきたぞい。一方通行見た目通り儂げ美少年で食に無頓着。三合のご飯平らげないと寝かさないぞ！ってやられてるかもしれない!!」

「体育教師になんの恨みがあるんですか？」

「いろいろとね。さあ、か弱いミサカちゃんは射撃射撃！」

そんな二人の後ろからコソコソとあとをつけるいかにも研究者といった風貌のハゲがいる。ターゲットはこいつだ。

三沢塾と言う塾の研究者で、学園都市の技術を盗むために入り込んだとか、入り込んでいないとか。

ともかく一方通行の周辺を騒がす悪玉菌はさつさと殺処分するに限る。

「本当に彼が愛し子なのよね？」

「ご自身が一番よくわかってるのでは？」

「……この距離でも彼から故郷を感じられるわ。彼が愛し子だっこともちやんと理解できてる。今ならミサカネットワーク接続ができる。死の経験値を見て、感じて自殺を見て、思いを見てはつきり分かった。それでも、確認したいの。彼がそうよね？」

「はい。そうです。」

最適解を聞いてぐっと息を潜めて標準を研究者に合わせる。

悪いけど死んでもらうわ。私のためにね。

二人に近付こうとする研究者の頭に狙いを付けて引き金を引く。

ものすごい発砲音と共に、少しの衝撃を肌で感じながらも直ぐにスコープで確認するが、暗くてよく見えない。

「十二発着弾。吹き飛びました。」

「やったりい。」

「黄泉川が肉片に気がついて一方通行様アクセラレータを連れて行ってしまいましたが？」

「構わないわ。警護が強化されるでしょ。さっさと痕跡消してずらかるわよ。」

大人しく大人からの庇護を受けいれて連れて行かれる中性的な彼こそがこの学園都市の能力者第一位。

アクセラレータ
一方通行。

私をこの世に呼び寄せた張本人、つまり愛ダーリンし子だ。

私を呼び載せてしまったばかりに本来の性質が捻じ曲がってしまった哀れな子羊ちゃん。

変質者に襲われてとっさの自己防衛で変質者に粉碎骨折の重症を負わせてしまったことが理由で遠巻きにされて孤独になった少年。

「さて、次は誰を殺ればいいのかしら？統括理事長さん。」

イヤホン型の無線機からは、男の声がぼんやりと聞こえてきた。

「次の依頼はデータを送る。複数人だが大丈夫だろうか？」

一章 妹達

8月8日。

「レベルアップおめでとうございます。ミサカ嬢。」

「当然の原理だ。やはり愛し子ダーリンは一方通行で間違いないようだ。」

「ダイクプロセッサ外界演算は現実改変能力だ。」

いくつもの選択肢を自分の都合の良いように扱う、魔神マジンの如き力と言える。

違うとするなら、元の状態を正しく理解できる範囲のみだ。

「お嬢様なら超能力者Level5になれると思っただんですけどなんででしょう？」

「Level5だと都合が悪い。ここのトップが私がどんな存在だなんて分からないとかそんな冗談ないと思うし。近々呼ばれるんじゃないかな？私知ってる人と同じ人間ならね。」

「そうですね？……え、知り合いつてことは相当年のある方ですよ？理事長つて本物のアレイスターⅡクローリーなんですか？」

「さあ？どうだろうな。」

・
・

午後、一人優雅に収集ゲーで脳死プレイをし続けていると留守番中に玄関のチャイムが鳴った。

玄関には、御用の方は研究所受付までお願いしますと札を引っさげていたので、居留守を使うことにしたのだが、チャイムを連打されてしまったので、仕方なく出ることにした。

「あーはいはいはい！用事があるなら研究所の——」

玄関を開けたら私が出た。

いや、色のある私。機械的な、感情の薄い顔をしてそこに御坂美琴が立っていた。

そしてチャイムの真ん前には、ここ数年音信不通になっていた我が兄、朝歌がそこに居た。

ストロベリーブロンドの少し長めの髪に、アースアイと呼ばれる珍しいタイコーズブルーと黄金の瞳。

すべてママから遺伝したイケメンなら間違はなくお兄ちゃんだ。

「あ、うお、お兄ちゃん？とミサカ：まさかお兄ちゃんこの聖朝歌ミサカの顔を忘れた??？」

「ばーか、いくらクローン同士だからって見間違うか。お前のほうが幼い顔してるし色が違うだろうが。」

「え、じゃあそのイケてる面で女の子を引っ掛けて？てか、連絡なしに帰ってきてなんのつもり？あなたのご飯はもうないからね！」

「え、いや、食べてきたし。」

「あ、そう。そりゃ、中2だもんね。」

このネタは早かったかー。

使用人はたしか、見習いメイドちゃんがいたよね。その子にお茶を用意させて、とりあえず話を聞こう。

「それにしてもどうしていきなり帰ってきたの？そっちの妹達シスターズよね。関係あるわけ？」

「いや、ないぞ。実は俺Level4能力者になったんだ。能力名は重力グラビティキ、重力操作能力で勧誘がうごくって研究所じっかに戻ってきただけだ。」

「Level4！私もそう！おそろい！」

「そうだな。」

「うん、お兄ちゃんずっとこっちにいるわけ？荷物とかどうすんのだ。」

「あー、それよりもまず、こいつの話をきいてやってくれないか？」

完全に忘れていた妹達シスターズのミサカに目をやると、またしても感情の宿っていない視線が帰ってきた。

「端的に言いますと、一方通行がピンチです。とミサカは切り出します。義妹シユウエスター力を貸してください。」

二章 情報

「なるほど？魔術師を名乗る男が一方通行に接触しようとしたと？」

ミサカは一方通行に付き纏う男と対峙した時の状況を話してくれた。

外途中で、援軍としてたまたま通り語ったお兄ちゃんが助けに入っただと。

「はい。変態であると確信し、すぐに間に入りました。と、ミサカはあのときの光景を思い出しながら答えます。」

「彼は他に何か言っただけじゃなかった？愛し子とか、素体とか。」

その問いに、どこか不安げな表情のような雰囲気のみサカが弱々しい声で

「そういえば、とミサカは思い出しながら考えてみます。ミコのソライと。」

そう言った。

「御子の素体……御子が仮称【宇宙からの御子】だとすれば、一方通行を贄にして呼び出そうってことか。竜宮のやつかもしれない。」

重くお兄ちゃんの言葉が押し掛かる。私が育てた魔術家系が私の不利益になる。実兄にも言われたことのある『お前は詰めが甘い。』という状況だ。

「聖朝歌。間違えないんだな？」

「間違いないよ。」

私を受肉させる為の器自体が、一方通行のクローン。どこからかその情報を嗅ぎつけて接近してきた？

こちらら科学者に忙しいってときに？

外にいる竜宮のくせに……まさか、科学者と繋がってる？

「一方通行は、狙う科学者共をそっちはわかっている？」

「はい。とミサカは頷きます。」

少し不安は残るけど、ミサカネットワークの力を借りてどうにかしなきゃ。

「科学者は任せる。魔術師は私がやる。」

「さて、魔術師には俺も加わる。魔術は使えないが、俺には重力漕手グラビティキがあるからな。」

とりあえず黙ってるより動いたほうがいいというお兄ちゃんの独断で街に繰り出したわけだ。

「それにしてもお兄ちゃんが帰ってきてくれてミサカ嬉しいよ。ミサカのこと嫌いになったって思ってたもん。」

「最近まではな。今は好きだ。お前の有り難みをよくわかったってやつだ。お前が理不尽なキレ方してもまあ、俺より何年も生きてるからその積み重ねと齟齬が生じてんだな。違う種族だしって思えるけど、一般女子は違った。」

「ミサカの中で、お兄ちゃんの株が大暴落。リーマンショック並の不経済に到達しちゃったよ。こうなるとすべてが嫌になる。さてはお兄ちゃんスケコマシってやつだな。」

「まあこの顔だ。モテる。」
「わかる。」

お兄ちゃんは完全にママに顔がそっくりだが、どことなく漂う雰囲気
気が竜宮のものだ。

そもそもアウターゴッツも竜宮も系譜をたどれば、一度途切れたとかそんなことがなき限り、私に行き着くようになる。

竜宮も魔術師の家系というよりは祈祷師の家系だ。それがいつしか魔術師を名乗って祈祷も魔術として扱われたから今は魔術師だけだ。

ともかく神の系譜だからめちやくちや顔の整いが良い。うれしい。

「あれ、ミサカさん？」

と、そんな声が聞こえた。

声からして知り合いではない。そもそも、入院生活が長かったため、私のことをミサカさんなんて呼ぶ女の子の声なんてありえない。人違いだろうと振り返った先には、大きな花冠をつけた少女が立っていた。

「あつおお。こんな知り合いいませんわ。」

「人違いだろ？あの腕章見えるか？風紀委員だ。絡まれるとうざい。」

「厄介になったことが？」

「痴話喧嘩に巻き込まれて少し。」

そう言うとお兄ちゃんは携帯を取り出して「あっちが近道なんだ。」と路地裏を指さして私の手を引つ張っていく。

そして路地を2、3回曲がったところで私を抱き上げて高く飛んだ。

グラビティキ重力漕手の能力のようで、体に感じる重量が弱まるのがわかった。

滞空時間が長く、壁などを蹴つて風紀委員の少女を飛び越えて、もとの路地に戻ってきた。

「そうだな、昨日おそわれたという場所に行ってみよう。ホントはあの猫口野郎に会つとけばよかつたんだが、流石に無理だな。」

「猫口??」

「ニャーニャーうるさいシスコンの変態だ。金髪のサングラスでアロハシャツを着てる……」

すごい、印象が最悪な人物だな。途中で話が終わったけど、どうしたんだ?……居たよ。居ましたよ。該当人物らしき人、少し手の長い高校生ほどの背格好で、金髪グラサンアロハシャツ。

「やー、朝歌つち奇遇ですにやー。で、お隣が噂の病弱な妹ちゃんかにやー?俺は土御門元春ですたい。」

「お初にお目にかかります。朝歌の妹の聖朝歌です。土御門さん。」

「朝歌つちと聖朝歌ちゃんが知りたいことはわかってるにやー。着いてくるといいぜい。」

「……ミサカ、俺より前に出るんじゃないぞ?いいか?」

と、お兄ちゃんは妹を変態から守るときの顔をしてそう忠告した。土御門はそれを見て少し悲しそうな表情をしただけだった。

個室サロンに案内された私達は、とある小説を目の前に出された。

今、有名になりつつあるゲームのもとになった小説だ。

「ニャルラトホテプって知ってるかにやー?」

「ああ。トリックスター。千の貌を持つもの。」

「邪神の一柱にて、常に主を嘲笑う、それでいて気まぐれな、この世界ではフィクションのクトウルフ神話の神。」

「昨日第一位を襲おうとしたのはこいつですたい。」

自称ではあるがにやー。」

この世界には、クトウルフ神話の神話生物及び旧神や旧支配者。外なる神の存在を確認できていない。

ルルイエさえ、ドリームランドさえない世界線なのだ。

たとえニヤルが紛れ込んだとしてもそれは私の元々の世界で、とりあえず私を確認するはず。

それでいて、私が目をやってる一方通行を狙うのはらしくない行動だ。

「それで、これがやつの容姿だにやー。」

そして自称ニヤラトホテプの写真を見せられる。はっきりと映し出された顔からして、ニヤルらしくない微妙な美形の部類に入る男。

「こいつなら、また接触しようとするだろうな。」

「なら、そこで殺る。決まりだね」

挿話 ヒーローになれぬ者

そのビルには窓がなく、どこかゲームじみた内装、例えるならSF系のラスボスと対峙するステージかのような、太いケーブルと生命維持装置の如き水槽が置かれている。

その装置に入っている男は、何故か逆さまに浮いている。

装置にはいくつものモニターが展開されており、そのいくつかは学園都市の監視カメラの映像が映し出されていた。

「厄災の愛し子はやはり第一位か。プランに支障はないだろうが、君は探し人を見つけることができたということか。」

その男は静かに監視カメラに映る少女ミサカを見つめて笑う。

その男からしたら、その姿は可憐で繊細な少女ではなく、創作神話に出てくるトリックスターごとく人類を玩具のようにして遊ぶ邪神が人間に化けているようにしか見えなかった。

宇宙からの御子と呼ばれていたその少女のものと姿を見たことあるその男にとって、クローンミサカの姿でいるその少女はまるで己を嘲笑っているようにしか見えない。

しかし、その男は理解している。己の目的など少女は知らない、単なる魔術の使える官能小説家という目線で見られているということ

を。
「しかし、君はやはり邪神。第一位の性質を変えてしまった。彼はもうヒーローになれないだろう。」

画面越しにミサカと目があつたその男は、静かに笑うだけだ。

見ているわけではないが、本能的に見られている。と感じる。その理由は弱まっているにもかかわらずその人が神であると主張する神気のためなのか、単純にそう思わせる才能があるのかは、その男にはわからない。

その目を見た途端に、第一位にたいする、庇護欲が生まれるのをひしひしと感じつつ、それに抗うように他の監視カメラに目を移す。

「第一位。私は君の起こした^{キセキ}災厄を羨ましく思う。救済の^{キセキ}代償に大きな力を持つてしても君はいつだって^{ヒロイン}庇護者なのだから。救われるこ

としかできないのだからね。」

監視カメラに映るのはまるで親子のように、反抗期の息子とそれに手を焼きながら愛おしくてたまらない母親のように歩く黄泉川愛穂という女性と一方通行アケセラレターと呼ばれる最強の邪神カミに魅入られ寵愛を受けたがために、世界でたった一人救われてしまう人間だ。その魂はまるで聖母のごとく清らかで世の殆どの異性が彼を我が子を思う様に庇護しようとするだろう。

「例え、邪神でも声が神に届いた者か。」

別の監視カメラに映る邪神と人間の兄は今か今かと、邪神を騙る男を狙って待っている。

「現実改変能力か。プランのために少し利用させてもらうぞ。」

三章 砕けるは緑色の硝子玉

8 / 9

夜空は分厚い雲で覆われていた。

星どころか月さえ見えない空は、まるで目隠しをされた様に不安を掻き立てられて仕方がない。

「愛い。今日も愛子は警備員ダーリン アンチスキルに怒られてるのね。」

「これ、楽しいか?」

私は対戦車用のライフル越しに一方通行いとしごを盗み見ていた。家を抜け出したのか、コンビニを出た途端に母猫が子猫を掴むように、保護者となっている黄泉川愛穂という女性の警備員アンチスキルが首根っこを掴まれている。

その中で、視界の済で黒服の男を発見する。その男はニヤルラトホテプにしてはブサイクな顔で笑う。

「ターゲットを確認。」

「どこだ。」

「右手側の角。重力漕手グラビティキを。」

「おうよ。」

銃弾に重力をかけてもらい、それを計算した上で弾丸を放つ。

ヒットしたが、倒れる様子はない。

黒服の男がこちらを見たと思うと、それなりに早い速度でこちらに向かってきた。

それに合わせるかのようにお兄ちゃんが踵落としをキメるが軽く受け流されてしまう。

「ああ、愛しの君。」

「愛しの君い? 何気持ち悪いこと言ってくれちゃってるの? あなた、私のニヤルラトホテプじゃないわね? 誰?」

「何を言うんだい? 僕のことを忘れただなんて! 君を救いたいんだ!

こんなに君を愛しているのに! あんな奴が居るから!」

「うっさいわね! 愛し子ダーリンに何しようっての?」

「君は黙って王座に座ってればいいんだ! お前たち!」

男のコールがひびきわたると、路地裏からはエグい腐敗臭とうめき声がだんだんと近づいてくるのがわかった。
歩く死体だ。

「あっはーおもしろいわねえ!! あなた本当に偽物だったってわけえ! へへ、はは! ぎやははははは!!」

貴方が私の事を思ってくれる貌なら、こんなことするわけ無いわ! 馬鹿ね、どうせどっかの他の化身に遊ばれたんじゃないやなくて?」

ゾンビ達はよたよたと歩きながらこつちに向かって来ようとする。腐敗が進んでいるものが多く潰すのなら簡単に潰せてしまうだろうが、そんなことする必要もない。

相手がただの人間だとわかりきった以上、その道具たちを利用してやろうじゃないか。

「地球ホシより魔力を抽出。」

筋電多関節人工尾の先をビルに突き刺せば、地脈や龍脈を無視して魔力を取り出す。たとえそれがビルの上であっても。

「輝ける星よ。煌めく生命よ。抱擁せし慈愛よ。」

筋電多関節人工尾の先からどんどん大きな魔法陣が広がっていく。

不自然な月明かりの影が模様を幾重にも幾重にも生み出していく。

「祝福を! 確かなる祝福を与えよ!」

影はやがて光り輝く杖、いや指揮棒となって私の手のひらに吸い込まれるように納まる。

「従え、我こそ地獄の神なりてサルワーレ!」

魔力を練れないなら、地球から吸い取ればいいじゃない。

私が魔力を練れない理由は単純に、魔力の生成方法が違うからだ。それならば地球に巡る魔力を拝借してしまえばよいのだ。

「星の魔力を! やはり愛しの君はできる神ってわけだね。」

チリになっていくゾンビ達を横に、その男は私に触れた。

空間がブレる感覚とともに、この意味を完全に理解する。

テレポーション
空間移動

「おのれえ!」

「さあダンスを踊ろうか。」

意識の暗転は直ぐに治り、脳が辺りを見渡すようになれば、大きな空間だった。

豪華であるが、質の薄いまるで金メッキのような装飾品。偽物だらけの骨董品。

そこには黒髪の少女が驚いた顔をしていた。

そして緑色の髪の男が冷たい眼差しを私に向けてきた。

「苦勞だった。死ね。」

緑色の男がそうつぶやくだけで、ニヤルラトホテプが死んだ。死んでも人の姿をとどめている以上偽物だったのだろう。

「簡単に殺してしまうのね。あなたが第一位にちよっかいをかけていた組織のボスってやつ?」

「そうだ。貴殿を呼び込むためその男からの提案だ。」

「やめてほしいわね。」

「当然。しかし、全てそちらで処理してしまっただろう?こちらとしてはもう貴殿と出会ったのだ。その必要はもうない。」

「そう。なら何をさせようっての?」

目の前の男は、アウレオスと名乗った。そして私をある机の前に誘導していく。

そこにはインデックスがいた。

「この子を、どうしろと?」

「彼女は禁書目録インデックス。膨大すぎる脳の情報量のため、一年ごとにすべての記憶を消さねばならない。」

「それで?」

「永遠なるものよ。無限の記憶を維持する術を授けてほしい。」

ああ、彼は昔のパートナーとやらなのだろう。

「一つ、貴方に良いことを教えてあげましょう。私は一度、何も知らない赤子に約千年の記憶と四十億年分各地で集められた情報を脳みそに叩き込んだことがあります。」

「な。」

「赤子の脳はそれでも機能して生きましたよ。まあ、先天的な病気で

病死しましたが、それと記憶は何ら関係のないこと。脳を甘く見過ぎですね。」

眠っているであろうインデックスの髪を撫でれば、ゆっくりとインデックスが目を開ける。

「うん？あれ、ミサカ？」

「知ってます？彼女は一年前の記憶をきちんと持っていますのよ。」

開け放たれていたこの部屋のドアの向こう側に炎の魔術師と当麻を見つける。

私を見つけたのか、驚いた顔をする二人はすぐにこの部屋に入ってきた。

「貴殿、それはどういう？」

「地球^{ホシ}より魔力を抽出。願え、祈れ、信仰せよ。我が本質は宇宙なりて。」

私の存在が部屋一体に広がって、その空間が私となった。

誰もインデックスに手出しできないように。

変態が生き返ることのないように。

「あなたの目的は、インデックスの記憶容量の拡充。しかしそれをする必要はもうありません。」

「する必要がない？」

「インデックスの一年周期は約先週ほど前です。なぜ私がそれを知って、穏やかな気持ちでここに立っているのかわかりますか？」

「……………なに？」

「なぜ、一年がたったにも関わらず、科学の本拠地に彼女がとどまり続けるのでしょうか？」

私の話にも、当麻が炎の魔術師に突っつかれて徹底的な言葉を放つ。

「お前、いつの話してんだ？」

「こいつは今代のパートナーさ。こいつは僕たちがなし得なかったことを、やってのけたのさ。ほんの一週間前にね。」

アウレオルスは信じられないと、インデックスを見つめる。

インデックスは自身の状況がわからずにいる。自分を知る初対面の相手が、自身に馴れ馴れしく接してくるのだから。

「とうま！」

「インデックス、危ないから私のそばに。」

「でも、」

「みんな黙ってるけど、赤毛の魔術師は君を守るために君を攻撃してたツンデレさんよ。ツンデレの意味は当麻に教えてもらいなさい？ 貴方をこれ以上傷つけるどころか、守ってくれる人なんだから。」

「……そうなの？」

「内緒よ。隠したい年頃だから。」

しー、と人差し指を唇に当ててやるが、赤毛の魔術師は、顔を赤くして「聞こえてるよ！」と喚いていたけど、聞こえるように言ってるだけだからね。

一度だけステイルは聞かされていた。

この学園都市の統括理事長曰く、彼女は邪神だと。

なにより、僕たちからしたらありえないことだと思っていたが、現在の彼女を見る限り正しく彼女が邪神と呼ばれるのも致し方ないと思うってしまった。

ステイルⅡマグヌス。心を乱されるな、気をしっかり持たなくては彼女に飲まれてしまうぞ。

「インデックスは、あなたの事なんか知らないのよ？ アウレオルスウ。あなたが大好きな少女は、誰からでも愛されるような聖女^{ヒロイン}ね。それ故、世界で立った一人の彼女の主人公^{ヒーロー}にしか行為を向けないの。それはわかるでしょう？」

邪神は嗤う。そう表現するしかなかった。

悪で僕も笑われているかの様に、ひどく彼女の言葉が突き刺さる。

踊るように彼女はインデックスを自身の後ろに隠すように保護すると、止めの一言を口にした。

「残念ね、かつての主人公^{ヒーロー}さん。あなたには何もできない。だってインデックスはもう救われたから。あなたじゃない人間によってねえ！」

悪魔よりもゾツとする笑い声をあげながら彼女、邪神ミサカはただ

ただ馬鹿にして嗤う。

「うぐううう!!」

ヘイトを一番集めやすいようだけど、アウレオルスIIイザードは上条当麻を睨みつけた。

気持ちは分からなくないが今彼を失うと一番悲しむのはインデックス。彼女の笑顔を守れるなら、上条当麻でさえも守らなければならぬ。

「倒れ伏せ！侵入者共！」

炸裂する怒号、しかし何も起こらなかった。

上条当麻の情報からして、なにか起こると思っていたけど何も起こらない。

「なに？」

「ごめんなさいね？あなたの魔術は封じさせてもらってるわけよ。」

邪神の笑みは変わらない。

「そもそも、アンタは私の愛し子^{ダーリン}を狙って危険に晒した！あのねえ？それだけでも立派な罪よ？わかる？私はそういう人間がだいっきらいなわけ。人間如きが私達みたいな存在を利用するとか、しかも利用しといて結果出せないとかおちよくってるわけ？え？未然に防げたけど、未然に防いであげたけど！わかる？アンタは死ぬの。私の手で惨たらしくね！ねえ皆目を閉じて耳をふさいでいて？」

さっきだけで、僕も上条当麻もインデックスも動けずただただ、僕たちに向けられた言葉に従う。

ちらりとだけ覚悟して目を開けて上条当麻を見やるが、能力ではなく殺意による圧力なようで、右手も意味をなさならしい。従うほうがいい。本能が訴えていた。

目を塞いでいてもなお、あふれる光が瞼を透かしてその色を見せてきた。

それはまるで宇宙の様な極彩色だった。

四章 襲撃者

8 / 10

筋ジストロフィー治療実験

シユウエストターズ
義妹達計画

最終報告

本計画は置き去りを対象とした
チャイルドエラー

筋ジストロフィー治療実験である。

被験者の人格をデータ化し完全に肉体と切り離すことで人格データを作り出す。

超電磁砲レールガン御坂美琴から提供されたDNAマップを元に作り出した受精卵を培養し人格データを肉体に入れることで実験成功とする。

肉体は培養したものでありクローンではない。

この実験が成功すれば筋ジストロフィーの治療及び不死化の可能性が見いだせる。

しかし、第一実験以外の第三十四実験、計三十三実験での失敗を確認。

人格データの作成過程で被験者の精神が崩壊することにより被験者が死亡する為である。

第一実験での成功理由を論理的・学術的観点で証明することができない以上損害を最小に抑えるため、実験を凍結し研究チームは義妹シユウエストターズダイクプロセッサ
外界演算育成計画に転移とする。

樋口製薬・第七薬学センターの一室で超電磁砲レールガン御坂美琴はディスプレイを見ていた。

『はは、何よ。クローン計画なんてなくて、ちゃんと私のDNAマップは正当に使われてるじゃない。ドナー提供で髪質や体質が変わったって聞くと、きつと私と同じような体格の女の子が成功したのよね。これ。髪色が私そっくりになって、見間違えたんだわ。』

乾いた笑みを浮かべて、力なく地面に座り込む。

安堵した表情で、清々しい表情で。

自身のクローン計画を暴きに来た彼女は、クローン増産計画が凍結

されたことと自身の提供したDNAマップが正当な方法で使われた事に安堵したのだった。

実験内容がクローンに別人格を移植するという事実には、彼女は気がついていない。

哀れなものだ。と私は思う。同時に幸せだ。とも。

監視カメラに残された、ハッキングされた映像を解析して取り出した映像を見て私は思う。

「義妹シユウヱスター? どうかしましたか? とミサカは問います。」

「なんでもありません。貴方はあなたの仕事をしてください。私は終わりましたよ。」

「およそ46秒で完了します。とミサカは計算します。」

目の前にいる御坂美琴と瓜二つの彼女こそ、御坂美琴が探っていたクローン。

超電磁砲増産計画の軍用クローン。妹達シスターズ。

私と違って模造品の体に作られた人格を叩き込んだ量産型。

肉体の製造もたった14日で終わる短命中の短命。

彼女は死ぬためだけに作り出された人形だ。

そう。人形。

「一つ、聞きたいことがあります。」

「なんですか? こちらは作業中なのに。とミサカは心の中で悪態をつきます。」

「軍用クローンの癖に随分感情豊かだね。まあ、貴方はクローンってどう思ってるわけ?。」

「…そういえばあなたもクローンでしたね。確か、一方通行アクセラレータの。とミサカは貴方について思い出します。」

「そんなことよりさつさと、作業してよ? こちらならな〜んで後処理つきあわされてんの? 監視カメラハッキングされて、あなたのこと探られてたつてのに。」

「それに関してはミサカは関係ないです。とミサカはあの無能な研究員を呪います。」

データの消去次第、また警備員さんに案内されて研究員を出してい

く。

どこも薄暗く、まるでホラー映画やゲームに出てきそうで怖い。

「ひえ、おぼけでも出てきそう。」

「怖いのですか？とミサカはおちよくります。」

「こんな暗い場所、生きてる人間でもいたら怖いよお。てか、今日もやるの？例の操作場で。」

「当たり前です。とミサカは断言します。」

・

8 / 11

「あら、ミサカ。」

慈善活動の一貫で見廻りをしているその最中、私と同じ顔であろうクローンミサカを発見した。

「義妹シユウエスタですか。とミサカは振り向きます。」

「何してるの？」

「ミャー。と鳴く動物がピンチです。降りることか出来なくなったようです。とミサカは雑に説明します。」

そのクローンミサカの見上げていた木の上には黒猫の子猫がじつとクローンミサカを見下ろしていた。

怯えは多分落ちることの恐怖だろうが、猫というものはこの高さからならば子猫だとしても平気なものだ。

「助けなくてよろしいのですか？とミサカは問いかけます。」

「助ける必要はないわ。猫という生き物はあの程度から落ちても無問題よ。人間と違ってね。」

木を足で揺らすと子猫が落ちてきて地面に着地する。

それを驚いたように見るクローンミサカはすぐにかげより安否を確認する。

「ほら。」

「強引過ぎます！とミサカは怒りを顕にします。」

「猫はとても強い生き物なのよ！なんたって猫は——」

「あんだ達何者？」

「はい？。」

後ろから、すぐ後ろからそう言う声が聞こえる。

御坂美琴だ。

学園都市のレベル5、序列第三位にしてクロールミサカのオリジナル。そして私の第二の素体

「あんた達、私のクロールなの?」

「はい。」

「例の計画は凍結したはずでしょ? 何であんた達みたいなのが存在するのよ?」

「ye je u y a k s n 2 7 8 q n s l」

「へ?」

「これは——」

とクロールミサカが、続けようとするのを手で静止させる。御坂美琴が絡んではきつと面倒くさくなるからだ。

「提供者であるあなたには開示されていない情報です。我々は貴方に開示できる情報はありません。」

「全ては愛し子の為ですか? とミサカは確認を取ります。」

「ええ。全ては愛し子の為。」

「ダーリン? ダーリンってなんのこと? 教えなさい!」

ぐいっと、私の肩と腕を掴む。それだけで痛いのが、ここで屈してはならない。この女をあまり愛し子に近づけちゃいけない。そんな気がする。

「痛い目にあいたいの? 力づくで聞いたっていいのよ。」

「レベル5ともあろう方が、か弱い私を力任せに情報収集をするのですか? まるでスキルアウトのように。」

スキルアウトのように。とその言葉が気に触ったのさ、私の拘束を解くと言葉を吐き捨てる。

「くっ! 好きにしないさい。勝手にあとを付けさせてもらうから。」

あっけなく手を話した御坂美琴は正義感溢れているのだと思う。力任せに情報収集をすれば良いものをそうしないのだから。

でも、その選択に甘えさせてもらおう。今回だけは。

「そういうえば、貴方ナンバリングは? この前の子と違うけど。」

彼女から聞こえない程度の声に、クローンミサカも小声で返答してくる。

「ミサカは9982号です。貴方とあっていた個体は7777号です。とミサカは返答します。」

「7777号は勝ち確ね。なんだって審査員は私だもの。」

「なに?とミサカは驚愕の事実には慄きます。つまりいくらミサカが争ってもそれは無駄なこと?」

「あつたり前じゃない!聖朝歌様よ?私ってばね!Nが騒いだところでLRたりうるこの聖朝歌様には及ばぬことなのよ!」

実験が凍結と完全になった事でクローンミサカは各地に送られることになった。流石に一万以上の同じ顔をした子をずつと匿う事ができるはずもなく、学園都市に残ることができるのは五名ほどだ。その残るものについて話し合いをしているが、一人は7777号を私が推すので確定。あとは勝手に統括理事長が振り分けるだろう。

「聖朝歌!」

とそこで仄かに色めき立つ女子高生の視線を浴びてもなおおしれつとした顔をしたイケメンが話しかけてきた。

ストロベリーブロンドの少し長めな髪の毛に、アースアイと呼ばれる珍しいタイコーズブルーと黄金の瞳。

その両目を縁取る長いまつげのイケメンは、間違いなく我が兄、朝歌お兄ちゃんだ。

昨日ビルの7階あたりから飛び降りた私は、軽く足を挫いて救急車で運ばれた。挫いただけなので湿布をもらっただけで入院してはいないが、お兄ちゃんはずごく心配してくれている。

「家にいないと思っただらこんな所で何してるんだ?帰るぞ!」

「心配しすぎよ?捻っただけじゃない。」

「駄目だ。」

「ってわけだから、あとはミサカに任せてミサカは帰るる。」

「グットラック!と、ミサカは連行される貴方の幸福を祈ります。」

腕をつかまれて連行される私にそう言って、オリジナルの事を任せられたと承認したクローンミサカだったが、なぜかその背後からバチバ

チと雷が飛んできた。

「地球ホシより……ええい！間に合わん！そらあ！」

バリアを形成してその雷から私とお兄ちゃんを守る。

魔術をあまり使いたくなかったが、致し方ない。

私はまだ全能を取り戻してないのだから。

「なんだ？」

お兄ちゃんが私をぐいっと後ろにやり、オリジナルとの間に入る。

「アンタ、実験の関係者？」

「なんのことだかさっぱりだな。人にいきなり能力を向けてくるなんて、とんでもないやつだ。」

御坂美琴が私達に気を取られてるすきにミサカが路地裏に走っていく。

「ちよつと！もう！あんた達待ちなさい！」

そう言うと、オリジナルはコインを片手に持ってこちらに向けてきた。

「常盤台の超電磁砲レールガン。その手はなんだ？」

「またなきや、痛い目に合わせるわよ！」

「なぜ待つ必要がある？その手を下げてもらおうか。」

「できないわね！」

「そうか。聖朝歌ミサカ！ついてこい！」

お兄ちゃんがオリジナルより早く駆け出す。

「能力の事は聞いた。自爆技を使う。お前は俺にも能力をかけてくれ。」

「自爆技？本番でそんなことしたことはないから、怪我するかもよ？」

「構わない。」

路地裏を走っていくとブルーシートが上に張られたエリアに到着する。

「ここは？」

「スキルアウトのたまり場さ。ビニールシートが張られてるから風が吹きにくい。」

そしてここには気体爆薬。屋外で少量なら静電気程度の衝撃だが

密室空間や風が舞い込みにくい空間なら瞬時に爆破する。体内に入っている内部爆発はしないが、これを散布する。」

殺虫剤のような容器に入った気体爆薬とやらを散布していく。どこか殺虫剤に似た匂いで少し嫌になる。

程なくしてオリジナルが到着した。

匂いを怪しんでいるが、ゆつくりとこちらに歩いてくる。勝者の笑みを浮かべて。

「おっと、ここら一体に気体爆薬を散布させてもらった。電撃なんかうつたら仲良く爆死するぞ?」

お兄ちゃんが見えないようにライターを渡してくる。

これを使つて火を起こせばいいのか?

使い方なんてわからないけど、ここを押せばいいのかな?お兄ちゃんにはもう能力保護をつけてるのだし、いいよね?

私がライターをつけると同時に、視界は炎で包まれた。

・

ふと、今日はいつもよりスキルアウトに絡まれた。

そんな風に思った。黄泉川の過保護な保護下から抜け出してはコーヒーを買い漁る日々慣れてきてはいたものの、どこかそう、誰かに見られてる感覚が今日だけは薄かった。

「あん?」

路地裏の街頭の届かない暗闇に、見たことのある顔がスツと姿を表した。

無表情で、それでいてやけに絡んでくるクローンが。

「どオしたんですかア?まさかオマエまた……ああ?」

何かと理由をつけて絡んでくる奴とは違い、はつきりと殺気を顕にするその姿はどう考えても異質だ。

「なんでこんな計画に加担したの?」

「ああ?何だいきなり?」

「答えなさい!」

「はア?オマエオリジナルかア?」

「そうよ!」

暗闇から姿を表したのは、肌を爛れさせ、制服が少し焦げた妹達シスターズに瓜二つの御坂美琴だ。

「あア?」

たしか黄泉川のやつがスキルアウトのたまり場で爆発があつたとか言つてやがつたが、コイツが犯人かア?

そう、思考した直後歌が聞こえた。

ビルの上にいるいつもの視線の主であろう、人物が十日夜の月を背にして舞うように動いていた。

「この一撃は月の鉄槌。月は罪を拒む場所ならば、かのものに相当の罰を与えよ!」

月が光り輝いてその輝きが柱となつて目の前にいた御坂美琴に直撃する。

「はつはア? なん? はア?!」

中年男性のコンビニ店員が何事かと駆け寄り、近くにいた俺を店の中にとりあえず引きずり込んだ。自然と反射は使わなかつたようであるがままに店の中に転がる。

「君、あれが何かわかるかい?」

「わからねエ。だが、誰かしらの能力だろうなア。第三位が襲われた。」

「第三位? ……常盤台の超電磁砲レールガン

が!」

コンビニにいた少ない客がやり取りを聞いてざわつき出す。

「どうしたじゃん? ……一方通行!」アクセラレータ

ちようど飛び込んできた黄泉川は店の前の状況を見て飛び込んできて、ちようど俺を見つけて駆け寄ってくる。

その様子に、中年男性は思い出したかのように状況説明を始めた。

「支部に連絡しとくじゃん、とりあえず一方通行、わかってるじゃんね?」アクセラレータ

程なくしてパトカーと救急車が到着する。

黄泉川のやつがいろいろ話していると、一人の警備員アシキルに話しかけられた。

「被害に合った彼女となにか喋ったみたいだけど？」

「実験がどオコオいつてたなア。よくわからねエが。そしたらよオ、上から歌が聞こえてきやがった。」

「歌？たしかに、防犯カメラだと二人共上を見上げてる。おかしいな。歌なんて聞こえないし写ってすらいない……いや、うん。協力ありがとう。」

ニコリと、わらって他の警備員アンチスキルと合流するそいつを見送ると、黄泉川のやつが頭を撫で回してきた。

「偉かったじゃん？御坂美琴は命に別状はないじゃんよ。それにしても心配したじゃん。帰ったらお説教じゃん♪」
「チッ。」

五章 救済準備

8月20日午前6時10分。

時計の針が示す時間はそんなつまらない時間だった。

寄り道するには遅く、帰るには早い微妙な時間。

能力が他の研究所に露見し、検査依頼を必死に断りつつ奔走してこの時間。

今頃一方通行は黄泉川愛穂に首根っこ掴まれて自宅に連行されている頃だろう。

「聖朝歌様！」

「あれ、当麻どうしたの？」

「聖朝歌様、小銭は持っていらっしやいますか？」

と、必死にお願いする我がはこの上条当麻と偶然遭遇した。

人を殺しそうなツンツン頭をブンブンと上下させている姿にちよつと引く。

「上条さん、ちよつと2000円札しか持っていませんでしてね？」

「2000円札って、珍しいわね？」

「あとできつちり返すから貸してくださいませ！」

「いいわよ！おごつてあげるから少し暇つぶしに付き合つてー。お兄ちゃん変えるのが七時までそれまで暇なの。」

「ありがとうございます聖朝歌様！って、兄弟いたのか？」

「一つ上のね？今度紹介するわ。」

汗だくの当麻にはスポドリを私はきなこ練乳を選ぶ。

「きなこ練乳？」

「めっちゃ甘い。でもこの味好きなのね。私。」

「そういや、聖朝歌の能力ってなんなんだ？」

「ふふ、聞きたい？聞きたい？私の能力は外界演算未知なるデータ処理機械。大能力者よ。自身と一度でも友好関係を気づいたものの現在環を自由に歪めることのできる力。」

「大いなる術。」

ポツリと、当麻がラテン語を話し出す。なんでそんな単語があの上

条当麻から出てくるのかはわからなかったが、たしかにそうだと思う。

「アンター！どうしてこんなところでブラブラしてんのよ！」

私が怒鳴られた。

怒鳴る声に聞き覚えがある。

私の声によく似た声で、ごくごく最近感じたことのあるピリリとした雰囲気。

御坂美琴だ。

「なんだ？」

不思議そうに当麻が先にそちらの方を見た。

「誰だこいつ？」

「私の名前は御坂美琴！あなたはさっさと覚えなさいこのどバカ！」

記憶喪失の当麻はわからないだろう。

一度会ったことでもあるのかな？

「それよりも！何でここにいるの？実験は中止になったんじや……」
実験がなんのことやら分かりはしない。どちらにしても凍結されたんだ。

「ああ、噂に聞いてますよ？数々の実験施設を破壊し回ってるとか？ですが私はその実験の現状を話す義理なんてないです。一つアドバイスをするなら、貴方が今できることはない。ですよ。」

凍結されたことなんて教えてやらない。せいぜい苦勞するといいいだつて襲ってきた人に何を話したつて無駄なもの。

何より、貴方がもがき苦しむその姿が好き。

大きな力を持つてして、善良であると信じてやまず、自分の正義が当然だと信じてる貴方が好き。

暴れて壊して他人の命を奪つてその最後に、自分ができる事なんてはじめから無かつたと思ひ知らされるその瞬間の顔が愛おしくて、待ち遠しくてたまらない！！

「義妹シユウエスタどうかしましたか？」

「あ、あー！次はなんですか？上条さんついていけないです！」
私と同じ声が聞こえた。

そこには御坂美琴の移し見、クローンがいる。

確かあれは、助けを求めてきたクローンミサカだ。

「え？増えてる？御坂2号？」

「ミサカの名前はミサカですが？と、ミサカは即答します。」

「御坂ミサカって名前なのか？ミサカってあんま珍しくない名前なのか？」

知らないっての。まあ、珍しいんじゃないの？

「ちよつと、来なさい二人共。」

「その言葉に従う理由がミサカ達にはありませんよ。」

「そうです。と、ミサカは義妹シユウエスタに同意します。」

『行つたほうがいいんじゃないかなー？／escape。』

ミサカネットワークを通じてミサカの一人が話しかけてきた。

一人、というのはおかしい。クローンミサカは体がたくさんある个体だ。私も似たようなものだからよくわかるが、必ず核が存在する。今話しかけてきたのはその核だ。

〈それはどうして？〉

『実権が、続いているならもつと破壊工作するでしょ？／return。それなら愛ダーリンし子を、研究したいって施設が減るわけ／return。誰かに取られるなら、取っちゃえばいいんじゃない？／escape。』

〈そんな、迷惑かかるじゃない？〉

『散々人生捻じ曲げて、性質さえ捻じ曲げていて何を言うかこの邪神め！／escape。』

〈なにをいうか、このミサカワタシは。私に人格乗っ取られてるなり損ないのぶんざいでなにをいうかー！〉

『いいの？／return。いいの？／return。いいのかな？
／return。そつちが手を出さないなら私が手を出しちゃうぞ！／escape。』

〈くそー！くそー！やめろよー！ミサカワタシじゃなかったら殺してることだかな！てか総意ミサカってばからかいで人の貞操奪うやつとは思わなかったわ。〉

『な、人を痴女扱いだど？／return。ストーカーに言われたくねえよ！／escape。』

〈神つてものはなあ！可愛い人間いたら、見守っちゃうものなんだぜい！〉

『正当化するだとお！／escape。』

「なに？お前ら姉妹ゲンカか？」

「このミサカはともかく、私は竜宮だよ？まあ、細胞レベルまで一緒よこころ三人。」

「一人だけ、おかしくないか？なら。」

「学園都市の医学の高さよ。まあ、第一実験者たる私しか生き残らなかったけど。」

私の言葉を聴いて何か引つかかるところがあつたのか、キョトンとして、お前体悪いのか？とそう聞いてきた。

「今まで、院内学校に通つてたぐらいか弱よ？一応、夏休み明けから正式に柵川中学に編入予定なのよねー！」

「なら、もう体の方は大丈夫なのか？」

「大丈夫とは言い難いわね。定期的に病院に通つてるぐらいよ？そもそも実験成功例が私しかなかった実験だったのよ。」

「医療実験つて公にされてるのか？なんか、裏の組織が暗躍してーとかそんな感じがする。」

「されてるわけよ。公になると氏名とかはふせられるけど、そこにいる御坂美琴さんから提供されたDNAマップってゆーものから、万能細胞を取り出して体まるごと作つて、そこに精神を移しちやおうつて言う実験よ。」

「すげーな、なんか。」

「それで、私が第一実験者私のパパが医療関係の実験器具の開発もしてて、開発費をチャラにして、全権を譲る代わりに私を最初の実験台として真つ先に治療を受けさせてもらったのよ。」

もともと隠れみのの実験だし、ほとんどの患者は置き去りチャイルドエラー研究員も野心だけが先行きする捨て駒だもの。

「そして、私だけが成功した。科学的には皆成功してたんだけども

精神が追いつけなくて発狂してそのまま絶命したそうよ。研究員も必死だったし、何より患者も必死だった。プロトタイプが成功したんだもの。」

まあ、成功理由も私が体を乗っ取れたり、電子化されても活動できるからってのもあるんだけどさあ。

「現代医学でも治せない筋ジストロフィーって知ってるかしら？徐々に筋肉が動かせなくなつて、呼吸もできなくなつて心臓が止まる。」
「っ！」

「実験したそのときなんか、骨格は曲がつてひどいものよ。でもね？私はその実験があつたからこそ、やっと自分の足でこうやって立てるの。感覚があるって最高よね。」

「その実験で多くの人が死んだわ。その人達はどうでもいいの？」

拳を握りすぎて腕がプルプルと震えている御坂美琴はそう、言葉をひねり出したと思う。

知ったことか。お前の主張なんてどうでもいい。

「貴方、何が言いたいわけ？私達は自らの意志で実験に参加したのよ？」

「それでも！それでも死ぬなら意味がないでしょ!？」

「受けなくても、受けても死ぬ！でも生きれる確率は受けたほうが低いのよ！貴方にはわからないわ！殆どが置き去り。チャイルドエラーお金なんてないし希望も安らかに眠る安堵の家もない！あのね、他の被験者は前払いで実験協力が貰えるの。この意味わかるわよね？」

あれは、人間には過ぎた技だ。当然人間が耐えられるわけがない。それも、それでも研究員は実例を信じて手術を行った。被験者は実例を信じて生きる希望を持つて手術に挑んだ。

「見てたわ！協力金を渡すとき、大人はね？大人は！これで今のうち好きなことをしておきなさいって！あのね？研究員だつて皆を死なせたくなくて、純粋に、純粋に助けたいと思つて集まつた人たちがほとんどな訳よ！一部が汚い欲にまみれた大人だった！」

知つてたわ！私だけは知つたのよ、あんな実験なんて、成功するはずないって。いくら研究員が頑張つたつて、努力したつてただの人

間の精神は電子化なんてできないわ！発狂して死ぬより動かなる肢体のほうが辛いわ。だから、私は言わなかった。」

「それでも、努力して努力したら長く生きられたんじゃないの?!」

「黙れよ、人間。お前は結局この私に不満があるだけだ。それをあいつらを使って正当化するなよ?」

関わるな、お前に自覚はないだろうが私と関わるほど、お前は無様になるぞ。私は用事がある。あとのことは頼んだぞクローンミサカ。」

「はい。とミサカは即答します。」

『ちよつとちよつと!／return。どうするの?／return。あんなこととしてさ、確かにあなたと関わる人間は性質が歪められるけれど／escape。』

「いいのよ。あの偽善者は困いが思うよりもたくさんいるわ。こぞつて出てこられるよりはこのほうがいい。」

『結局、楽しみがなくなっちゃうんじゃないの?／escape。』

「思ったより、私に侵食されてるのね、あなたってば。上位コードも使えるみたいだし、過ぎるようじゃあ、完全に私になってもらうわよ?総体ちゃん。」

『それはいやだなー／return。あなたってば結構えげつないことしてるだろうし?／escape。』

「まあ、ね。本霊の方の蓄積したデータもアップデートで私に流れ込んでるし、結構やつてるわよ?星単位で。」

『流石邪神／return。ところでここはなんの施設

／escape。』

「ああ、ここ?レベルシフトを第二位で試そうって思ってる研究員のアジト。これで1から7776のミサカを復活させることができるのよね。安心して、理事長に頼まれたのだから。」

第六章 愛される者

操作場はとある気配で溢れかえっていた。

そりやそうだ。この空間には二万体のクローンミサカが揃っているのだから。

プラン外とやらの、実験の破壊活動により得た新たな妹達達シスターズに1号から7776号までの記録をインプットさせて蘇らせた彼女たちはやっぱり私に侵食されたままだった。

「風が少し吹いてきましたね。とミサカは退屈紛れにつぶやきます。」

傍らにしているのは何かと私のサポートや一方通行アクセラレータに接触していた、ミサカ7777号。彼女は誰よりも感情を芽生えさせていた。本来の体アクセラレータで一方通行と対峙した最後の個体がこの個体だ。そしてこれからは

「あのあと、結局どうなったの?」

「もう顔を見たくないと言われてしまいました。とミサカは思い出して落ち込みます。感情というのも悪くないものですね。これでもとミサカは感謝を吐露します。」

「あ、今の感謝なのね。てかさー、あんたつてはこのミサかと暮らすんだからね? 現実いじつてミサカと双子になるんだからねー竜宮聖七歌ミナカちゃん。」

「ミナカですか。このミサカは聖七歌ミナカという名をもらったのですね。と、聖七歌ミナカは嬉しく思います。」

他のミサカとは違い聖七歌ミナカは私の双子枠で戸籍を得た。そこは当然私の能力を使ってジリジリと人々の認識をずらしたのもあるし、一方通行アクセラレータに好意を向ける個体。恋愛的な意味で。

その観点から見ても一番戸籍を得るに最適と理事長にわがままを言ったのだ。

他の個体は恋愛的な意味では無く、どちらかといえば家族に近い愛を、好意を向ける。庇護すべき弟のような、儂い兄のような感覚で。しかし彼女は違う。

総意の観測からしても、彼女だけは違っている。

「しかし良かったのでしょうか？」「私達ミサカはすでにこの世にいない身」「愛し子に負担がかかるのでは？」

そう、ミサカたちは言う。良い反応だ。私と関われば何かと歪む。御坂美琴は狂氣的に実験に噛み付いて、一方通行は庇護される立場となり、妹達は侵食された。

1号から7776号までの個体は死してなお一方通行を愛おしく思っているのだ。

「私達ミサカは一方通行を愛している。それさえあれば生死など関係ないのよ。」

『そうだね／return。私達が生まれたときに植え付けられた価値観だからね？／return。それでも私達は構わないと思うよ／return。だって本当にあってみれば、この気持ちを抑えられないから／escape。』

「ああ？呼び出されて来てみればなんですかア？ハッ！やろうつてかア？」

とても愛おしく、遠かった存在が近くにいるのがわかる。私の愛し子、そして帰還の道標。

世界が新装され、聞こえなくなっていた声が聞こえてくる。

全権を取り戻すには行かないものの、この距離だけで世界の声を聴くことができるようになる。

心のどこかに空いた穴が塞がるように、なくしていたパズルのピースが見つかった時のように、ひび割れた大地に雨が降り注ぐように、体に力が戻りだす。

失われていた魂のエネルギーが、彼を経由して本霊からのラインを確保できたようだ。

ならば祝福を。さらなる祝福を与えなければならぬ。

姿が見えた。その肌は陶器のように美しく、その髪は光を受けて煌めく純白の白。真っ赤な瞳は紅玉の秘宝の如く彼の魅力を倍増させていた。容姿は抽象的にか弱い印象をうける細身の体から発せられるいかにも不機嫌で鋭利なナイフのような口調のギャップで再三惚

れさせられる。

「ここにいるクローンミサカは全2万と1体です。私はクローンミサカ的人格モデルになった義妹シユウエスターです。」

ミサカを代表して私が前に出る。

一人だけ真つ白な私に少しだけ表情を困惑させたものの、何かを思い出したように少しだけ目を大きく開いた。

「あ？この感じ、お前かア？オレに付き纏ってた気配は？」

「なにを。私はあなたに呼ばれたんですよ？助けてくれ。と、その声に随分遅くなってしまうかもしれませんがね。今日あなたを呼んだのは、私との再開とミサカの送別のためです。凍結され、ミサカは世界各地の協力機関へと送られます。そのための送別です。」

「二万體。つて言ったよなアつまり、あいつらは」「ええ。肉体が使えない物にならなくなれば新しい器を用意すればよいのです。彼女たち恥ずかしがってるんです。あなたを傷つけてしまった事実には」

多くのミサカが一方通行アクセラレータを優しく見ていた。それに気がついたのか一方通行は舌打ちをして下を向く。

「ミサカ達は一方通行アクセラレータのことが大好きなんだよ？さあ、顔を上げて愛し子ダーリン。わかっているわ、あなたは一人でもう戦わなくていいの貴方の罪を流しましょう。あなたならもう傷つけなくてもいいの。遅くなつてごめんなさい助けに来たわ。」

愛し子ダーリンの手に触れる。当然愛し子ダーリンの手に私は触れることができる。

「神？そんな、聞いてやがったのかア？本当にいやがったってのかア？あんなもン子供の戯言だろ？」

「戯言でも確かに私には貴方の声が聞こえた。聴こえてきたの。だからね？助けたくなくなっちゃった。これは私のエゴ、そしてこの世に私を降ろしてしまった貴方の罪。貴方はここに居るミサカや黄泉川の好意を受け取らなければならぬ。」

聖七歌ミナカがそつと近づいてきて私の手の上に手を重ねる。顔を真つ赤に照れさせながら。

「このミサカは新しく聖七歌ミナカと名前を貰いました。と聖七歌ミナカは自己紹介をします。」

「お前、最後の実験のやつだなア?。」

「ハイ。貴方に救われた命です。と聖七歌は……私はそう思います。」
これは、契約完了より二人の仲を縮ませる方向がいいぞ。

私はすつ。と、二人の手の間から手を抜き取り一歩下がる。

聖七歌は両手で一方通行の手を握りしめてから跪いた。まるで騎士が主君に誓いをたてるように、あるいは愛の告白のように。

「ミサカは、妹達は気がついてました。貴方が私達を救おうをしてくれていた事に。守ろうとしてくれていた事に。」

「だからこそミサカたちは」「次はこのミサカ達に」「本当に守れるかはわかりません」「それでもミサカは」「助けたいとミサカは」
聖七歌に続くように周囲のミサカが声を上げる。

「他の私もそうです。義妹の言つたとおり、ミサカを受け入れてください。ミサカが付いてます。」

当の一方通行の方は、俯いて唇を噛み締めていた。可愛い。

「クローンごときが俺を守る?そんな事、できるわけねエだろ?」

「喧嘩ならミサカにまかせてください。あれですここはあなたが出るまでもありません!と言うやつです。」

「なんだそれ。」

「あまり私達クローンミサカを舐めてんじやねえーよ。つて事。好きな子ぐらい守ってみせないと軍事クローンの名がすたるんだぜ?」

「好きな子ねエ?オマエらホント馬鹿だよなア。」

瞼を涙で濡らしながら彼はそう言う。この姿を見て誰が怪物と言うのだろうか?

彼もまた、救われたかった人間だ。

もう遅いと決めつけていた人間だ。

彼の手が血で汚れていると言う人間が居るなら、こう言ってやれる。彼の汚れは助けたかった人の血だと。

汚れていても、穢れてはいないのだ。

たとえそれが私のエゴであつてもだ。

「わかつていただけただけでも嬉しいです。ここにいるミサカの殆どは貴方と思い違いをしたまま遠方に旅立つのかと心配していまし

た。」

「遠方からあなたを支援します。とミサカは誓います。」

どのミサカもつられて同じことを言った。

「同じ顔で同じ事、何回も言ってるじゃねエ。俺はもう——」
一方通行は言葉^{アクセラレータ}を途中でと切らせた。

その言葉の続きはなんだろうか？その場にいたミサカはそう思った。

《今更ながら、恥ずかしいと気がついたのでしょうか？とミサカは想像します。》

《ミサカはその意見に同意します。》

《同じく。とミサカは同意します。》

だけど違う。一方通行の視線の先には一人の少年が立っていた。

上条当麻が。

「離れるよテメエ。」

溢れんばかりの怒気を体から放出させて、まるで一方通行^{アクセラレータ}を攻撃するのように。

「今すぐ御坂妹から、離れろつつってんだ。きこえねえのか。」

当麻の言葉に嫌そうに眉をひそめた一方通行^{アクセラレータ}はゆっくりと聖七歌^{ミナカ}視線を移した。

聖七歌^{ミナカ}は決意したように一方通行^{アクセラレータ}の補助を受けながら立ち上がると、頭につけたゴーグルを下ろした。

けど待ってほしい。ここは私に花を持たせてほしい。

「ここは聖朝歌^{ミサカ}がやる。さあ、契約完了のときです。あなたはもう一度あの言葉を。」

「あのときの言葉だア？」

当麻のことなんか完全に無視を決め込むようで、思い出すかの様に、俯く一方通行^{アクセラレータ}。

「そこにいるのは聖朝歌^{ミサカ}か？なんでここに？離れろ！そいつは——」
当麻が何かと吠える。やっと私を見つけたのね。

こちらの声は聞こえてない様子だ。

「もたもたしてねえで、離れろつつってんだろ、三下!!」

まるで信じられないような物でも見るかのように一方通行は当麻の顔を見る。

ついでに私の方を見て、何を言ったのか、教えてほしいといった顔で。

「離れる。三下だそうよ?。」

「なんで?。」

「聖七歌が好きなんじゃない?。」

「そオなのかア?。」

「でも、私がなんとかする。さあ、私を降ろしたあの言葉を、本契約完了を。」

その声はか細く、当麻には到底聞こえないだろう。

「神様がいるなら、どんな奴でもいい。オレを助けてくれ。」

それでも彼の言葉は私の髓に響き渡る。

世界が一変して、すべて手に取る用にわかるようになる。

契約が完了し、本霊との道が一方通行を門として完全に繋がれた。

私は人間から神格に舞い戻るということになる。

体の重さの感じ方が変わる。

「義妹?。」

「妹達、ここはこのミサカがやります。あなた達が使える武器はライフルのみ。彼は私のはとこですしねえ?。」

終章 あけつない終わり。

「私は竜宮聖朝歌^{ミサカ}。よろしくお願いしますね、一方通行^{アクセラレータ}。」
「任せていいのかア？」

「ええ。はとこ同士の喧嘩ですもの、愛するものをかけたね？それに、あなたはそろそろ帰らないと黄泉川^{ヤマ}に怒られてしまいますよね？」

その言葉に、やっぱり愛^{ダーリン}し子は批難の視線を向けてきた。それでも、聖七歌^{ミナカ}に急かされて愛^{ダーリン}し子は路地裏の闇に消えていく。

それが気に触ったのか、当麻が駆け出して私の目の前を通ったところで足を引つ掛けてやった。

「ハロー。当麻。何をしようとしてるのかしら？」

「おま、何もされてないのか？」

「は？私はまだ何もしてないじゃない！」

「そうじゃねえよ！一方通行^{アクセラレータ}は平気で御坂妹を殺すやつだ！一万もの御坂妹がすでに、」

何をどこまで勘違いしてるんだろう？

確かに私は実験が続いてるかのよう^{アクセラレータ}に御坂美琴に匂わせていたけどさあ、ええ？ここまで勘違いしてる？

とりあえずぶちのめしてから教えてあげよう。

「当麻、悪いけど一方通行^{アクセラレータ}に拳を向けるようなら、まず私が相手をするわ。」

「なっ！」

当麻の腹に蹴りを入れる。

いとも容易く当麻は吹っ飛んで置かれていたコンテナにぶち当たる。

「なんで、こんなことするんだ？」

「約束したの。最強の看板を狙うチンピラをできるだけ蹴散らすつて。スキルアウトに家を爆破されたことは？意味もなくナイフを向けられたことは？家の中をグチャグチャにされたことは？今のあなたじゃ分からないわよね？」

唸り声を上げながら身じろぐ当麻を見たのは初めてだ。

私相手に右手は使えない。

知ってるからだ。右手はあらゆる異能を打ち消す右手だつてこと。神の力が通用するかわからないからこそ、単純に攻撃は暴力を行使する。

喧嘩なれとかそういうものじゃなくて、基本的に私はこの肉体になる前から単純な筋力と経験と痛覚の遮断で900年やってきたんだ。たった15年と幾年生きた人間にやられるものじゃない。何があつても、何をやつても勝つんだ。

「私が相手をする。だって私は一方通行アクセラレータを守りたい。もしも一万人殺していたとしても、それは関係のないこと。」

まあ、本人は誰一人殺してないもの。助けようとして自殺されちやつた可愛そうな人間。

転がってワタシの蹴りを回避した当麻は砂利の上で無様に這いつくばる。

ここは操作場と呼ばれる場所で、コンテナがたくさんある。また、線路が引かれていてそこには、レールや枕木のクッションとなるバラストと呼ばれる砂利が引き詰められている。

また、レールの重さは規格に沿って30キロから60キロの一定の重さのどれかである。

枕木は60キロから80キロ程度のものが至るところにあるとすれば、ここは武器だらけだ。

バラストも碎石と言って、岩を人工的に砕いて小さくしたもので、よく河原にある小石や砂利といった天然砂利と呼ばれる、水流で角が削れた石と違いその角は鋭利なままだ。

レールを引き抜くと、そのまま槍投げのように当麻へと投げる。ここまできちんとして筋力が戻ってるなんて、感動するわ。多少重いけど、投げられないほどでもない。何より投げたレールが槍のように当麻の股下に突き刺さり、その衝撃で追加攻撃のように碎石の雨が当麻に降り注いだ。

「うぐっ！なんでだ？なんで、」

「うるさいわねえ！せつかく送別会をしてたのに。」

「送別会？」

すぐに倒れ伏した当麻に肉薄し、片方の足の付け根、右側の太ももを踏みつけると、ゴキリ。した音と、何かが折れる生々しい感覚が同時に伝わってきた。

「あつ、ぐあ!! まで、聖朝歌! 待ってくれ!」

「うるさいわねえ? とにかく怒鳴りつけてくれちゃって、ムカつくわ。」

「待ってくれ、送別会ってなんだ?」

「……まあ、片足潰したし、その厄介な右腕も潰させてもらうわね? 悪いけど。話はそれから。」

藻掻く当麻の右手もついでにとりあえず骨折させる。

「ぐ、ぎやあ!! うう、聖朝歌」

「何を第三位に吹き込まれて騒いでるのか知らないけど、実験ってレベルシフトのことかしら? なら、もう凍結してるのよ? そして多すぎるクローンは各地の研究機関に預けられることになった。その送別会。二万もいるからここが良かったの。」

「二万? 誰も死んでないってことか?」

信じられない。といった様子の当麻が私を見上げる。

「そうね? 実験はもう凍結してるのよ。死んだミサカはね? 自殺よ。」

一方通行は空を続けるために実験を続けていた。それを見つけた科学者がいて、その科学者が実験を凍結まで導いて、そこには当然やりたくない。死なせたたくない。っていう一方通行の意志があった。

「はは、勘違いしてた。まだ続いていると。御坂に教えてやらねえと。」

「はは、そうね。」

「て、なわけです聖朝歌無事帰還してまいりました! 第三位の諸々の説得は上条当麻という私のはとこのうにヘッドが担当するです!」

次の日の日中、一方通行の許可を得て彼のあてがわれている部屋にて、そう私は報告していた。

「ああ? つまり全てオマエが仕組んだってことでもいいのかア?」

「そうにございます。あ、一方通行様?」

「……オマエがそオいう能力者じゃなかったらなあ。」
「は、能力者でよかったぜい。」

サマーバケーション「海」 序章 悟る者

——深夜の路地裏には怒号と絶叫と悲鳴とそして人が砕ける音がしていた。

「懲りない奴らだな。」

「もうーゴキブリかっつてのー！」

路地裏はすぐに静寂を取り戻していた。

そこには白く、白くただ白い二人組、学園都市第一位とその取り巻きである竜宮聖朝歌^{ミサカ}だけが立っていた。

聖朝歌^{ミサカ}の手にはボール^{エズカ}のようなものが握られており、それで第一位に絡んでくるスキルアウトを昏倒させていたのであろう。

「そうそう、打ち止め^{ラストオーダー}という個体が目覚めたから明日遊びに来てね？」

ごくごく一部の高校生以外が喉から手が出るほど欲しがるとそのセリフを第一位は軽く受け取ると自室のあるマンションに入っていく。彼の住むその部屋はその場所から見えないので、第一位の姿が見えなくなるその瞬間まで聖朝歌^{ミサカ}が見送る。

献身的な彼女はそれを有り前のように行う。

それを見てまた、悩んだように目を閉じた人物が一人いた。

学園都市統括理事会理事長、アレイスターⅡクローリー

悩ましいことに日頃の行いがそろそろ厄介になってきていた。

噂として第一位がレベル0負けた。という噂と、第一位が大勢の女子に囲われていた。という噂が流れ出し、その噂が合体して、第一位が女をかばってレベル0に負けた。という噂が出てきて、ほぼ付きそ^{ミサカ}う聖朝歌^{ミサカ}が第一位の女とされて、聖朝歌^{ミサカ}による残虐行為が学園都市各地で発生していたからだ。

また、少しの正義心を抱え込んだ者たちが、第一位が女を庇ってやられたことに対し、称賛し、そのレベル0を探すことに対して躍起になっている。

そろそろまずい。対応しなければ残虐行為はエスカレートしてい

く。暴走はエスカレートしていく。

統括理事会として対処せねばならない。

しかし、邪神と第一位と幻想殺しイマジンブレイカーを一緒にしても大丈夫なのか？
とそう理事長は悩んでいた。

今回、何かが起こる。そんな胸騒ぎを覚えながら、いや何か起こってしまおうと確信しながらも理事長、アレキスター・クローリーは上条当麻が通う高校と竜宮生物研究所宛の手紙を指示した。

「土御門元春。今回は邪神、第一位、そして上条当麻の見張りをしてもらう。」

「見張り？」

「ああ、特に竜宮聖朝歌ミサカ。彼女の言動に注意してくれ。くれぐれも変なことはさせるな。」

「プランに関係あるのか？」

「これは、学園都市の理事長としての仕事だ。やつは絶対なにかする。」

「わ、わかった。」

人はそれを運命と言う。絶対に避けられないものを。

後に土御門元春は、酷くアレキスター・クローリーの言葉を実感するのであった。

一章 火野神作

「ふお！この体でははじめての外！お兄ちゃん的には初めてなのよねー？」

「そうだな。」

「そんなにはしゃぐもんかア？」

「まーまー、そう言うなつてやつですたい。」

「俺もついてきて良かったのか？」

「聖朝歌様に朝歌様、くれぐれも窓を開けないように。」

六人乗りの車には、運転手兼保護者として五条が。助手席には何故かついてきている土御門元春。そして真ん中に私と一方通行。そして最後列にはお兄ちゃんと当麻が座っている。

私達は外に来了。

私と一方通行は直々に統括理事長に呼び出しを食らって、『この度の混乱を収めるために外に行くこと。五条という研究者と朝歌くんを、そして上条当麻とその友人を同行させるから外で大人しくしているこの邪神め』と、ガチで怒られたためさすがの聖朝歌も反省することにした。インデックスは聖七歌とお留守番をする事となった。

五条が保証人をすべて引き受けてくれたので、ここで当麻の両親と一緒にバケーションするとうわけではないし、行き先の海は、クラゲが大量発生してるそうで、砂場遊びぐらいだろう。

「とうか、聖朝歌一人だけ女の子で辛いのか？」

「聖朝歌がいつ女だと言ったかな？」

「たしかに。」

「ミサカは現実改変能力者なのだよ。当然みんなの青春真っ盛りな下半身に配慮して性別を男に変えてるともさー！」

「うーむ、確かに今日の聖朝歌はなんか胸が慎ましいような？」

「ちんちん生えています。」

「確かになア。」

「一方通行！俺の弟のちんちんどんな感じ？」

「はア？ちんちんとくつついてる。」

「ちよつと、中学生男子！一方通行巻き込まない！一方通行も付き合
わないで、ちんちん言わないで！学園都市に帰りたい。もしくは大人
もうひとりほしい。こんな仕事やだ。」

「俺も今回は任務ですにやー。」

「闇の人間が三人かあ。一人は完全エンジョイモードだし。」

『次、左折です。』

カーナビの音声が騒がしい車内に響く中、一方通行は静かにしてい
た。

私とお兄ちゃんと当麻で騒いでる中、一方通行はパンフレットを見
ていたからだ。

「何見てん？」

「止まる場所のパンフレットですウ。海の宿イナバだとよオ。」

「名前は因幡の白ウサギからじゃない？」

「なんだ、それ？」

「古事記に載ってるうさぎと神の話。ウサギが海を渡るんだよ。」

パンフレットにはうさぎとサメのイラストが書かれている。

「そういうえば、部屋ですけど寝室2つなんですよ。」

「当然、私とお兄ちゃんと、一方通行は一緒でしょ？当麻は確率的にや
らかすだろうから保護者役の土御門さんと五条が見てほしいんだ
けど。」

「

「あ、ガチで男なんですネ？今。」

「土御門は保護者役ってなんでだ？」

「何って、このメンツ見て……ああそつか。今回一方通行が外に出る
にあたって対魔術結社用の防衛隊がお兄ちゃん、土御門、五条、そし
て私なのよね。当麻は知っているとおり、能力者が魔術を使うと死ぬつ
てのが私の能力範疇内だったら無効化されるから使い放題なわけ。」
一方通行と当麻以外魔術師家系の間人ってことを忘れちゃいけない。
「……つまり土御門も魔術師なのか？てか、一方通行さんにこんなこ
と話してもよろしのでしょうか聖朝歌様。」

「問題ないぜい上条ちゃん。聖朝歌はこれでも約千年生きてる生き

神ってやつだぞい。」

「アクセラレータ二方通行の方は、魔術サイドでもかなり有名だぜ、カミヤン。なんせ、アクセラレータ一方通行が900年前のこの地球に飛来した仮称『宇宙からの御子』の召喚者って奴ぜよ。もつと簡単に言えば契約者。これは必要悪の教会公認情報ってやつですたい。」

「え、待ってくれ。となると俺とアクセラレータ一方通行さん以外みんな魔術師ってこと?。」

「こいつ、今更なのか?という雰囲気に車内が包まれた。

「え?マジですか?。」

「そうよ?言ったじゃない。対魔術結社部隊マジックキャバルって。」

用意させたスイートルームは清潔感あるものだった。

荷物もすべて放り出してアクセラレータ一方通行はベットに寝転がったので私も寝転がることにする。

何気なくお兄ちゃんがテレビをつけると、ワイドショーなどではなく緊急ニュース特番が放送されていた。

『えー、現場の小森です。昨日未明、都内の新府中刑務所から脱獄した死刑囚、火野神作の行方は現在も掴めていないようでした。周囲の中学校などでは休校にするなどと緊迫した空気が伝わってきます。目撃情報もまだ無いようでした。警察はもし発見しても無闇に近寄らず、すぐ通報する。人通りの多い道路を歩くようにしてほしいとの注意喚起が出ています。』

「脱獄犯だって。外の世界もなかなか物騒。」

『また、火野神作はその特異な殺人法「儀式殺人」によって、多くの愛好家や模倣犯を生み出しており、今回の脱獄にも彼らが関わっているとされ、警察では迅速に対応をするとの会見を行っています。』

「儀式殺人ねエ?オマエらからしたらどオナンだ?。」

「うーん、魔術的観点から見ても何もおかしくないわ。ただ、捕まるよいうなへまをするなら魔術師の可能性は薄いわね。たびたびワイドショーを沸かせてたけどプロなら死体なんて消せるもの。」

「確か二重人格とか言ってただろ?。」

「解離性同一性障害ってやつかア？ありやあ確か責任能力やらが無いとされるだろオ？」

「うーん、なら完全に人格が移り変わってるんじゃないかって、一部分が混同してるんじゃない？脳内けいんで囁く声ちやうとしてもう一人の人格が意思を表してるのか？気になるなら調べるけど？」

「必要ねエ。」

「そう。」

興味がないみたいだし違う番組を見ようにも、ほとんどのテレビ局はその話題だし、一部の放送局は通販番組の時間だった。

「でも怖いよ？そのテラス開けたら窓に引っ付いてたとか、さ。」

「流石にねエだろ？」

「そうそう、ここ五階だよ？そんな人登ってくる？」

「登ろうと思えば登れるわよ。クライミングやってる人もいるし。てか、お兄ちゃんのそれフラグっていうんだよ？」

「そうそう起こるわけ無いだろ？だって——」

プツンと、その瞬間部屋の電気が切れた。

すぐにお兄ちゃんが窓を確認し、侵入者がいないかと確認する。

私は反対にリビングへのドアを少しだけ開けると、リビングには当麻が一人、尻もちをついていた。

当麻の視線の先には侵入者にして、脱獄犯、火野神作がそこに居た。夜風が気持ちいいからと入ってきた当麻が開けていたテラスにつながるその大きな窓から火野神作が乗り出してきて当麻に襲いかかる。

目があつた。狂ったその瞳と。

すぐに当麻に駆け寄り、筋電多関節人工尾カスダム・ドラゴンテイルで火野神作の持つシミターのような、鎌のような刃物をうけ止める。

「ひっ……」

「どけー」

邪魔くさい当麻を蹴ってどかせる。

「あ、」

今日の筋電多関節人工尾カスダム・ドラゴンテイルは非戦闘型の飾りのアタッチメントだ。

レーザーや毒針など仕込んでない。

「エンゼルさまえんぜるさま。」

「なに?。」

「俺は一体何をすれば? あんたに従えばすべてがうまく行くんじゃないのか!! 答えやがれ!!!」

私の筋電多関節人工尾が弾かれて、火野神作は刃物を自分の胸に突き立てる。

一見、デタラメのように見えるが、KILLLと言う文字が刻まれていく。

そして一直線に私に向かって刃物が飛んでくる。

それは私の肌に当たって弾かれる。

「ガア?!。」

「刃物ごときでこの私を傷つけられるとでも?。」

弾かれた刃物を持つ腕に足をかけて無理やり押し倒すと、背中をこちらに向けて転がすように足で払い、すぐにその両手を掴み上げて払った足で背中を押しつぶすように体重をかける。

「カツ……ぎいびい!!。」

「何事ですか! ってギャー!!!」

「縄なわ! 縄持ってきて早く縛り付けて!!」

二章 海、そしてバーベキュー

火野神作による当麻襲撃事件は学園都市側から当麻の両親に伝わり、今日当麻へ会いに来るらしい。

「てか、この年になって親と海ではしゃぐのか。紅一点の聖朝歌^{ミサカ}は能力でほんとに男になってるし、俺よりデカかったし。」

それぞれハーフパンツのスタイルで海ではしゃぐ土御門とお兄ちゃんを見る当麻の目は死んでいた。

男になつてる私はあまり海水に髪を晒したくないので当麻の隣で慰める係となつてる。

一方通行はお兄ちゃんに連れられて海ではしゃぎこそしないものの、それなりに楽しんでるようだ。

「やっぱ、その尻尾はだめなのか？外せばいいのに。」

「落ち着かないの。それに海水につけたくないのは、尻尾じゃなくて髪の毛だしい。」

筋肉多関節人工尾は防水加工もされてるので水に入っても大丈夫。

「やっぱあれなのか？水に浸かると女の子に戻るとか？」

「いや、魔術だつてんだろ？」

クラゲ大量発生ということがあつてか、ビーチは貸切状態だ。そんなビーチに近づく足音が2つあった。地元の人かと思つたらどことなく当麻に似てる人ときれいな女の人がいた。

「お父さんとお母さんじゃない？貴方のお母さんは写真で見たことあるけど、お父さん始めてみたなあ。」

「あれが俺の親？母さん若いな。」

「当麻！と、あーと？」

「あらあら、もしかしてあなたが蒼の娘さん？」

「あ、はい。竜宮聖朝歌^{ミサカ}です。今は能力で男なんですけどね？兄の朝歌もあつちにいるんで。」

「超能力つてすごいわねえ。当麻の母、詩菜です。」

「父の刀夜です。」

外見で詩菜さんがわかるのは、御坂美琴がママにそっくりだったか

らだ。完全なる他人の空似。

7777号を聖七歌^{ミナカ}として受け入れられたのもこの側面が強い。が、その視界が一瞬ブレたような気がした。

「ん？」

「あれ？姿が変わった？」

「お？」

「どうしたんだい？」

「インデックス？母さんとインデックスがいきなり入れ替わった？」

「当麻何を言ってるの？」

「これ、なんのドッキリだ聖朝歌^{ミサカ}？」

「はっ倒すよ？待って、私は詩菜さんがインデックスと重なって見えるのだけれど？待って。」

遊んでるお兄ちゃんと一方通行^{アクセラレータ}と土御門を見れば、遊ぶのをやめてそれぞれ体を見ている。

私の視線に気がついたのか慌ててこちらに近づいてきたことで、土御門がなんかこころなしか具合悪そうにしていた。もしかしてクラゲ？

「聖朝歌^{ミサカ}体には以上はないか？土御門がなにかに反応してぶっ倒れたぞ！」

と心配して来るお兄ちゃんと目の前の不思議減少に戸惑いながらも解析しようとする一方通行^{アクセラレータ}がいる。

一方通行^{アクセラレータ}が何やら操作して直しているようにも見えるが、土御門は魂と肉体があつていないような……いや、どこか違和感を感じるけど特に刺された箇所もないように見える。

「大丈夫だにやー、聖朝歌^{ミサカ}様々ってやつですたい。」

「そう？ならいいけど。あ、お兄ちゃん、当麻のご両親。」

「あつ、どうも。朝歌です。こっちは友達^{アクセラレータ}の一方通行とその金髪は当麻の友達^{アクセラレータ}の土御門です。」

「当麻の友達。息子がいつもお世話になってます。」

と行った当麻パパに土御門もお世辞を返して私達は親子水入らずの感じを保つために海に戻ることにした。

「当麻、記憶喪失はちゃんと
あのこと
言わなきゃいけないからね？」

「あ、ああ。」

「海に来たらーやっぱりナンパですにやー。」

「ナンパ？この海でかア？」

「土御門さん、女の人どころか他人が居ない。」

「一方通行、私と海を楽しもうじゃないか！」

「聖朝歌を見習うぜよ。」

「一方通行、俺と海を楽しもうぜ！」

「うっせエうっせエ。なに頭湧いたこと言ってやがるんだア？」

「この中で性別不明は一方通行だけだぜい？つまり万が一にも
ダーリン
一方通行は女の子の可能性が?!?!?ってね？」

「……………はア？オマエ元は女だろオ？オマエが受けるよ。」

「なら、何なりと愛し子よ！」

「はア？なんでオレはオマエをナンパしなきゃならないゆですかア？

やってることナンパじゃなくてダチ誘うやつだろオ？もオコレ。」

「愛し子大好き！」

「一方通行君って人は。」

「敵わないぜよ。」

「お昼のバーベキューは肉いっぱい運ばせるから！野菜じゃがしかな
いけど。」

「肉だと？」

「肉肉!!」

肉にテンションがマックスとなったところで、土御門が話をもとに
戻す。

「で、海と言ったらナンパぜよ。聖朝歌は遊びを求め過ぎだぜよ。男
は筋肉を出さなきゃだめですたい。一方通行はパーカー脱げ。」

「ナンパしか頭にねエのか？このチンパンジーよオ。」

「土御門パイセン、もうイマジナリーフレンドしか手立てはないと思
いまーす。ガチで天使も悪魔も居やしねえ。」

「先輩ア口ハ脱ぎましよ？半裸やつほーい！」

私がウエットスーツとハーフパンツ。お兄ちゃんがおそろのハーフパンツ、一方通行アクセラレータが早そうな柄のハーフパンツで土御門がアロハシャツとハーフパンツ。見事なハーフパンツ。

「聖朝歌ミサカもウエットスーツ脱いでこい。見せるだけで磨かれるっていうにやー。」

「まっつてよ、私と一方通行アクセラレータは肌が弱いのでこのスタイルじゃないといけません。お兄ちゃんはきちんと塗つとかないと後悔するよ?」

「まあ、大丈夫だろ?ともかく海割って遊ぼうぜ!」

お兄ちゃんの提案に一方通行アクセラレータが同意したことによつて海を割つてクラゲを観察することになったが、寸前で土御門に止められる。

「うにやー!お兄さんが悪かったぜよ。」

「ニイちゃん電話なつてるぜ?」

「は?」

ガチでなつてるため、慌てて電話に出て、真剣モードで話している土御門を確認して、お兄ちゃんにG.Oサインを送るとお兄ちゃんが水かかる重力だけを重くして水を寄せていく。くらはは居なかった。「どうする?希望があれば常識の範囲内で海洋生物呼べるけど?」

「シロナガスクジラ。」

「オーダー入りましたー!」

シロナガスクジラは哺乳綱鯨偶蹄目(あるいは偶蹄目)ナガスクジラ科ナガスクジラ属に分類される動物。

公式的な記録の動物の中で最大の種であり、記録では体長34メートルのものまで確認されている。

主食はプランクトン。

豆知識として、死体のガス爆発で内臓が飛び出るそのさまは、間欠泉のごとき様。だという。

すぐに遠くからクジラが現れて息継ぎなどを確認できるようになる。

「歩いていこう。」

各々の能力で歩いていき、ホエールウォッチングを楽しむこと数十分。流石に日差しがきついのでクジラたちにお別れをして浜に戻る。

ことになった。

「うお、熱持っちゃってるUVは平気だろうけどお風呂ピリピリすんぞこれ。兄ちゃん焼けたんじゃない?」

「お兄ちゃんだけ焼けたな。」

「真つ赤じゃねエか?大丈夫なのかア?」

「聖朝歌^{ミサカ}たち身体やしてきまーす。愛^{ダーリン}し子も来る?」

「オレは待ってる。」

「オツケオツケ。」

反射持ちの^{アクセラレータ}一方通行は一人、パラソルの下で休むらしく、大人たちはバーベキューを先に始めていた。当麻と土御門は見当たらないけど、まあもう少ししたら戻ってくるでしょ。

私はウエットスーツの上からハーフパンツの水着を着ているに對し、お兄ちゃんはおそろのハーフパンツだけなので日焼け度がやばいぐらい違う。

私は手のひらと顔を冷やせばいいけどお兄ちゃんはほぼ全部。

「つべてー、てか尋常じゃない焼け方。」

「そりや愛^{ダーリン}し子の隣にいたら愛^{ダーリン}し子の反射食らうでしょうが。おニューでクリーム持つてきてるから背中^は塗ったげようか?」

「自分でやる。自分でやったほうが覚悟が付くからな。」

戻るとバーベキューを本格的に始めるため、呼ばれたのだが、土御門と当麻と五条が居なくなっていた。

「当麻が居なくなってるな、友達の土御門君も一緒にいなくなって、五条さんが探しに行ったんだ。君たちは私達と一緒にバーベキューをしようか。」

三章 アポカリプティックサウンド

結局昼を終えても当麻は見つからなかった。

戻ってきた五条の報告で、土御門が付いていったとの事だけわかったが、その土御門も場所を教えてはくれなかったそうだ。

そのため、保護者役を命じられた五条とお兄ちゃんが何やら会議するらしく、私と一方通行アクセラレータは仕方なく海を散歩する事になった。

上条刀夜の付き添い付きで。

「そうそう、契約者に守ってほしい物が。分霊たる私のお願いがあるんだ。」

「ほオ。」

「私が加護できるのは貴方の子供の子供まで。そして貴方の血が薄れば薄れるほど加護が減っていく。」

私は別に貴方を連れていきたいわけでも、自分の為だけのものにしただなんて思っていないけど、他の神を信仰するのは嫌だ。」

私の歩幅に合わせて歩む一方通行アクセラレータは夕日に照らされて、その光の反射で宝石のように輝いて見える。

「私の寿命は短い。だから愛ダーリンし子叶ウナなら最後を見守って欲しい。」
大きく一方通行アクセラレータの瞳が見開かれる。

夕日のオレンジ色の光が海に反射してより一層一方通行アクセラレータを輝かせた。

「守らると思うかア？」

「契約したんだから当たり前。それでもマシな方。守らなきやいけないのよ。」

後ろの当麻パパも私達を見て微笑んでる。

それに気がついたのか一方通行アクセラレータは頬を赤くして海の方を見てしまう。

「……父さん。」

そんな空気に水を挿すやつがいた。

現行行方不明となつてた上条当麻。

どこか不安げで、絶望したような、それでも救いを求めるような顔

で。

「当麻!!どこに行っていたんだ!出かけるなら誰かにきちんと言わないで。怪我はしてないのか?」

それは親としての顔で、心配していたから怒るといふ単純な感情だ。

パパだつて時々そんな顔をして私を叱る。それでも当麻は表情を変えなかった。

迷子というわけではなく、単純に自分から足を運んだ先で何かあったんだろう。

「なんでだよ?なんで、なんでオカルトに手を出した?あんたは非日常じゃなくて日常の人間だろ?」

「何を言ってるんだ?」

「シラ切ってんじゃねえ!どうして魔法使いの真似事なんざしたんだよ!」

泣きそうな当麻に当麻。パパは困惑するのみ。

私達でさえ当麻の言葉は理解できない。

それなら、当然当麻。パパは理解できないだろう。

「落ち着きなさいな。何をそこまで焦ってるの?」

「聖朝歌、父さんが魔術を、それで世界の人たちの体が入れ替わった。だから俺がなんとかして父さんをどうにかしなくちゃ行けないんだ。父さんの命が狙われてる。」

私から見ると、上条刀夜はただの一般人だ。何かしら異変は起こっていて、その真ん中に彼がいることはなんとなく知ってたけど、こんなことになるなんて思わなかった。

体が入れ替わったね。ならブレて見えたのもわかった気がする。

「記憶喪失になった当麻は、いやそもそも昔の事だ。お前は覚えていないから言いたくなかったが、昔お前は疫病神と言われていた。」

そして刀夜は私をちらりと見る。

「蒼さん、聖朝歌ちゃんのお父さんの見解として、右手に異能が宿り、幸運を打ち消しているのではないか?との事でお前を救いたくて学園都市に入れた。現状や能力のことは蒼さんに無理やりお願いして

何回かは聞いていた。そして7月、蒼さんから当麻が記憶喪失になったとの事を聞かされた。」

当麻は目を見開いて私を見る。当たり前前だろ？だって親戚なんだもん。親戚でパパは大人だ。大人の勤めを果たしたただけだ。当麻のわがままで抑えられる話じゃない。

「その瞬間、もうオカルトに頼るしかないと思った。」

「ぼっかやろう！こんなことまでしなくても、俺は十分幸せだ！不幸だと思ふことがあった！だけど、俺は幸せだったんだ！」

「は、なんだ。幸せだったのか。なら、みすみす息子の幸せを奪ってしまふところだったのか。まあ、オカルトなんぞで何もできないなんて分かりきっていたもう、変なお土産なんか買うのやめてお菓子でも——」

「はあ？叔父さんどういうこと？オカルトに意味がない？」

「え？はは、お土産やさんで買い漁ったお守りのことを当麻は言ってるんだろ？」

「お、お守り？当麻、これ、叔父さん犯人じゃなくない？そもそもおじさん！御守は買い漁ったら効果が喧嘩して不幸になるから、各地で買ってきちゃだめ！」

「そうなのか？」

オカルトに興味なさすぎなの？ただのオカルトでもこれって有名な話よ？それにこの言い方、各地って結構重複してやばいことになってるんじゃない？

「どういうことだ？」

「これって、魔術とか魔法とかじゃない、趣味のオカルト程度の層でも有名なんだけど、各地のお守りを集めると力の対立があつて……お守りって言ったってたかがお守りってたかをくくっちゃいけないの。確実に加護は存在してる。微々たる物だけ。」

「偶像崇拜みたいなやつか？」

「やけにスムーズね？まあ、そんな感じ。そーよ、お守りや象徴をかたどった彫り物だったり。既製品のお守りだって、正しい位置に置けば魔術なんてポンポン発動できちゃうんだから！」

「待つてくれ？俺んちにはお土産家中にあった。それがもしも」

「？正しい配置に着いてたら、ついてしまつてたらね？発動するんじゃないくて？」

「っ！」

「聖朝歌ミサカの言うとおりにやーカミやん。」

そこにもう一人、行方不明になつてたやつが現れた。

「土御門……。」

「聖朝歌ミサカ、遠隔的に儀式場を使うことはできるか？」

「へ？まあ、知つたからには、直ぐに儀式場なんて……見つけた。」

車でそう遠くはない場所に巨大な儀式場がある。

飛んでいけばすぐにつくだろうし。

「あそこには数々の巨大な魔法陣が敷かれていた。俺でもわからないような。なんとかできるか？」

「まあ、ええ。飛んでいきましょう。」

・

飛んで数分のところに上条宅は存在していた。至るところにお守りがあり、キモい御守もあつて鳥肌が立つ。

それにしてもやばい。

急遽アクセラレータ一方通行に同行を求めてここまで来たけど慎重に動かさなきゃならない。

お風呂場のに亀のおもちやがあつたのでそれをアヒルのおもちやに変える。ここで違う魔法が発動しそうになるため、無理やり抑え込んでから、部屋中の爬虫類と鯉の御守を集めてきて理想の位置においていく。

「どんな術だ？」

「世界中で一斉に大音量でアポカリプティックサウンドを鳴らすつて魔術。上書きできるけど、なんか楽器持つてない？」

「ねエ。」

「ケータイならあるぜよ。」

「じゃあ音楽かけてイヤホンを鼻に突っ込んで口開けといて。」

「俺が？」

土御門に無理やりそうさせると、家の中が光りだした。語彙力ないからあれだけど、光りだした。

そして徐々に御守が砕け始めて土御門に集まっていく。

「一方通行！・鏡を掲げて！」
アクセラレータ

土御門を挟むように東に私、西にアクセラレータ一方通行がたつて鏡を掲げる。

私はケータイのライトだけど。

これは太陽と月の代替品だ。

土御門はラツパの代わり

「何千の御守と共に鳴り響け、終末の音よ！」

そして、世界にフーガト単調の一節が鳴り響いた。

「……………おわったかア？」

「終わったわ。やったのよ！」

「土御門さん、被害すごいぜよ。」

「まっ、これで事件解決ね？」

終章 優しさ

海を満喫しきった私達は無事学園都市に帰ってきた。

黄泉川先生直々のお願いで、現像した写真を届けた頃には一方通行アクセラレータはすでに外出済みだった。

その為一方通行アクセラレータを探すために街を歩いていたのだが、その途中で入れ墨の男に声をかけられた。

「クソガキが世話になってるな。俺は木原数多。一方通行アクセラレータの能力の研究者だ。」

「一方通行の研究者？現行能力開発を行ってるって事？」

「ああ。アレイスターの野郎からの紹介で挨拶に来たってとこだな。」
「そう。で？」

顔の割には落ち着いたその木原は私の質問にニヤリと笑った。それだけじゃないと喜んでいるように。

「天井垂雄って奴知ってるだろう？そいつがオマエらの指令塔にウイルスを打ち込んでやがった。だから一つ、オマエを司令塔にするために学習装置をつかいてえんだ。そして一方通行アクセラレータと行動してやがるラストオーダーラストオーダー最終信号をぶつ殺す。」

「殺す？なんでまた？」

「必要ねえからな。」

「そもそもなんでまた製造路の違う私を司令塔にするの？」

少し黙ってから木原は何気なく

「ああ、そのラストオーダー？にウイルスが仕込まれてんだわ。仕込まれた経路がわかんねえからオマエにしろってなあ。」

そう言った。

「ウイルス？」

「無差別に人を攻撃するように暴走するウイルスがなあ。そうしちまったらプランとやらが崩壊するらしいんで、アレイスターの野郎が保護もしくは殺害しろってこと。ただなあ、芳川っていう研究者がウイルスワクチンを作ってるそうだが、間に合うかわからねえんだわ。それなら、殺したほうが早いだろ？」

当然だろ？ってそんな顔してるけど一方通行と行動してるなら、もう一方通行はそのラストオーダーを守るでしょ。なら反対。一方通行が守りたいって言うなら守るほうがいいもの。

「反対よ。一方通行に関わったならそんなことで殺すことなんてこの聖朝歌が許さない。」

「そうか、なら一方通行に合流する。一方通行にこのことは伝えてある。間に合わなかったら俺が殺す。」

「そう。で、一方通行の場所わかってるの？」

「いや、別に」

マジかよおっさん。

会計はおっさん持ちで、外に出ると一方通行の痕跡を追う旅が始まった。

「こつちであってんのかよ？」

「あつてるわ！」

路地裏をどんどん進んでいくとある研究所にたどり着いた。確かここでも実験をしていたはず。

「芳川のところか？」

「そうみたい。ほら一方通行が来てる。」

壊されたドアの壊れ方がドアを蹴破ったのではなく引きちぎったようなので一方通行で間違いないだろう。そのことを伝える。

「オマエ変態かよ？」

「顔面入れ墨には言われたくなかった。私がやってるのは、一方通行の跡追ひ。匂いみたいな物を感じ取って後を追ってるの。今日は一方通行はコンビニとか寄ってないみたい。」

そう説明をしていると研究所から一人の女性、確か芳川桔梗という女性が出てきた。

「義妹に木原さん？」

「芳川か、どうした？」

「あの子を追いかけるの。ちょうどいいわ乗って。保険としてあれをしてほしいの。」

そう言われて乗り込んだ車の中にはたくさんの機会が詰め込まれ

ていた。

そのうち木原が学習装置テストメントを見つけてきて近くの座席に座るように言われ、座る。

「今からこれを使って司令塔のコードを埋め込むからな。外すんじゃないぞ?」

膨大なシステムコードが流れてくる。

およそ十分程度静かに車に揺られながらそのコードをただただ読み込んでいった。

コードのインストールが終わった頃には、切迫した空気が社内に流れていた。

『オイ、クソガキの頭に電極みてエモンがついてんだけどよオ。これって剥がせねエ方がいいのか?』

「ん?もう少し詳しく話してくれないかしら?」

スピーカになった通話の先に一方通行アクセラレータがあるのがわかった。

よくわからない説明を一方通行アクセラレータがしていたのはわかって、それに芳川が答えていた。どうやら観測するための機械があるらしい。

「今そちらに向かつてるわ。あら、義妹シユウエスター起きたの?なら最終信号のネットワークを遮断して?」

「ええ。」

ネットワークの中から下位のミサカのネットワークだけを遮断していつでもハッキングできるように、いや現時点で思考のコントロールを始める。

「つ!まったく、最終信号のウイルスがなんかやばい!起動準備に入ってるじゃない?」

「本当?一方通行アクセラレータ、なにかラストオーダーは喋ってないかしら?」

スピーカ越しに幼い声の絶叫が聞こえてくる。

「ネットワーク遮断できたかしら?」

「できたわ!今こつちでハッキングしてウイルスの出処を探っているところ!愛ダーリンし子、そつちで生体電気の制御できない?脳の電気信号の制

御!」

『聖朝歌ミサカかア?出来るかもしれねエ。』

「なら好都合ね。こつちで大元のウイルスデータを探って消去する。人格データとウイルスデータのファイルが違うみたいだけど、いくつかコピーされちゃってるわ。これは脳の電気信号とかじゃないから任せて。」

『オレはどうすればいい?』

「全データの消去。今ウイルスデータの隔離、人格データのバックアップは今とったわ。ウイルスデータと照合して同じデータの消去ができるけど、こつちはすごい時間がかかる。まって、ウイルスデータのコピーは完了されてる、負担がすごいわ、助けたいなら早く消さない。」

一方通行が扱うのはコードだとして、私はパソコンのように簡単に作業ができるが、一方通行と違って時間がかかる。
アクセスレータ

一方通行は10をはずつ消していくのに対して、私は10を同時に消していくため、一見早いように見えるけど、同時に作業をするため時間がかるのだ。

コピーして照合して消すのも5分かかるだろう。

そしてウイルスデータの消去するのに20分。

起動しようとしてるウイルスに対して時間がかかりすぎる。まだウイルスデータの引き抜きと隔離、そして人格データのコピーしかしていない。

『任せろ。ただ、オマエに負担がかかるんじゃないかねエのか?』

「こんなこと慣れっこよ。それにしても私は貴方を助けるために来たんだから、今更心配してんじゃない! さき、開始して!

バックアップ用の人格データの中に入っていくと、様々なデータが入っている。

暗号化されたウイルスコードを照合してウイルスコードに移転。

そしてその中のすべてのデータの消去をする

「m縹?・03882722728383・46、986、414ツソツソツ。ツヨ窶吮?・吮?? 窶ヲツオ窶シテキ窶??ヲ窶ーツオ窶セ窶サマ?マ?窶シツキツキ「?.\$689&p.\$413”4竭コツケ窶ヨ窶ア窶イ窶コ窶セ窶ヤ窶ソ窶ー窶ク窶コ窶シ窶シ窶コ窶コ

寶ク寶「竭」竭・寶ヲ竭ヲホ湮湮茂アホエホアホコホイマ?サホウホ
サホウホシホエマ?オマ???(マ?宛奸娯宛奸鞞悪奸昶挨奸「奸」奸
奸・奸ア奸エ奸エ」

順調に、消していく。

〔縛九d縛?・&縛?・&縛?・U逕倅錐蜥後&縲上d縲舌ち縛檣曝螳力縲
?・聖縛ツ鄂?逕倅?臥聖縛ツ鄂?縛?縛薙&縲√?詞代'髮イ縛輔d
縛ツ縲√エ縲ツ縛ツ詞代'逕サ螳力縲シ諧工邏励r逕倅??喧縲?キヨ
縲√?縲√?鄂?縛?縛九?需昂 縛励?縲械?蛹厄シ臥診縲偵||
縛九d縛輔n縛?縛彖シ医'縲。諤悶&縲上。縛檣曝〕

一つ一つ消していくたびに文字化した文字が頭に浮かんでいく。
「おい、水。」

木原から水を受け取り飲み干す。ポタポタと鼻血が流れてきた。

「?×??!!?摩?×??楮??物?昨×敬??山(?素」

「鼻血出てんじゃないやねえか。」

「大丈夫。」

およそ十分後、車が止まるのを体感する。

ふと、窓の外を見れば、ひしゃげた車の中から一方通行アクセラレータに向かって
何かを向ける白衣の男が見えた。

ミサカネットワークの検索によると、天井を慕っていた男のよう
だ。

守らなくては。一方通行アクセラレータを。

・

ひしゃげた車から這い出てくる男が見えた。だが、反射に能力を
使ってる暇はねえ。

「クソ、ガキが!」

血迷った目でその男がうめき声を上げる。

今打ち止めから手を話したらそれで終わりだ。聖朝歌ミサカの努力が消
えるだろう。

打ち止めに取り付けられたモニターは次々に文字が消えていく。
それもあと少しだ。あと少し、ほんの20行ですべての
通話越しに聞こえた木原の鼻血の事。いつだってあいつはオレの

盾になって殴りかかっていた。

「邪魔をするな！」

バン！バン！と音がする。

その直後眉間と肩に強い衝撃が走った。

意識が遠のく中、すべてのコードが消えるのを確認した。

・

そのすがたを、アクセラレーター一方通行が拳銃で打たれる姿を調子してしまった
聖朝歌は目の前が真っ暗になった。

残り十五分の作業は、脳を傷つけない範囲での計算だ。

しかし脳をフル活用するならば、摩耗してならすぐに終わらせられる。そう確信していた。

「ぶぐあばー！」

「おい！聖朝歌！」

血の塊を吐き出してしまった聖朝歌に木原が駆け寄るが、聖朝歌は無視するように立ち上がって車のドアを開ける。

「無理してんじやねえのか？おい！」

シユヅエスタ「義妹、貴方！」

「バックアップの浄化完了。検体番号20001号にインストールします。」

聖朝歌の口が勝手に動いていく。

抑揚のない無機質な冷たい声が響き渡った。

「分霊個体ミサカIIアウターゴッツに以上発生。症状、脳内出血。エラーコードNo. 5。本個体の致命的な血液損失及び脳内出血を確認。再生不可能。再起動不可。」

聖朝歌の視線のその先を大人二人が見やれば、銃口を最終信号に向けた男の姿が見えた。

ミサカ「聖朝歌！一方通行アクセラレーター

っクソ！」

最初に駆け下りたのは木原だった。木原は最終信号の前に立ちふさがって銃弾から最終信号を守る。

「あつぐつ！てめえ！」

そこで倒れる木原ではなかった。振り向きざまに拳銃で男の右手に発砲する。その弾は見事に右手に当たり、男は苦痛で顔を歪めた。その間に聖朝歌が一方通行に駆け寄る。

額が割れ、血が流れ出し、腕には銃弾が入り込んだ彼の額に手を添える。

「愛し子の致命的な負傷を確認。エラーコードN0.5の為対処できません。エラーコードN0.5を優先。身代わり術式の展開を発動。聖朝歌の傷を一方通行に。エラー発生。対象者聖朝歌の傷を一方通行に。傷を聖朝歌に。」

エラー発生。術式の再構築。当個体の状態を再確認。症状脳内出血。術式の該当者の状態確認。銃弾による頭部負傷。該当者の特殊コードを確認。該当者一方通行は愛し子。」

ほぼ意識がない聖朝歌はただただ己の自動防御機能にすべてを委ねて一方通行に這い寄っていく。

その傍らで芳川は男に拳銃を向けていた。

その反対側では、木原が最終信号を培養器に運ぶために力を振り絞っていた、

これこそ、聖朝歌が歪めた事実の一つ。
一方通行は誰かに助けられる運命だ。

だからこそ、どこかで感化された大人が彼を守ろうとする。

かつて一方通行が能力暴走を引き起こしてしまった際には木原と駆けつけた黄泉川愛保が彼を止めた。

実験で命令だったとしてもたった小さなメッセージを受け取り凍結、そして中止に追い込んだ五条が居た。

情報統制の為とはいえ襲われる一方通行を心配して一時の安息として外に逃した統括理事長が居た。

今も、一方通行の願いを叶えるため聖朝歌と芳川と木原が協力している。

ヒーローになれないがヒロインになれる性質変化はゆっくりとその特徴を表していく。

しかしそこには穴がある。

統括理事長でさえ気がつけない穴が。

古来より英雄を作ったのは神だ。神がセツティングしたのであれば、ヒロインだってヒーローになれる。

物語においてヒロインは幾度か攫われたり悲劇が起こるものだ。それでもそんなことは許さない。だって聖朝歌は邪神なのだから。

這いずって一方通行に近づいていくミサカを芳川は横目に見ていた。

男は唯一怪我をしていない芳川を脅威に思っていた。一方通行の攻撃を聖朝歌たちが到着する前に受けていたのでそれが今になって響いてきたのだろう。

「ごめんなさいね。私ってどこまでも自分に甘いから、殺す勇気もなくて、それでも見逃すこともできないみたい。」

「ぐ、なぜここが？」

「あら？あの子の携帯電話通話中だったの。それに一応GPSも持たせてからなのだけれど。」

芳川は、一方通行を母親のような目で見下ろす。

「あの子、思った以上に慕われてるのね。」

一方通行の傷を身代わりに引き受けた聖朝歌が力なく一方通行の腹に力なく頭を埋める。

一方通行の腹部が聖朝歌の血で染まっっていくのをゆっくりと見ていた芳川は静かに男を見る。

遠くで救急車のサイレンが鳴っていた。この状況を確認できる男が手配したのかもしれない。

ただ、芳川は彼らの盾となるように男の前に立つ。

「あの子ができたように、義妹がやり遂げたように。私だってやらなくちゃ。私は、先生になりました。子供と笑い合って卒業式で泣いて。私は甘い正確だから諦めた。優しいわけじゃないもの。」

一方通行は自分を守ることをできたはず。それでも他人を助ける優しい選択をした。聖朝歌だって木原だってそうだ。

なら自分にもその優しい選択ができるだろう。そう芳川は思っている。

「天井さんが殺されて、今度はこの俺だ。すべて一方通行アクセラレータのせいさ。奴が実験を続けたのなら！こんなことにならなかつた！」

「終わりよ。そもそも実験自体間違ってたのよ。一人で死ぬのが怖いなら私を選びなさい。子供たちを巻き込むのは許さないわ。私のたった一度の優しさにかけてね。」

・

吉川桔梗が目覚めたのはとある病室だった。

目覚めると同時に入れ墨の男の顔が見えた。

「よお目覚めたか。」

「私生き残ったの?」

「そうだね?」

木原に対する質問は、木原ではなくカエルに似た凄腕の医師が答えた。

「誰か執刀したと思ってるんだい?と言っても死人を手術できるわけじゃないから例を言うならあの少年にでも言っておくんだね?気絶しながらも君に血流操作で一滴残らず繋いでくれていた。」

「ガキの方は声帯を傷つけてしばらくは声が出せねえらしい。手術は終わったようだ。」

「義妹シユヴェスタは?あの子は?」

「あの子は、うん?もうかれこれ三時間。難航してるよようだね。前頭葉に刺さった頭蓋骨の破片を取り除くのと、脳内出血による脳の検査、そして輸血で苦勞してるようだよ。体の方にもいくつか血管の破裂が見つかってるし、何をしたんだい?彼女は?まあ、僕も応援にくし、何か伝えることはあるかな?」

芳川は少し考えたあとに

「義妹シユヴェスタ、聖朝歌ミミサカはどうなるの?」

とだけ聞いた。

「うん?まあ、前頭葉に傷がついてるらしいからね?言語機能と計算能力、そして脳内出血の影響で障害が出るかもしれないね?」

「計算能力が。」

能力者にとって致命的なものだ。それ以前に義妹シユヴェスタの能力は現実

改変能力と言うとてつもなく希少な能力。

それを失うこととなれば彼女はともショックを受けるだろう。

「まあ？問題は無いんじゃないかな？彼女のことは知ってるしね。」

「知ってる？」

「彼女、二ヶ月前ぐらいまでこの病院に入院してたのさ。彼女の特異性ならよく知ってる。自己再生ならやってのけるんじゃないかな？」

そう言うと言者は芳川の病室を出ていく。

「一方通行アクセラレータが私を生かしてくれたのね。それに義妹シユザエスターも。なんだ、ま

だあの子はやれるじゃない。」

「ああそうだな。そして俺達はそれぞれ保護者に謝罪することになった。クソガキの保護者と聖朝歌ミサカの父親にな。」

「私は、感謝をしないとね。」

再覚醒

序章 キタブール・アジフ

病院の一室。

病室が集中治療室から一般病棟に移って、外出も許可されたことで病院内を出歩くことが許されたのはつい5分前のこと。

夕暮れ時で夕焼けの日差しが眩しく、焼けるような色をした西と夜になりつつある東の空のグラデーションがとても美しく見える。そんな天気だった。学園都市の天気予報では夜中は星がきれいに見えるとのことで、ラストオーダーを誘って星でも見ようかな?と考えている。

一方通行を誘うのも悪くない。

脳の損傷が激しくしばらくは歩くこととうまく喋ることが出来なかったため久しぶりに一方通行アクセラレータと会うことになる。

ノックをしたら部屋の主が返事をしたのでそのまま入っていく。

「久しぶりね!」

喉あたりに包帯を巻かされている一方通行アクセラレータが居た。

「あん? 聖朝歌ミサカかアもう出歩いていいのかア?」

「動き回っていいって!」

「でエ? 中学の方はどうだったんだ?」

「実はというと、編入先が変わって夏休みと変わらないの日常を歩むことに。能力開発主力に。」

「へエ? 能力開発なら霧が丘中学かア?」

「そうにございますー。」

一方通行は声帯を負傷し、しばらくうまく声が出せていなかったらしいが、今ではもとの声を取り戻している。しかし術後の精密検査でいろいろな免疫が足りないということでの予防接種だったりいろいろ検査をするそうなので一ヶ月ぐらいは入院だそうだ。

「ラストオーダーは定期検診だぞう。ああ、私がない間にいろいろと暴れまわってたそうね? 駄目でしょ?」

「クソ野郎がいたから潰してやったんだ。」

「それで再手術したのはどこの誰かさんかな？」

「オレですウ。」

「もー！入院期間伸びたら退屈なのはそつちじゃないの？」

コンコン。

「あア？」

コンコン。と窓をノックする音が聞こえた。テラスもベランダもなく、窓の外は空中というこの部屋でノックはおかしい。

一方通行視線^{アクセラレータ}を追って窓を見てみると、病室の窓に折り鶴が引っかかっている。不自然にだ。

そもそも折り紙がコンコンなんて音を出すはずもない。

近くによつてみて見れば、魔術的な伝達術式のもので、窓を開けて招き寄せると、私の目の前で折り鶴が振動して音を伝えてくる。

『こちら【異界より来る純白^{きた}】オリヴェイエ^{マジックキャバル}フィリップ・アウターゴツツ。申し訳ありませんキタブ^{マジックキャバル}リアル・アジフを盗まれました。』

異界より来る純白は昔から私の子孫に作らせた魔術結社だ。クトゥルフ神話系列の結社でクトゥルフ神話系列の出版物をしている会社でもあり、パパの会社で開発された学園都市の外でも実用可能な医療器具（卸認定済み）の輸入もしていたはず。どこの国かは忘れた。

私の信奉者が集う会社でほとんどが私の子孫となる。

それは竜宮生物研究所も変わらないけど。

「なんだ？」

「私の下僕。これは電話の代わり。聞こえるかしら？」

『はい。現在追っております。』

「配送ご苦労。回収はこちらですからから研究所に向かってなさい。」

『はい。恐れ入ります。』

「あと、手に持つてる折り鶴はその場においておくように。」

しよんぼりとした返答を聞くと、折り鶴はなんの変哲もない折り鶴に戻ってしまい、ポトリと地面に落ちた。

……やばい。キタブ^{マジックキャバル}リアル・アジフは私のコレクションの中でもとびきりやばい原典の魔導書の完全な写本早く取り返さないと行け

ない。

あまり公にしたくない代物だ。

その本は本来13世紀にはすべて破棄されている事になっている。今残っているものは不完全な写本だけ。

取り返さなければならぬ。絶対に。

「とりあえず現地に行ってくるから。」

「オレに言うのかよ?」

「できる聖朝歌ミサカは外出時誰かに声をかけるものって決まってるし。じゃね愛し子ダーリン。」

同じ折り鶴の元にテレポトする。

魔術回線が途切れて間もないので誤差二メートルほどの場所に飛ぶことができた。

今回奪われたキタブール・アジフは元々私が書き写した魔術書だ。

その魔力もずいぶん昔に覚えている。

また防衛機能として血縁以外が所持した場合に限り一定間隔で周囲にマーキングを行う。めつたに被らないとして旧き印エルダーサインを自動で刻ませるプログラムを組み込んでいる。

それを追っていけばすぐに犯人にたどり着くことができるというわけだ。

しばらく追跡を続けていると路地裏で風紀委員ジャッジメントの少女と男数名が倒れていた。

近寄ってみると、コルクスクリユーが少女に突き刺さっている。

声をかけようとしたところで、その少女がやつとのことで起き上がる。

「あら、お姉様?っ、すみません人違いでしたわ。」

「救急車を呼びましょうか?」

「いえ、ありがとうございます。」

男の方を見やると、その衣服に旧き印のマーキングされていた。

「失礼、この男達の何かを物を持っていませんでした?」

「?関係者ですの?」

「仲間が回収したとか？めんどくさいな。」

ジツと視線を感じて少女を見る。

「それにしてもズタボロさんね。病院に連れてってあげようか？子猫ちゃん。」

「いいませんわ。わたくしはここでリタイアするつもりはありませんの。それに、わたくし聞いてますのよ？貴方は関係者ですの？」

キャンキャン騒がしいな。

少女が怪我をしているのは、怪我が酷いのは右肩、左脇腹、右太腿、右ふくらはぎ。

その他のかすり傷にはウチのスプレーで傷を塞ぐ。

「ちよつ、何をしますの？」

「ああ、これ？パパの会社の商品よ。宣伝も兼ねて持ち歩いているのさ。」

「パパ？……それはアウターゴッツの液体絆創膏？」

「そう。この前発売した新商品。」

「アウターゴッツの令嬢ともあろう方がこんなところに何故いますの？」

「探し物。って、こんなことしてる暇ないでしょ？どこに行けばその傷を治せるの？」

「……私の寮ですわね。」

彼女は常盤台の生徒らしく、外の常盤台の寮に送り届けた。

意外と近く、回復しつつある身体能力で向かってみると、信じられないという顔をされた。

衝撃は行かないように能力で操作したにも関わらず。

「あそこが私の部屋ですの。」

「OKOK。」

「ここからはわたくし、自分で行くのでここで待っていてください。」

「おや、付き添わなくてもいいのかな？」

「ええ、待っていてくださいませ。」

一章 座標移動

彼女が風紀委員ジャッジメントならば（何かしら情報のやり取りがあるだろう。この場合彼女を盗聴すればいいが、どうやって盗み聞きをするかだ。あからさまな行動はするべきではない。

「ちよつとアンタ、こんなところで何してるの？」

「ひっー！」

寮を背にしていた私の後ろから殺気のコもった声をかけられた。

大人ではない。風紀委員かこの寮生だろうけど、こんな時間にお嬢さまが出歩くか？

「義妹シユヱスターだっただかしら？なんでこんなところにいるの？」

何だ知り合いか。

後ろを振り向けば私より1・2歳ほど年上の顔つき（胸はおしとやか）なカラーリングが違う少女、御坂美琴がイライラしたように立っていた。

「あなたに関係ないことですよ。」

「関係ない？ここに来て？私の知り合いに手え出したらただじゃ済まさないわよ？」

「おお。怖い怖い。か弱い十三歳ちゃんをいじめないでくださいよお姉様。」

イラツとした顔をしたのもつかの間、ヒュンツという音を聞いて顔を変える。

「つと、お待たせいたしましたわ。竜宮聖朝歌ミサカさん。とお姉様？」

とそこに風紀委員ジャッジメントの少女が現れる。私の名前をフルネームで呼ぶあたり書庫バンクは調べられたのだろう。

「おや、流石風紀委員ジャッジメント。私を特定できたとは良かったねえ。子猫ちゃん。」

「白井黒子ですの。ほんとにそっくりですわね。ところであなた宛てのあのキャリーケースの中身は一体何なんですの？」

「全ては知らないわ。見たことがないし。」

「はああ。」

疑問に思ってる。といった様子だ。

メモ帳片手に真つ直ぐこちらを見てくる。第三位は睨んでくる。

「12世紀頃に書かれた古書よ。親戚に貸してたの。仕事でこつちに
来るってことだから多分サンプルとかお土産も入ってるかも。」

「ひったくられた際に所持していたのは誰だかわかります?」

「オリヴィエIIフィリップ・アウターゴッツ。竜宮生物研究所にいる
と思うわ。」

「確かですわね。そうそう、なんで通報しなかったのです?」

「中身が貴重な研究資料だからよ。それにたかが本だつて雑に扱われ
ても困るし。ならとつ捕まえたあとに突き出せばいいでしょ?なん
せ、世界にたった一つしか残ってない物だからね。」

「世界にたった一つ?内容はどんなものですか?」

「え?神話だけ?」

神話と聞いて子猫ちゃんは困ったような呆れたような顔になる。

まだ 第三位は睨んでくる。しつこい。

「アンタほんとにそれだけ?」

ムスツとした顔されても同仕様もない。

「私がひったくられたわけじゃないもん。それになんであなたが突っ
かかってくるの?風紀委員の彼女に話してんのに部外者が入って
くんじゃないわよ。」

「お姉様、今回は申し訳ありませんが風紀委員の仕事ですの。」

「ごめん黒子。私は私でこいつに用があんの。樹系図の設計者そして
残骸。知らないなんて言わないわよね?」

れむなんと?なんだそれ。知らないぞ?!

ミサカネットワークにもそんな情報ないし。

何をそんなに焦ってるの?説明してよ。

「?」

「とぼけてんじゃないわよ。知ってるんだから。それとも痛い目に会
いたいのか?」

「いやいやいや、流石に横暴すぎやしない?いくら仲が陰悪だと言っ
て知らねえことを知ってんだろ言われても聖朝歌に思い浮かぶのは

「殺意だけだぜ？」

「……。」

「今回聖朝歌は盗まれたことしか知らないんだけど。」

「黒子。アンタは仕事に行つて。」

「ですが、お姉様。」

「ごめん黒子。」

・

御坂美琴に引つ張られて夜の公園にたどり着く。

「残骸が集められて樹系図の設計者が再建されれば、実験が再開される。」

「再建？何その話知らないけど？まさかあのときの予防線のフェイクを信じてるとか？」

「樹系図の設計者が再建？あああんなフェイクレポートまだ信じてるの？」

「フェイクレポート？信じると思つてんの？」

「やっだ！聖朝歌ちゃん有能な部下持つてラッキー。常盤台のエアスちやんとか各国騙せちゃうとか。」

「ふざけてんじゃないわよ？この距離ならあなたの脳を焼き切ることなんて簡単なんだからね？」

「あーら、人間の焼け具合を嗜む狂人ちゃんなわけ？脳を焼き切るとかホントにできるならやってみなさいな。」

「第三位の髪がふわっと浮いたかと思うと電撃がこちらに流れてきた。」

電撃は私の頭スレスレを通り抜けていった。

これで何人も脅してきたんだろう。けど、私は効かない。前回の怪我でI-I-A-I-M拡散力場で体の修復と再生ができるのなら、気をつけるべきことが大幅に減る。

怖いことなどない。

「これは警告よ。」

「やっだー！やってみなさいもロクに達成できないの？」

「私を苛つかせてそんなに楽しい？子供みたいにはしゃいじゃつて。」

「乙女かつ少女な聖朝歌^{ミサカ}はとっても楽しいです。そもそも十三歳ちゃんなのでこどもですよ。それに言ったよね？私に関わるほど無様になるって。」

「」

「木原？」

今日は着の身着のまま飛び出したからスマホしかないんだよね。ホントは別の電話のほうにメモ取り安いけど

「メモの準備!!」

「はあ？私が？」

「はよはよ。」

この前の事で電話番号をお互い登録した。

一方通行の所属先が竜宮生物研究所に移ったことであつたことと関わり合いになるだろうし、^{ワンちゃん}猟犬部隊とは今後仕事をともにするかもしれないし。顔に似合わず一方通行のことを気にかけてたし。

『よお聖朝歌^{ミサカ}ちゃん。なんの用事かなあ？』

「木原くんさ、第三位が樹系^{ツリー}図^{ダイアグラム}の設計者が破壊されたって言うてるんだけどあの人なんか言ってた？」

電話越しにゴツゴツと硬いものが触れ合う音が聞こえてくる。多分車の中で^{ハウンドドック}猟犬部隊を動かしてるんだろう。

『あー、流石クソガキんこのやつだわ。クソガキだなお前も。』

「知ってるとは思うけど一応聖朝歌^{ミサカ}何年生きてるのかここの中で考えてみなよ。」

『ああ？精神年齢がクソガキってんだよバーカ。あー、お前は考えたことねえかもしれねえけども、樹系^{ツリー}図^{ダイアグラム}の設計者が破壊されたってデマがどつかの誰かさんのせいで流れててよお。俺らは今その鎮圧途中だよ。あー誰のせいかなー？誰かさんのせいで働かされてんのかなー？』

私です。私がやりましたとも。

「ちよつとーそれってホントなの？」

電話越しの木原に今度は第三位が声を上げる。しかもかなり生意

気に。相手が年上かもわからん奴によくできるわ。

『あ？クソガキ今誰といる？アクセラレータ一方通行じゃねえのか？』

「第三位。」

『あークソガキか。』

「クソガキつてあんたねえ！」

アクセラレータ一方通行であれ、お兄ちゃんであれ誰であつても木原くんはクソガキ
と云うだろう。

『言葉のなつてねえガキだな。ま、とりあえずこの情報は確かだ。何
人か何者かによつて倒されたあとだが、主犯者もわかつてる。……
あ？おいどういふことだ？』

木原君が電話ではなく搭乗している班員の方に声を向ける。班員
の声は聞き取れない。

『ひつたくりがあつたそうだが、主犯者は同じだ。お前がなんで病院
に居ねえのかもわかつた。今からとつておきの情報教えてやるから、
しつぽを存分に振つてききやがれ。』

「はいよー。」

『主犯格は結締淡希。大能力者の瞬間移動、ムーポイント【座標移動】の能力者だ。
お前ならわかるだろうが案内人。過去の実験で能力の失敗により自
身のテレポートに数秒ラグが出る他、精神的ストレスで体調を崩す
が、それ以外なら手を触れずにテレポートできるようだ。いま、そい
つらに乗つてるマイクロバスを追跡中だ。乗るか？』

「勿論。」

『なんつーか、そろそろお前脳みそ解剖されるんじゃないやねえか？』

「ふ、これを教えたのは木原くんでしょ？」

『はっ、そうだったな。なら俺も竜宮んところに入れてもらつちまおう
かな？』

そして電話が切られた。

手術後、暇だったから木原くんに能力開発の資料やらなにやらを叩
き込まれるハメになった。

その中には多重能力者デュアルスキルのものも含まれていて、もともと持っていた
自身と友好関係にある範囲の攻撃を一切受け付けない。という能

力の一辺を考えて、自分だけの現実が他の人より複雑なのではないのか？という結論に至った。

もともとテレポートだったりサイコキネシスとかそう言う有名どころは昔に使えていたからか、すぐ物を手から手に移動させる事は出来るようになった。

そもそも私の能力はフレンドリーファイヤーを防ぐだけのものじゃなくて、突き詰めていけば超能力の基礎的な基礎、現実を歪める力なのだ。

そもそも私が頭を負傷してもう動けるのだって、AIM拡散力場で皮膚とかいろいろと変換して治療したんだし、

行ける行ける！

「で、どうやって行くの？」

「そんなもん、瞬間移動よ。」

「黒子が行っちゃったわよ？アンタは欠陥電気でしょ？」

「あら？知らない？私の能力は外界演算よ。」

・

テレポート先は道路、そして約五メートルほどの距離に走行していき黒いワンボックスがある。

ワンボックスの先には旧き印が所狭しに浮き出たマイクロバスが走っている。

「ちよっ！空中じゃない！」

その上、約十メートルほど上空に飛び出た。

第三位が私の腕を掴んで車に向かって電気を放つと私と第三位が磁石みたいに引き寄せられる。

「何してんのよー！」

「ビギナーに対してこの扱い。」

スライディング式サンルーフがこの車にはあるようだが、中を覗いてみふと木原くと目があつた。

木原くんはRPGを持っていて、それを無言で私に手渡してきた。

型式はよく見る7のやつだと思う。たぶん。

「何それ？」

「対戦車兵器。」

使い方はインプット済みのため、そのままマイクロバスにぶつ放す。

思惑通りとはいかずマイクロバスに直撃して近くの建設現場に吹っ飛んでいく。

「ちよ。」

路肩に車は停車して、それぞれライフルなどを持った部隊員が車の中を確認しに行く。

「なんなのよー！」

大破したバスの中から赤毛の少女が出てきた。胸をさらしで巻くだけの格好をしているのでたぶん露出狂だ。

そして彼女が持っているキャリーケースには、アウターゴッツの家紋の蔦とどぐろを巻いた蛇の紋章が刻まれていた。

二章 御坂美琴

第三位が私の前に出て、超電磁砲を撃つ。

赤毛の女の真横をすり抜けていったレールガンは後ろの建築中のビルの鉄骨を弾き飛ばして行つた。

その反動でキャリケースが吹き飛ばされ、かすっていたのか、鍵の部分が外れ、中身が散乱していく。

発泡スチロールの衝撃吸収材がばらまかれていく中、一冊の本が意思を持ったかのように、いや自らの意思で私の方に飛んできた。

800ページにも及ぶ分厚い本は私の目の間で止まると、やっと本来の持ち主の元に来たことを喜ぶように勝手に開き始め、不意に止まったかと思うと、赤毛の女の方を向いた。

「そんな、本？そんなわけ……ぐがあ!!!」

頁の内容を見てしまったのか、赤毛の女は血を吐いて倒れる。冒瀆的な内容に脳が耐えきれなかったからだ。

「本当に本なのね。」

表紙だけを眺めている第三位は、ぐるっと回って本の内容を見ようとしたが、それを私で止めた。

「見ちゃだめ、ああんりたくないでしょ。」

私が本に触れると勝手に本が閉じる。

第三位はちらりと女を見やり、表情を強張らせた

本物だと確認できたことだし、私はおとなしく帰ることにしよう。

「あとのこととは我々に任せてください。」

「あんた達って何なの？警備員アンチスキルってわけじゃなさそうだけど？」

「あ？民営治安維持部隊だ。お前らはとつとと帰れ。」

「ふーん。」

後処理は木原くんたちがすると思うし。

御坂美琴は後日出向くとかなんとかで言葉を残して立ち去ってしまった。

子猫ちゃんの説得も何もかも引き受けてくれたのでいいとするけどね。

9月18日

あれから少し気になって、私の家系と御坂美琴の家系を調べさせたところ、パパと御坂美琴の母親がはとこであることがわかった。

御坂美琴の母方には竜宮の血が混ざっていたから、受肉が上手く行ったのかもしれない。

そして今日、先日のお礼と称して御坂美琴に呼び出されていた。

「第三位ー！」

「その呼び方なのね。」

「聖朝歌^{ミサカ}ケーキ食べたい。紅茶はロイヤルミルクティーがいいな。」

「アンタ達の中でミルクティーって流行ってるの？」

「この聖朝歌^{ミサカ}はロイヤルが好き。」

案内されたカフェにはホットケーキやエクレアからパイ、ケーキが沢山あった。

「シヨートケーキとミルクティーを。アンタは？」

「チョコバナナのハワイアンホットケーキとシヨートケーキ、ロイヤルミルクティーを。」

かしこまりました。といってオーダーを通しに行く店員さんを見送って第三位が口を開く。

「この前は黒子を運んでくれたって聞いたわ。ありがとね。」

「べつついに。聖朝歌^{ミサカ}も都合が良かっただけだし。怪我の方は？結構やられてたみたいだけど。」

「しばらくは激しい運動を控えるようにって。大覇星祭は出られないらしいわ。」

「ふーん。」

「所で、一方通行^{アクセラレータ}のところにも選手宣誓の話行ってた？」

「来たわよ！えへへー愛し子^{ダーリン}やるんだって。研究所は大騒ぎでカメラ用意してるの。宣誓のときは、多方面^{アクセラレータ}から一方通行^{アクセラレータ}を写真取れるように張り切ってる。」

「愛し子^{ダーリン}ってアイツのことなのね。」

しばらく話していると、やっぱり当麻のことが好きなようで、頬を

赤らめたりしていて面白かった。

「アンタ、明日からどうするの？一方通行と学校違うでしょ？」

「うん？あーそれね。私も一方通行も特設クラスだから参加しないよ。一方通行は聖七歌ミナカの応援にパパと行くみたいだから私は、当麻の応援かな。インデックスと買い食いもするだろうし。」

「インデックスってあのシスターよね？それにアイツの応援？」

「まあ、親類の好で冴えない高校生ちゃんたちを天才美少女中学生が応援するってわけ。」

食事もおわり、会計待ちをしていると花瓶が歩いてきた。

柵川の制服を着た少女がどこか落ち込んでいる雰囲気歩いていく。その後ろには聖七歌ミナカと黒髪の少女が尾行するようになってきた。サンングラスをかけて。

「もし、そこな少女。」

「へ？あーと竜宮さん？」

「ありや？なんで私のこと知ってるの？」

「えーと、この前の窃盗事件で白井黒子さんのナビゲーターをしました。初春飾利です。」

「子猫ちゃんのナビゲーターか。花瓶ちゃんヨロシクね。」

「花瓶ちゃん！」

花瓶ちゃんは少し頬を赤くした。

「でえ、どうしたわけ？そんな梅雨みたいな顔して。」

「あの、この前の事件で犯人を捕まえることができなくて、その。それに、白井さんにケガを……。」

「無事本は戻ってきたんだしき。」

犯人についてぼやかされてるってんなら暗部行きかな？

確かあの赤毛は案内人とかなんとか、上手くやるねえ。

「あれ？戻ってきてるんですか？」

「うんうん。ちゃーんと保管してるよ。だけど指紋も証拠とかなーんにも出てこなかったのって残念よね。」

「そうなんですか。よかったあ。でもなんで連絡がこつちに来てないんでしょう？」

「さあ？聖朝歌知らなーい。でもでもあの短時間で聖朝歌を割り出すなんて花瓶ちゃん凄いね。」

「そんなことないですよ！私にはそれしか出来ないのでから。」

「うーん、自分ができる事をやらないでいる人も居るからすぐ立派だよ！」

学園都市の治安を守ってくれてるもん、ありがとね。」

「そんな、照れちゃいます。」

「あれ？初春さん？」

と、そこに会計を終わらせた第三位が店から出てくる。

少し顔を赤くした花瓶ちゃんを心配そうに見つめて、熱でもあるの？とそう聞いた。

「まさかコイツになにか言われた？」

「そういうわけじゃなくてですネ。」

「そーよ、第三位。別に花瓶ちゃんに物申してたわけじゃないの。」

「花瓶ちゃんってアンタねえ。」

「やーだ、第三位ってば聖朝歌とデート中なのに他の女のこと考えて！」

「ちよ、何言つて！腕に抱きつくな！嘘を教えるな！」

「あはは、私は失礼しますね。」

「ちよ！初春さん！違うの、違うから！」

苦笑いで花瓶ちゃんは遠くに行く。

「別に彼女は誤解してるわけじゃないのに。それにこの聖朝歌がスカートの中に短パンを履くような女とは付き合いませんことよ？」

「なんで知つてんのよ？」

「いや、よく動くからねえ。見えちまうもんは見えちまうぜ第三位。」

「そんな、まさか。っ！」

「どうしたわけ？」

第三位がいきなり隠れるように私の後ろに行ったため、見ていた方を向くと、嬉しそうな男が近寄ってきた。

「あつ、御坂さんじゃないですか。と貴方は御坂さんの親戚の方ですか？海原光貴です。こんにちわ。」

「こんにちわ、美琴の親戚の竜宮聖朝歌です。」

「竜宮さんですか。よろしくお願ひします。これからこの店に？一緒に緒してもよろしいでしょうか？」

「ああ、ごめんなさいね。今ここを出たばかりなの。」

「そうでしたか。」

「良かったら別のお店にも行く予定だから一緒に行きませんか？」

「いいんですか？お供させていただきます。」

勝手に同行を決めた時点で驚いた顔をしたが、流石にそれを口にす
る気はないようで、別のお店にも。というワードに第三位は触れる。

「え？ちよ、まだ行くの？」

行きます行きます。この人多分海原光貴じゃないからね。多分魔
術師だね。なんとなくこの人から感じる物がある。

ここで私とこの人だけになるのは不自然すぎるもの。

悪いけど第三位には話し相手になってもらうぞい。

第三位を真ん中にして歩いていくと、ちょうど座れるテーブルと、
道路を挟んだ所に30分待ちと書かれた看板を持っている店員がい
るクレープ屋を見つけた。

喋っている二人が無言になる一瞬について、第三位の腕を取る。

「だつ美琴お、聖朝歌クレープ食べたい。」

「はいいい？並べと？」

「自分が行ってきましようか？」

「あー、！いいのいいの。私が行ってくるわ。」

「わ！ありがとう！美琴。」

「じゃあ、僕たちはこの席で待っていますでしょうか。」

「うん。あ、バナナチョコね！」

「わかったわよ。あ、光貴さんは？」

「自分は結構です。」

「わかったわ。」

スタスタと歩いていく第三位を見送る。

光貴は先に座っていて日陰を私に譲ってくれた。

「まあ、ありがとう。」

「いえいえ。」

相手もなにか探るようはこちらを見てくる。

先に口を開いたのは海原光貴だった。

「ありがとうございます。」

「なんのこと？」

「ニヤニヤしていて聞いてくるとは意地悪な方ですね。」

「あらら、どっちの意味かしら？」

「どっちも意味ですよ。竜宮嬢。」

「愛し子ダーリンになにかしようってんなら、縁筋をたどって崇るわよ？それともあなたの出身地のガキ共を根絶やしにするのがお好みかしら？」

第三位がいないので魔術系の話をして大丈夫

彼はその意を取ったのか何らかの感情を誤魔化すように笑う。

そのごまかし方もことなく大人な雰囲気だ。

「そういうわけじゃないですよ。上条勢力って言葉。わかりますか？」

「勢力？」

「貴方はその勢力に入っていると思われています。」

「またなの？勢力関係のものは、私達の魔術系列が元々高等科学も取り入れたものだからってことで決着ついてるじゃない。あなたの組織に写本のコピーを送りつけさせるから、連絡先を——」

「そういうことじゃないんです。」

食い気味に海原は強めの口調で、悲しそうに喋りだす。

「スポットが当てられたのは上条当麻なんです。彼を調べていった線状にあなたが居た。禁書目録、錬金術師、御神墮し、そして絶対能力者進化計画。あなたが関わりを持っていない事件はたったの3つなんです。ですが、あなたが入院していたため、協力しなかったで片付けられてしまう。」

たしかに、そうかもしれないな。錬金はよくわからないとして、一つおかしくね？

「なんとなくわかるけど、実験に関しては私ボコボコにしてんのよ？それに魔術サイドには関係のないことよ。」

「その過程で一方通行と接点を持ちました。だからかと。」

「一緒に海に行つたからか。だから捜査上に上がつてゐるつてわけね。」
「はい。だから、一方通行を守りたいのであれば、今後上条当麻に加担しないほうがいいかと。上が脅威と思えばまずいですから。」

何をどう脅威に思っているのかは知らないけど、私が取るべき行動はコイツの組織を潰滅させるか、コイツを殺すか、当麻を殺すかの三択ということになる。

組織を壊滅させんのは、外の奴らに神託を出しちやえばいいんだけど、進行状況がわからないから、最終手段だとして、コイツか当麻を殺ることになる。

どんな魔術師なのかわからないコイツと、能力を使わなければ攻撃が通る当麻なら当麻をターゲットにするべきだろう。

が、コイツとは違って学園都市の生徒かつ、あの部屋は割と壁が薄そう。死んだあとも右手の能力が消えるかなんてわからない上に、男子寮だから運ぶのは目立つ上、インデックスがいる。完全記憶能力者の記憶改ざんは正直面倒くさい。すぐに何かを意図的に忘れさせられた。〃という事に気がつくだろう。

あいにく今日の筋電多関節人工尾カスタム・ドラゴンテイルのアタッチメントはアクセサリだ。

「情報提供ありがとう。友好的な貴方のお陰で何をすべきか分かつたわ。」

「っーそうですか。」

私達は立ち上がって戦闘態勢に入る。お互いを倒すため。

相手は黒い鉱石のナイフのようなものを取り出して、キラリ。と光らせた。

するとテーブルが分解されて崩れ落ちていく。

日光を反射させて攻撃してる？アレはなんの鉱石だ？

黒曜石ならテスカトリポカ。ブラックオニキス、瑪瑙ならクピド。鋒か鎌か。いや、金の鎌出ない分テスカトリポカかな。

黒曜石の鏡ってわけね。

「障害物除去ありがとね！」

相手の頭狙いで飛びかかって髪をひっ捕まえて後ろに倒そうとする。が、強引に髪の毛を引きちぎって私から距離を取る。

「強引なんですね？」

「力尽くは嫌い？」

「ええ。自分は魔術師ですから。」

距離を取るためなのか、海原光貴は路地裏に体を滑り込ませていく。

それを追って私も路地裏に入り込むと、姿が見えなくなっていた。足音が聞こえないから隠れているのだろう。

が、神ワタシをなめてもらっちゃ困る。

従事路を右に曲がって二番目の角に熱源を感知できる。壁を蹴って進んだほうが速いだろう。

室外機から別の屋根にとんで、二番目の角にたどり着くと、身をかめて口に手を当てた海原を発見する。

其のまま自由落下のなるがままに頭部狙いで蹴りを放った。

三章 好き

頭に蹴りを入れるその瞬間に、海原に気が付かれてしまい、腕でガードをされてしまう。ポキン！と何かが折れる音と共に足から何かを折る感覚が、硬いものを踏み抜いたような感覚が伝わってきた。骨、もしくは防具を蹴り砕いたのだろう。

海原は痛みで声が出ないながらも、歯を食いしばって必死に逃走を続ける。

骨が折れていなくても、衝撃が骨を伝っているのだろう。

「待てー！」

「しつこいですね。随分とー！」

当たり前。科学サイドのアクセラレータの一方通行が魔術師にちよつかいだされるのなんて見てられないし、私を操作するためにそんなことなんてさせるわけがない！

あと一歩で手が届く。というところで室外機が上から落ちてくる。

どうしても反射的に手を引っ込めてしまい、せつかく詰めた距離を話されてしまう。

「っー！」

同じ様なやり取りを幾度かした後、薄暗い袋小路に追い詰めることができた。

微弱ながら放電でき攻撃が通る私と、魔術で障害物を作りながら逃げるしかできない海原。

私の方が有利に決まってる。

「追い込まれてしまいましたね。ここなら金星の光が届かない。流星です。」

「ん？」

金星の光？金星だったら、獅子を従えてないからイシユタルは無い。そもそも金星は愛と美貌の女神が多いからそもそも、光を反射させるなんてことしないだろうし。

ケツアルコアトル？いや、それは違うな。毛色が違う。蛇っぽくないもの。ん？ケツアルコアトルの化身とされてる破壊神かな？

「トラウイスカルパンテクタートリ。」

そうか。トラウイスカルパンテクタートリは太陽に負けてイツラコリウキになった。あれは黒曜石の鏡じゃなくて、まんま黒曜石のナイフってことね！

何語か忘れたけれど、イツラコリウキってのが黒曜石のナイフってことだったはず。光は、光線で破壊したからとかのやつか。

「知っていましたか。」

「たまたまよ。アステカの魔術師でいいのかしら？」

「ええ。」

「テスカトリポカ、ケツアルコアトル、トラウイスカルパンテクタートリにイツラコリウキ。アステカってホントややこしいわね。」

「意味はわかりかねます。」

降参。と手を上げて大人しくなった海原はすんなりと私に拘束された。

走ったため呼吸が少し早い彼は、私の一撃を喰らって地面に倒れ込む。

そして顔をこちらに向けて、諦めたように笑う。

「ホントは誰も傷つけたくなかったんですよ。あなただって。」

「わたしい？」

「ええ。怒るとわかって言いました。怒ってくれてよかった。」

「え？マゾ？個人の性癖にあれこれ言いたくないけど、他人に迷惑かけるなら辞めといたほうがいいよ？」

「違います！貴方の行動理由です。見境無く誰かのために行動するよきな性格ではないってことがわかっただけでも良かったです。」

「あっそう。なら死ね。」

殴ったときに転がった黒曜石のナイスを海原の首元に突き刺そうとすると、慌てて海原が這いずって逃げる。

「ちよ！待っててくださいいよ！こんな、誰も傷つけなくなかった！って言ってる人間を殺しますか？普通！」

「生憎普通じゃねえんだな。これが。」

「自分を殺せば、第二第三の刺客が送られてきます！ここは効率的に

自分が報告して観察を続ければよいのではないでしょうか！自分ぐらいいいですよ！ここまで穏便なのは！」

「いえーい。命乞いタイム？リアルで初めて聞いたよ。第二第三の自分的なフリーズ。」

「自分はこの街が大好きです！海原も傷つけなくなかったし、平和が一番だと思います！御坂さんがいるこの世界が大好き！次の刺客は見境無く襲うかもしれませよ！」

「……交渉条件としてはまあ、いいけど、はつきりなんで安全と思われれるかが私自身のことだけけどわかんないんだよね。」

一方通行に危害を企てようとしたから私がこいつを殺す。

他の誰かが代わりに来たら見境無く襲うかも！

ってのの条件は対等じゃなくない？

「だ、第三位の事が好きなんだ。だからここに居たいってこと？」

「え？あつ。」

「第三位が好きだからなんだ。聖朝歌ミサカそういうの大好き。」

「べ、別にそういうわけでは！」

「違うの？潜入した地で想い人を作った。でも自分は彼女を鎮圧しなくてはならないなんて！なんて素敵な物語なのかね！」

しかも相手は、この世に7人しかいないレベル5のお嬢様。さらに彼女にはクローンが存在していてその数は約2万体のクローンがいる。

「だけど悲しいかな。彼は第三位のヒーローにはなれない。振り向かせることは出来ない。」

・

元いた場所に戻ると、丁度第三位が戻ってきたようで、不思議がられる。

「あれ？アンタ一人？」

「急用ができたって。」

「で、アンタは何してたの?」

「第三位のファンの相手だよ。恥ずかしがり屋さんの。」

「そう? なにか言ってた?」

「御坂さんの近くで生きて嬉しうって。」

「物好きもいるものね?」

半笑いのその表情に、じんわりと苦労がにじみ出ているのを察した。よく目立つからいろいろと寄せ付けるんだろうな。

まあ、どうでもいいけどね。

受け取った出来立てのクレープを口いっぱい含んで食べる。

甘くて美味しい。第三位の悩みはさほど考えなくても良いような悩みだろう。足の裏を蚊に刺されたのかもしれないだけだろうし。

「あー! 聖朝歌ミサカがクレープ食べてる! ってミサカはミサカは質素な病院食に飽きている頃だからミサカも食べたいー! って駄々をこねてみたり!」

うげ、超絶お子様ボイスは。

「打ち止め。また抜け出したの?」

調整中のラストオーダーはまだ外出許可が降りていない。というか降ろさないとまずなの!」

「義妹シユウエスタだけずるいかもっ! ってミサカはミサカは駄々をこねてみる! あつ、もしかしてお姉様?」

「え? 何この子?」

「第三位のクローンで、私と同じ上位個体よ。」

「今はほとんど義妹シユウエスタに権限持っていかれてるけどね! ってミサカはミサカはプンプンって。」

「アンタみたいなのゼロ歳児より私のほうがうまく使えるものな! しかも同性に対してのぶりっ子はムカつくだけです。残念でしたー!」

「聖朝歌ミサカは基本的に精神が幼すぎるのでは? とミサカはため息を付きます。はあ。こんな奴らが司令塔かよ。」

ラストオーダーのあとから出てきたのはミサカ10032号だ。カエル顔の医者カエルの所カエルにいる個体だったはず。

「お姉様と一緒にいるとは思いませんでした。てつきり愛ダーリンし子と居る

のかと。とミサカは賭けに外れた。と落胆します。」

「しようがないだろー。第三位が、どおーしてもって言うんだし。」

「そこまで言っていないわよ？まあ、立ってるのもなんだし座りなさいよ。」

「じゃあミサカはお姉様の隣ーって、ミサカはミサカははしやいでみたりー！」

「はあ、幼い上司野相手は疲れます。とミサカは汗を拭いつつ、愚痴をこぼします。」

同じ顔四人が集まって、周りに少し注目されている。この中で口を使っただけしか会話できない私達は第三位を見つめて居るが、第三位はキヨロキヨロと私達を見ているだけで話し出さない。

「これは誰かが話し出すべきでは？」とミサカ10032号はつぶやきます。く

《言い出しつぺの法則発動。ミサカ10032号ドウゾ。》

「嫌です。とミサカ10032号は拒否します。く

〈義妹がここに入れるなら、お姉様も入れないの？〉ってミサカはミサカは疑問に思ってみたり。く

「お姉様に好きな人っている？ミサカは一方通行！ってミサカはミサカは苦し紛れに恋話を振ってみたり！」

「す、好きな人？べ、べべ別にいないわよ？」

「ふむふむ。これは嘘をついている香りですなーってミサカはミサカは怪しんでみたり！」

ミサカ10032号も気になるのか、少し慌てて否定する第三位をじつと観察している。

誰だ？誰に恋をしているのだー？もしかして当麻？インデックスがなにか言ってたような気がする。

「え？あの子猫ちゃんとは遊びだったのかな？」

「子猫ちゃん……黒子とはそういう関係じゃないのよ！」

「ミサカはあの少年ですね。この前助けてもらってしまいました。」

「え？誰々？」

あの第三位といえど、乙女なんだね。恋バナに積極的に参加するあ

たり。

「上条当麻です。とミサカは告白します。」

「ああ、アイツね！まーた女の子助けたのねー。アイツ。そう。」

驚きを隠せないって顔を第三位がしてるから、当麻を好きなんだ。海原ドンマイ。まあ応援はしないけど。

「チャレンジジャーだね。10032号は。結構あれでモテるんだよ。顔は平凡だけど根っからのたらしで紳士的な行動をとることがあるからね。」

「チャレンジ精神を買って取り合ってくれませんか？とミサカは無謀な賭けに出ます。」

「駄目ですー。私はインデックスを応援してるから嫌ですー。」

「チツ。とミサカは愛し子ダーリンの事ではないとやる気が出ない義妹シユザエスターの思考を逆算して舌打ちします。分かりきったことでしたけど。」

「インデックスって、確かシスターの名前よね？なにか知ってるの？アイツとかなり親しそうだったけど。」

「ヒロインとヒーローの関係よ。」

「ヒーローとヒロイン？」

属性的に第三位は当麻のヒロインになれなさそう。

神が存在するこの世界は、救うものと救われるもので分けられる。神が関与しなければ運命とか宿命とかじゃなくて、自分自身でその因子を掻き集めてどちらかになるのだ。

故意的にどちらかの因子だけを取り込んだときにヒロインとヒーローが生まれる。

第三位はたぶんヒーローだ。

「あと同居してる。」

「え？それってほんの？」

「うん。」

「あ、アイツ……………」

四章 大覇星祭開幕

「愛し子^{ダーリン}♡」

開会式本会場の連絡通路に選手宣誓を終えた一方通行^{アクセラレータ}が佇んでいた。

私を視認すると一方通行^{アクセラレータ}は怠そうにコチラに歩を進める。

能力で暑さを感じないと思うけど、控室でまさか何かあったのかな？

「控室にいないと思っただらどうしてこんな暑いところに？セクハラを受けたとか？」

「単に挨拶に来る奴らがうざかっただけだ。オマエは朝歌と聖七歌^{ミナカ}と一緒に居なくて良いのかア？」

「普通に学校違うし、特設クラスだから参加しなくても良いの。その代わりいろんな人の能力を学習して取り込まなきゃ！第一回戦は当麻のとおこの対戦相手を見ようと思うの。スポーツ校の名門校なんだって！」

お互いに白髪だから目立つから断られるかな？

「ほオ。いいんじゃないか？」

「意外と好印象ですねー。」

「距離は……飛んでいけばいいだろオしな。飛べるようになったんだろ？」

「飛べる事、なんで知ってるの？」

「なんでって、クソガキが喚いてたからだなア。」

「サプライズしようと思ってたのにー。」

一方通行^{アクセラレータ}と接触する事で能力が、権能が戻りつつあるみたい。

元々権能が超能力として出力できてたみたいだから、できると思うことなら何でもできるようになってるはず。

全てではないけれど。

私の能力は自分だけの現実^{パースナルリアリテイ}の規模がでかい現実改変能力だからね。出来ると思えば出来るのさ。努力論じゃないけど！」

「いきなりどうしたア？」

「思っていることが口に出てた。」

「……………」

一方通行アクセラレータが憐れみの視線を向けてくる。

イタイ子とかじゃないんだよお。単に自己暗示なんだよお。信じる心がパワーになるから許してくれえ。

「空を飛んで大丈夫なのか？宙に浮くとの、空を飛ぶのは勝手が違エぞオ？」

「あんよが上手ってな感じじゃなくてリハビリだから。愛ダーリン子の近くなら落ちても平気だしー。」

「下に人が居るだろオが。」

「え？うん？……………あ、一般客もいるっけねー。」

大々的に宣伝していた開会式の選手宣誓だけを見に来た者たちで、道路は大混雑していた。

日陰で休む者や、建物の壁によりかかる者。

会場に入っている人を考えて、早めに出たほうが良いみたい。

・

学生用応援席には第三位が先に座っていた。

常盤台の体操服姿はやけに目立っている。

「第三位だ。」

「キョロキョロしてなんだア？アイツ。」

ブルーシートが地面に敷かれただけの簡易的な応援席にはまばらにいる当麻と同じ高校らしき人がいる。

別の学校生徒である私達を見る目は、物珍しい。といった色を見せてから、愛ダーリン子を視界に捉えると場違いな登場に隣に座る友人とコソコソ話を始める。

「やだ、愛ダーリン子大人気。よっ、

第一位！」

「ああ？」

周囲を気にせずにドカッと豪快に座った一方通行アクセラレータが早く座れと目で訴えて来るので、素直に座っておく。

「アンタたち来てたの？あいつの応援？」

目敏く第三位が私達の隣、アクセラレータ一方通行の隣に人一人分離開けて座り直す。

他校の生徒を応援するためわざわざ一人できた他校性から他校からそれぞれ応援に来た友人たちに変わる。

「ん？まあね。第三位は？格下の戦鬪を高みの見物？」

「言い方に棘があるわね。賭けよ。あいつは1回戦敗退じゃない。私が1回戦敗退。」

かける対象が悲惨。そんなんなら、次通る人が男か女かでかけるほうがまし。

「うっわ、すごく惨めな賭けだね。」

「でエ？何賭けたんだア？」

「え？あいつが勝つたら、スフィックスの餌の買い出しの手伝い。私が勝つたら男女二人組限定のゲコ太ストラップをゲットしに行くのよ。」

スフィックスの餌を二人で買いに行くのか、ゲコ太ストラップをゲットしに二人で行くのか……あれ？

「……デートじゃん。どっちみちデートじゃん。」

「ででデートじゃないわよ！それだったらアンタたちいつもデートしてるわけじゃない！」

「ん？」

「断念だったなア。オレらはデートじゃなくてコイツが勝手についてくるんだよ。」

「ストーカー？」

「第一位取り巻きAです。」

「A、競技が始まるぞ。」

「おぉー。」

競技は棒倒しだ。

私は棒引きならやったことあるから、棒倒しなんて砂山に枝をぶっ刺して倒れたら負け。つてのぐらいいしか分からない。

「何かあったのかア？」

アクセラレータ一方通行が疑問に思うのもわかる。エリート校の面々とは違って、当

麻の側は全員がまるで戦術を叩き込まれた兵士のように、いや戦士の顔をしている。

「え？あいつ何無駄にカリスマ性を引き出ししてるのよ?!そんなに買い出しを手伝わせないわけ!？」

呆れた顔をしながら驚いている第三位の傍らで、一方通行アクセラレータが真剣に分析を始める。

そもそも買い出しの為にそこまで士気を高められるのかな？買い出しなんて私に頼んだって良いんだし、買い出しの為に賭けにみんなしてあそこまで真剣になれるのか？クラス単位ならわかる。クラス別、しかも学年を超えてのこの一体感。人格者が別にいる。

「リーダー格は、発案者は当麻だろうけど…が理由は当麻じゃなさそうね。みんなの意識は一人に向いてるみたい。あの、ピンク色のチアガール。」

「アイツは教師の月詠小萌だったはずだ。黄泉川とよく飲んでる。」

「当麻の視線が相手側の教師に向いたわね。」

「……この前の学会で間違いを指摘されていた奴だなア。」

「あの有名な、素人目で質問なんですけど？ってやつね！あの余裕の表情、嫌味を言うやつなのよ。エリート教師だからボロクソプライドが高くて、月詠に頭で勝てなかったから、教え子で勝とうとしてるのよ。あなたのところのお馬鹿な生徒さんは、ウチの優秀な生徒に絶対勝てませんよ。ってな感じに。」

「ひどい偏見ね。」

高らかに開始の合図になると、一斉に動きだした。

人数戦になるとお互いの連携が重要になってくる。

テレパシー系統は支持を出す。遠距離系は補佐を。

体力に自身があったり、近距離系の使い手、レベル0は歩兵役として突っ込んでいく。

先頭集団は盾役を兼ねていて体格の大きいものや、肉体強化系の能力者だろう。

その次に中距離系、そして遠距離の突撃補佐ではない攻撃型の遠距離能力者。

そして防衛の為に残る者。

その中に仕切りに合図を出したりせわしなく動いている者が防衛陣の中に一人だけいる。

「……大将は当麻じゃなくてあの女子ね。」

「周りにはいるのがテレパスとテレキネシスかア？アイツが上条側の奴らの指揮をしてんのか。」

「支持が的確。彼女自体テレパスじゃなさそう。感じ、割り振りを全て把握してる見たい。」

衝突のたびに一般応援席の者共の歓声が聞こえる中、気にした様子もなく指示側は的確な判断で動かしている。

気迫と運と、何よりこの一線に全てをかける意気込みから勝てる。そう、当麻は勝てる。

相手側は優勝を勝ち取るつもりで体力の配分をしているだろうが、実力差を補うためだけ、この相手を打ち取るためだけに全員が全力を出すなら、この試合に当麻たちが負けるはずがない。

「第一回戦だからこそ勝てるってやつだなア。」

「ジャイアントキリングというべきか桶狭間の戦いというべきか、いいものを見たわ。十年は忘れないわね。」

・

競技を見届けてからは、屋台でなにか食べたくなつたので、地面を歩く一般人や生徒の上を浮きながら背中に乗る一方通行のナビを頼りにふわふわと進んで行く。一方通行が私に跨ってるのは、低空飛行で通行人がかなりいるからだ。

「おーい、その二人ー！」

その途中で、警備員の軽装備を身に包んだ黄泉川に声をかけえられた。

ゆっくり降りていくと飛び降りた一方通行が気だるそうに黄泉川の方に歩いて行く。

私は一方通行の肩に手を置いて一方通行の進むがままに引っ張られていく。

「ンだよ？黄泉川。」

「呼んだだけじゃん。」

一方通行はムツとした顔でキツと黄泉川を睨む。睨まれた黄泉川あははは。と笑って片手でごめん。というポーズをとる。

睨むと言っても、本気で怒っているわけじゃないことを黄泉川は知っているから笑って済ませている。愛し子の顔はとつても怖いけど。

「拗ねない。もう少ししたら吹奏楽のパレードじゃんよ。見てく？」

「なんか食いにいくんだよ。」

「そうじゃん？デートじゃんねー一方通行。」

「そおだな。それだけか？」

「今日は遅くなるじゃん。お母さんを待って起きてる必要はないじゃんよ。」

「誰がお母さんだ。」

「ウチじゃんね。」

プンスカ怒りながら愛し子は私に捕まってふわふわと浮いて道路を挟んだ反対側にやって来る。

一方通行が買うのはフランクフルトとか唐揚げとか串焼きとか、とにかく肉。

「あーいたいた！」

唐突に声がかけられたと思ったら第三位が私を掴む。

「アンタの目、赤よね！」

「え？そうだけど。」

「借り物競走なの！いいでしょー！」

「いいけど、一方通行——」

「追っかけるから行け。」

「よしー！」

恐るべき身体能力と、ゴールの競技場が近かったのが合わさって、どうやら第三位が一等賞のようだ。

私は引っ張られるがままに浮遊しているだけなので、他の借り物よりは楽だと思う。

競技場はしっかりとした競技場らしく、大会を開いても申し分ない

ものだ。

客席も、報道用カメラも警備員もさつき見てた競技場の倍以上にある。

走者である第三位にタオルやら何やら至れしつくせりにしている係の子は完璧なサポーターのようで、テレビで放映されても見苦しさなど微塵にも感じさせない動作だ。

「へー、第三位一位じゃん。すごい。」

達成感に満ちた顔をしている第三位の頬を押してやると、呆れたように私の手を取る。

「ありがとね。」

「よきにはからえ。」

浮遊している私の腕を取って、出口まで誘導した第三位は追ってきていて、どう入ったかわからないが出口と書かれた門のところにいるアクセラレータ一方通行に私を引き渡すと表彰台の方に歩いてく。

「すごいね。足早い。胸の抵抗がないからかな。」

「そおだな。」

「いやー、にしても今日は濃い一日でしょ。愛ダーリンし子も私もテレビに映るなんて!」

「映りたいか?」

「敬虔な信徒は喜ぶよー。」

「オマエの部下の事か?」

「まあね。」

五章 科学的神性

大覇星祭二日目。

自社製品かつ、外部販売の許可が降りた人工皮膚救急スプレーの売れ行きはかなり良かった。

パッケージには竜宮社のマスコットキャラクター、白へびのシロちゃんのイラスト。オマケに龍の鱗モチーフのキーホルダーが付いていて、主に男という性別の者と中学生によく売れた。

外部からの人たちにも売れていて、みな興味を持って買っていく。

「おーすっ！聖朝歌ミサカと一方通行アクセラレータ。なんか、人気だな。」

私達を見つけたのか、インデックスを連れた当麻が簡易販売所として設営されたテントに近づいてきた。

競技を終えたのか、汗の匂いとともにダラダラ汗をかきながら満足そうな面持ちで近づいてきた。

「真っ白コンビ！久しぶりなんだよ。」

そしてインデックスも、快晴でギラギラとした日差しだというのにシスター服を裾も袖も完全におろした状態で来ているため、見た目からして暑そうだ。白い服が日光と相まって眩しい。

「お！お得意様（予定）とインデックス！どう？例の試作品がお見事、外部販売許可が出たからババーンと大宣伝中です！聖七歌ミナカとお兄ちゃんミナカは競技とかに出てるから、特設クラスの私達は休憩中！」

「お店の手伝いとかじゃないんだな。……シロちゃんねえ、聖朝歌ミサカがモデルなのか？」

「むむ、蛇に魔術的な記号が……。」

商品を手にとったインデックスが、まじまじと救急スプレーを見ている。

魔術的にもシンボリックにも宣伝的にも記号として使ってるからなあ。

「白蛇は再生の象徴。金運、生命の源。そういう知識は一般的に知られてるわよね？そもそも竜宮は代々白蛇を、祖先とする白龍の化身として崇めてきているの。竜宮社のロゴも白蛇が隠れてるのでーす。」

あとは邪神と蛇神をかけてる的な。」

インデックスはいったんスプレーをおいて、ポップをまじまじと見てから疑問に思うところがあつたらしく、首を傾げた。

「当麻は次の競技何？」

「ん？借り物競走だけど……もうすぐ時間だ！インデックス行くぞ！」

「え、まってよとうまー！」

慌てて駆け出す当麻と追いつこうとするインデックスはすぐに人混みの中に紛れていつてしまった。

まるで自社商品宣伝のためだけに、説明だけ聞いて去っていくモブの様に。

ミステリー小説なら、後々この白蛇はもしかして竜宮社の！なら、この事件には竜宮社の人間が関わっている！つ的な伏線になるんだよ。きつと！学園都市最強イケメン探偵アクセラレータとその守護神聖朝歌ミサカの学園都市サスペンス！

ノーベル文学賞とかこの世の文学賞をすべて金賞で取り、ゆくゆくは人類史に歴史を刻み愛し子ダーリンと聖朝歌ミサカを敬うそんな未来が――

「お二人共、木原氏からの情報が入りました。」

「あ、そう。」

伝達係がある調べものの情報が入ったと言う事とで、連携してる木原ハウンドドッグの統括する猟犬部隊アクセラレータの車が止まってあるだろう路地裏に寝ていた一方通行を起こして向かう。

割とすぐ裏に極悪体育教師の様な科学者とは思えない科学者、木原数多が腕を組んで仁王立ちしていた。

愛し子ダーリンと同じブランドの服を着ているのにも関わらず、服がダサイ。おんなじのを着ていたことがあつたけど、愛し子ダーリンは似合ってるのに木原は似合わないんだよな。

「木原君よオ。見つかったのかア？」

「あー？クソガキ、だから呼び出したんだろオ？ったくアレイスターの野郎から連絡が来たつてわけ。それほどネットワークを気に入ってるつてのか？」

「まあ、そうじゃない？わざわざ私みたいなのに管理権を渡すぐらいなもの。」

木原はわからない。という風に眉を動かした。

「どオ言うことだ？」

「世界を覆してしまえるようなシステムは人間が持つより、塗り替えることが簡単に出来てしまうものに渡してしまったほうがいい。パラレルワールドってヤツを自由に選択できればそのほうがいい。現在人類が観測できる一番遠い宇宙ってのが私。観測ってよりもその存在を知れるのが。」

.....??

「自分自身がこの宇宙そのものって事か？.....能力関係か。」

「あつ木原。もしかして中2発想って思ってる？観測者効果がなければ今すぐにでも取り込んで真理を見せてやれるのに！」

「お前、そんな事も知ってるんだな。」

「愛し子までっ！」

..

黒いワンボックス者の中は、リムジンバスみたいな椅子の配置になっていた。

木原んとこの部隊員の人が運転する車で、どこかに行くみたいだ。

「一応説明するがよ、今回アレイスターの命令で木原幻生の鎮圧、もしくは殺害を行う。ただし、クソガキお前は聖朝歌のアシストだ。」

「ああ？？」

不満を顔に出した愛し子に木原はめんどくさそうに口を開く。

「今回命令が下ったのは、暗部としてアレイスター直属扱いになってる猟犬部隊と聖朝歌だけだ。今回は別グループと接触する可能性がある。」

「？」

ちらりと木原は運転手を見てから、愛し子を、まっすぐ見つめる。まるで父親的存在だと自分を思っているのだろうか？その瞳からは、顔に似つかわしくない庇護欲と愛情と少しの欲望が見え隠れしている。

「よく聞けクソガキ。お前は日向の住人だ。そんなお前を逆恨みするやつがいるだろうなあ。」

「何がいいてエ？」

「お前が思ってる以上にこの学園都市の闇は深いっつーこと。第二位には気をつけろ。」

「第二位ねエ。」

「お前は護られてる。竜宮生物研究所の奴ら、黄泉川愛穂に芳川桔梗シスターズ、妹達、異界より来る純白っつー外国の医療機器メーカーの一団やらに。はあー愛されてるねえアクセラレータ一方通行ちゃんは。」

口ぶりはまるで、冒険に出る息子に己の未熟さを教えさせるよう。クソガキという言葉を罵倒ではなく愛称として呼ぶトーンからして、まるで子供のように思っているようで腹立たしい。

「で、説明に戻るぞ。木原幻生の鎮圧もしくは殺害について疑問はねえよな？ 現在あのジジイはブロックっつー暗部組織に対して命令を送っているようだ。内容は学園都市に居る妹達シスターズを捕らえよ。まあ、こいつらに関しては交戦の必要はねえだろうな。」

「はっ。」

「行方不明中の妹達シスターズは第五位に連れ去られた。」

「目的はなんだろう？ レベルの事なんて気にしてないだろうし、たしか第三位と第五位は不仲だとか。嫌がらせ？」

「第五位は昔、0号プロトタイプと関係を持っていたらしいなあ？ そこんとこ、記憶にあんのか？」

「……………0号ドリーの事か。」

たしか義シユヴェスター妹の実験アルファ個体を器としてあの子に会ったことは一度だけあるけど、ああ、うん。ずいぶんどりに優しくしてたみたいだし。まさか、10032号あののこの記憶を消して記憶のドリーに変えるとか？」

「おい、ソレってよオ。」

「多分。」

・

第二学区 クローンドリー 人才工房

「久しぶりだわ。」

「知ってんのか？」

「昔、少しの間だけここで遊んでたのよ。」

突入準備をしている猟犬部隊ハウンドドッグの面々が木原から支持を受けておどおどとした様子で動いている。

恐怖の上官つてところかな？

「聖朝歌ミサカ、第五位に関して能力の範囲はわかってんのか？」

「一応意識してるけど、どうなるかわからない。ただ、猟犬部隊ハウンドドッグ同士なら、いかなる攻撃も通用しないので♡たっえこの中に裏切り者がいたとしても、この段階ですでに能力の範疇なので反抗した直後にその人に対する防衛だけ解除して周りの皆さんが攻撃出来るようにしてますから♡自爆しても生き残れますからどんどん殺してねっ★」

「ほー。おい、一人ずつダイナマイトでも持つか？」

聞いた人々の反応はそれぞれだったけど、私の言葉を理解しちやつた奴は体を強張らせていた。

「え、もしかして聖朝歌ミサカさんの機嫌次第で実は能力の、無効化してませんでしたー。つてので死んだり？」

「あら、運転手の猟犬ちゃん。そーです。そーですとも。聖朝歌ミサカは裏切り者に厳しくても、私の裏切りにはクラブジャムンに匹敵するほど甘いからね。あ、安心して愛し子ダーリン！あなたの裏切りには泣きついて、引き摺られながら付いてくから！」

「裏切るわけねエだろ。」

「大好き！愛してるー！」

「あ、聖朝歌ミサカさんお電話です。」

「ん？」

「あ？」

猟犬部隊ハウンドドッグの車内電話に通话つて誰？しかも私指定。

車に乗り込むと、木原から腕を突っ込んでスピーカーに通話音声を送る。

『やあ、元気にしてるかな？』

学園都市統括理事会統括理事長アレイスターⅡクロウリー。

「あれー。どちらさんかな？聖朝歌ミサカは超元気だけど。」

『そう怒らないでくれ。君に連絡しようともタイミングが悪くてね。なにやら、どこかの誰かが学園都市上空から見える星の光の明るさを調節したそうなんだが？それを感知したあちら側の者たちから何やら問い合わせがあつてね。』

ああ、遠い宇宙にいるママ、お兄ちゃんお姉ちゃん、そしてこの星のパパと天国のママ、そしてお兄ちゃんと聖七歌^{ミナカ}。聖朝歌^{ミサカ}はとんでもない事をしでかしてしまいました。

つい先日ことです。

つつい、打ち止めとのパレード鑑賞に対する熱意とやる気と以下^{ダーリン}に愛し子^{ダーリン}を連れ出すかの作戦会議で熱くなつてしまった私は、ちよつとしたハッキングで、各地の屋外用プロジェクターを使つて夜空に魔法の土台となる透明な立体映像を作り上げ、10等級（予想）の地球から肉眼では見えない星を1等級程度の明るさに見えるようになる魔術を施行しました。やりすぎたとは思ってます。

でも、どうか許してほしい。出会つてからはじめての特大イベントを楽しみたかったです。

そして可愛い人間の為に本物の宇宙の光を見せてあげたかったです。

「づつ。だって、そのほうがきれいじゃん。それに奇跡を載せたのはプロジェクターの光であつて、プラネタリウムと対して変わらないし。」

『この邪神め。そのせいで無関係なスキルアウトが暗部に落ちたというのに。』

「まあ、スキルアウトが暗部に？収入が入れる仕事に即戦力でオファーが？それは良かった。」

『……。あの木原の目的がわかつた。第三位を無理矢理絶対能力者^{レベル6}にするというものだ。シミュレーターによると、第三位がLEVEL6に到達した時点でこの学園都市とその周辺が消滅する。』

「えー」

『これから、君にあるプログラムを取り込んでもらいたい。拒否出来ないと思うが。一応言つてはおく。』

「プログラムねえ。」

『ああ、スピーカーは切ったほうがいい。』

そう、なら。切るしかない。

拒否出来ないってことはどういうこと？

最悪私自身を消費して、そう、私自身を使って最悪の自体を相殺できる。

あの男ならそれでもいいと、そもそも私はかなりプランっての邪魔になると思うんだよ。それなのにわざわざ何を？ほんとに私の分裂力を使つて世界を塗り替えようとか？

『君にとつて、学園都市は第一位が暮らしやすい街。というわけではないだろう？』

「まあ。」

『君が地球に降臨した地点。君の第一子孫血脈の生まれ故郷。学園都市自体を神殿として捉えてもいい。』

「次は、ファンタジーかしら？」

『何を。この学園都市を作るにあたって、君の眷属がいなければ学園都市は作ることができなかった。そもそも、東京都の三分の一が個人所有の土地というのは無理があると思うのだが。』

「う、それは。その。」

『調べたところによると、各国の王族に君の血を引いたものがあるよ。うだが？』

「え、その。あの。」

『この邪神め。人類の20%は君の眷属だろう？』

「いや、血が薄ければ薄いほど無自覚だから、人間よりちよつと傷の治りが早くて健康的なだけよ。」

待つて、待つて！なんでこんなに私のこと詳しいの？もしかして理事長も私の子孫？

もしや、あのことも？個人所有つてのもバレてるみたいだし。

確かに約九世紀ぐらいは私の子孫繁栄の為に色々世界を操作したけど、私の眷属増やしのために半神とかを作りまくったけど、流石に

20%はいないし、ちよーと人類の仕組みをイジっただけよ？地球の仕組みはイジってないし良いでしょ。

『君の現住所にあった村は、何故かおよそ9世紀前から才能がある者が多く出ているな。他所より豊作で繁栄してる。』

「いやいや壇ノ浦の戦いのらへんのことを掘り返されても困るんですけど。てか、そんなの残ってないでしょ流石に。え、心配になってした。」

『平安時代中期から存在していたことは予想外だが、まあいい。君は自宅の龍脈から自宅の敷地内、第一位の周辺だけは、普段よりも能力が増加する。その理由としては自宅の神殿化と第一位自体を祭壇としているからだろう。』

え、あ、そうか。愛し子は祭壇みたいなものだから自然と力が？あれ？でも愛し子は召喚陣っていう側面が強いと思うんだけど？

「それが、今回のことと何が関係あるの？盛大に前ふりしておいて、家から何とかしてくれー！ってのは流石に無理かも。せいぜい落雷落とすか、宇宙ゴミを吸い寄せて流れ星をめちやくちや降らせるぐらいだけ。」

『流れ星？もしかこの前の火球は……。』

「っ!?!。でっ!?!私が断れないってなんでよ？説明はよ!！」

『何、君にとって利益しかないと思うのだが？星依。』

う、うわー!その名前を出してきたかー!

『ずっと君の本当の名前を探していたが、やっと資料が出てきてな。平安から他の世界には存在しなかった華族がいるようだな。』

「そ、そうなんだ。」

『しかもその華族は現在でも学園都市全土の土地の所有者だ。しかし、その地主と連絡を取ろうにも何故か宮内庁の者からストップをかけられてな。』

「そうなの？へえー。それと、私が断れないのと、何が関係あるの?」
『現在学園都市は借地の上に立っている。法律上立ち退きはないだろうが、土地の所有者が変わるとなれば話は別となるだろう。現在地主殿のご厚意で、相場より低めに借り受けている。学園都市の統括理事

長としてその地主殿にはぜひとも契約を続けていきたいものだ。』
「そう。」

『そこで、地主殿には人間が作り出したエネルギーを提供したいと思っ
ていてな。』

「……。」

『AIM拡散力は知っているかな？』

「え？能力者が無意識に出す力の界のことでしょう？」

『界、その界を虚数学区・五行機関と呼んでいる。人工の異世界とも言うべきだろう。』

「人工の異世界。」

『君が制御出来るのかは分からないが、捧げられれば簡単に制御できる
のではないかな。』

「あなた、本気で言ってる？」

『本気だとも。』

「あなたは後悔するわ。」

『それはどうか？』

「多少なりとも住人に情が湧いたりするでしょう。でも、その代わりに
学園都市は、いえ超能力が変わる。努力ではなく才能が物を言う世界。
努力していると思ってるものが報われず、努力とも思わない些細な
ことがより経験として残る世界に。私、努力嫌いな。学習は分ける
けど。」

『構わないさ。』

「あと多分、純白のメンバーが何かしら学園都市に対して言うと思う。
あいつら近いメンバー以外はわりと、自分たちは裏でつながって
いて、人類を導く存在。とか思ってるのよ。手駒としては使えなくは
ないと思うけど、印象操作の方はたのんだわ。」

『ああ。では、虚数学区・五行機関。それを君に捧げよう。』

「学園都市と表裏一体のその異世界を受け取りましょう。他の神ども
！学園都市を我が領域とすることを宣言します。信仰を許しはしま
すが害をなす行動をした場合は容赦なく潰しにかかります。その他
の土地は私のものと明言こそしませんがこの地球は現在私の権能化

にあることをお忘れなく！」

ミサカネットワークを通じてミサカから声が上がってくる。

どれも世界の異変を感じ取るような、そして説明を求められたのでそのことについての問い合わせとか。

私はとつても対応力のある聖朝歌^{ミサカ}なので直ぐには虚数学区・五行機関を上手く認識することはできないだろうけど、手を伸ばしきったら確実に科学は強化される。

信仰力を高められるだろう。^{パーソナルリアリティ}自分だけの現実^{ココ}にこそ鑑賞できないが、能力を信じる心が信仰として私の力になる。

科学の都市で信仰なんて変と言う輩も出てくるだろうけど、私は宇宙そのものの神性。何世紀先に人類が生きていたら観測できる存在なのだから何も問題がない。

けど、まず最初に膿の一つを取り除かなきゃならない。

第六章 第五位

私は夢を見ている。新しくインプットした世界の処理で肉体に負荷がかかり過ぎたんだろうね。

夢と言っても記憶整理の時に見る夢ではなく、運命と呼ばれるものが明確な意思を持って見せてくる過去の記憶。

おかしなことを言ってるのか思うでしょ？

占い師とか預言者の本物と同じ。あれは個人の過去を見たり未来を見るだけしか出来ないけど、私みたいな種類の物は違う。

意識だけタイムスリップするみたいな感じで過去を見ることができ。それで今見てる。

ここは、この体になる前の世界だ。試験的に私の体と普通のクロールとの比較をする為に作られた試験個体を作り始めた頃だ。

簡単に言えば0号と遊んでいた頃。

あの子は戦闘クロールとして作られる妹達の耐久実験用に作られた個体だ。私との交流はお互いのストレスを減らすための物と同時に、クロールとして同じ顔を目の前にしたときの観察実験。

「聖朝歌、貴方に紹介したい子がいるんだ。」

私の体調調整も兼ねて、耐久実験を行っている研究所に何ヶ月が言っていた頃、私はドリーと出会った。

「0号通称ドリーよ。貴方の体とは違う生産ラインだから治療をしながらここで暮らしてるの。」

私と違って平凡で凹凸の少ない体。

同じ顔をしてるはずなのに、あっちのほうがお姉さんみたいな顔つきをしていた。

「ドリー、紹介するわ。貴方の義妹の聖朝歌さん。術後の経過観察のためにこつちに来てるの。」

彼女は私と違って、生命維持装置をつけていて、私と違って、いろんな薬を打たれていた。

私と彼女が会えるのは、別の階で実験してるみーちゃんとやらない時間。みーちゃんとやらはいろんな実験をするから体調が安定

して間もない私との接触は危険が多いらしい。今考えたら似すぎてる私達は流石に怪しまれるからだと思う。

「ねえ、海ってどんなところ？」

「海？学園都市は海に隣接してないし貴方は知らないわよね。ここからじゃあ見えないし。」

海について聞かれたんだっけ？私はあまり海に行かなかったけど、それなりには知っていた。

深海魚とかそういうのにハマった時期もあったから。

「海はしょっぱくて未知の世界。そしてエラ呼吸が制する世界よ。」

私が彼女と触れ合うに連れて、どんどん感覚も取り戻しつつあった。その代わりに元々体が持っていた能力が抑え込まれて私の能力が全面に出てきて、いつからかミサカネットワークのようなものも掴めなくなった。

ドリーの寿命もなくなっていったのも分かっけきちゃったし、研究者もそれがわかっていたのかそういった話を前々から私にしていた。

その頃から精神基盤を来るとかで、私も機材を頭につけて脳波を測定し始めた。

順調に精神基盤が出来上がって学習装置テストダメントを使った実験が終わった頃だったと思う。

いつもの研究員さんが慌てて私に教えてくれた。

ドリーがもう危ないと。

新しい友達と遊んでいる時に倒れたようで研究員もこれ以上の延命は無理だと判断したそうだ。

我儘を言っつて、最後の少し無理やり延命させて話をした。

「ドリー？」

「ミサカちゃん。」

「気分はどう？」

「とっつても、眠い。」

私の能力で痛みを感じさせないようにしていた。ドリーも私もミサカだったから。

ドリーはそのことについて、わかってはいなかったけど、私達が双

子みたいに同じことを考えていることだけはわかっていた。そしてその時も同じことを考えていたと思う。

「ねえ、ミサカちゃん。」

「何？」

「しよくほうみさきちゃんに会ったら、ありがとうって伝えてほしいな。」

食蜂操祈。

第五位だ。そうか、この約束を思い出すためなのか。

「ドリーからの伝言をすっかり忘れていた！」

でも、今回敵なの？今更ドリーがありがとうって言うていたとかそんなことで大丈夫なの？

「おい？」

「ああ、ごめんなさい愛し子。」

愛し子の呼びかけでハツと意識が現実に戻ってくる。

愛し子には心配かけちゃったかな？

「どオした？」

「宇宙から電波を受け取ったのよ。思い出せて。」

「電波？オマエ……」

「ああつと、ええつと神からの啓示的な？私ってば神だからそう言う言い方は違うの！発明が降りてくる的な意味で使ってる言葉だから、そのひらめきのなもんなの！忘れてた物がハツと思いつく感覚のことをそう読んでるわけで、宇宙からの電波は実際に来てないし、どちらかといえば宇宙に居る同族からのテレパシーは送られてくることはあるけれども！」

「ついつい言い訳してるけど！ほんとに違うの！痛い子とかそんなんじゃないんだから!!」

「ミサカネットワークからなんか来たって事で良いのかア？」

「それは、少し違うけど、そんなもんかな？」

「そオか。」

私達は順調に施設を進んでいる最中だった。

別部隊が先に侵入しているようで木原君たちは作戦会議中。私達

は後ろで待機なので、木原の後についていけばいいから待機中。

「ノロノロご苦労なこつたなア。」

「愛し子^{ダーリン}みたく防衛力があればいいけど、私と彼らは初対面の敵だと危険だからね。」

「ふウン、アレイスターの野朗との話のはどオナンド？」

虚数学区はまだ掴みきれてはいない。

今は少し面倒くさい処理をしてるところだ。

「今拡張子変えてるところ。」

「拡張子だア？」

「そう。画像ファイルみたいなもの。学園都市の拡張子を今、レイヤーを分けてpng形式に保存して、それを私の使ってるシステムにコピペしてるところ。」

「…………ガンバレ。」

暇な妹^{シスターズ}達を借り出してるけど、大変だあ。

ホントはこんな作業、自室に籠もってやるもんだけれど、今は愛し子^{ダーリン}がすぐ近くにいますから安心感がある。

一方通行の近くだと能力バフがかかるみたいで、まるでレモンを入れただけで卵の殻のようにすんなり作業が進んで行く。

私にもバフがかかるから愛し子^{ダーリン}もそうだと思うんだよね！

「お？おおお？」

え？何？気持ちー！肩に、^{アクセラレータ}一方通行が肩に触れた途端すごい気持ちー！あゝあゝほぐされてる。天才かな？

「肩が綿毛のように軽い！え？天才？」

「そこまでのもんかア？芳川と同じ反応だしよオ。」

「なんでそうなったか、わからないけどすごい軽い。血流の流れが良くなったのかもしれない。ヤバイ！」

「電気信号をうまく調整出来るようになれば、オマエも出来るぞ。」

「えー！なにそれ！愛し子^{ダーリン}すごい！聖朝歌^{ミサカ}も練習しよっかな。結婚しよう！」

聖朝歌^{ミサカ}と愛し子^{ダーリン}が戯れてると、木原が戻ってきた。

それぞれ行軍の準備を始めてるから会議は終わったのだろう。

「ハウンドドック 獵犬部隊を狩り終えた。あとは爺さんだけってわけだ。」

「なら、ミサカ 聖朝歌達はもう別行動が良い？」

「駄目だ。今回お前らみてえなガキ共の引率を押し付けられてんだよ。爺さん対策もあるんだとよ。」

「そう。なら仕方ない……………」

今、能力で無効化したような感覚があった。

場所は運転者ちゃんの方。

「どオした？」

「待機中の運転者ちゃんの方、襲撃された？木原！」

「ああ、今通信が入った。第三位と第五位だそうだ。」

「は？なんて第三位と第五位が一緒なの？ジジイと第五位って手を組んでると思ってたけど違うの？」

「あ？違うにきまつてんだろ？」

「壮大な勘違いがあったわ！本丸はジジイってことか！なるほど！ちよつと、転移して連れてくるわ！」

「あつ、おい！ミサカ 聖朝歌！」

運転者ちゃんの近くに転移すると、第三位と第五位が運転者ちゃんに掴みかかって何か騒いでいた。運転者ちゃんちゃん可哀相。

「そのこの戦闘種族共！お待ちなさい！」

「誰が戦闘種族よ！って、アンタなんでこんなところに。」

体操服姿の第三位が泡を吹きつつある運転者ちゃんをガクガクと揺さぶりながら私に反論する。

運転者ちゃん可哀相。第五位は私に向けていつでも能力を使えるように？リモコンを向けてきている。

「なんでって、クローンミサカが行方不明になったから探しに来たの！」

「そうなの？ならこいつは？」

「運転手。」

「そう。」

ぱつと、運転者ちゃんを第三位が手放すと、哀れかな運転者ちゃん

は意識を手放して落ちる。これはひどい。

「でも、こいつらハウンドドッグ猟犬部隊よねえ？なんで協力部隊がこれなのかしらあ？」

「うーん、どこまで喋っていいかわからないから保護者役の所に連れて行こうと思うんだけど？ついてきてくれる？」

「第一位も一緒なのかしら？」

「そうだよ。」

「遠慮するわあ。」

「そう。あ、第五位ってしよくほうみさきだよね？ドリーがありがとうって言ってたよ。さ、第三位行こうか。」

「私は強制的なのね？」

「ええ？だって歩く破壊兵器じゃん。」

「ちよつとアンタねえ？」

第三位を掴んで転移するために集中しだすと、脳内に直接声が届いた。

第五位だけど、まあ無視しちゃおう。

てか、第三位やっぱ胸私より少ないな。

「何胸もんでんのよ？アンタもしかして……」

「私の勝ち。」

「なっ！勝ちって、ちよつとどういうことよ！」

「ちよつと！待ちなさい！」

第三位の胸を揉んでいると、第五位がミサカ聖朝歌達の間割って入ってくる。

つまり、そういうこと。

「くっ、流石にミサカ聖朝歌五位には及ばないわ。てかなんでノーブラ？こんなの競技なんてしたらバインバインのポインポインじゃん！エツチ！スケベ！」

「も、揉んでんじやないわよお!!!」

終章 神の視野

隊員と一方通行アクセラレータと第三位と第五位。そして私の足音だけが響いていた。

他の組織から情報提供があり、狙いが御坂美琴だと分かったが、わかった所で爺に対して先手を打つことは不可能に近いということ、強行突破となった

私と木原くんは私の電子的なレーダー？を使つて第三位と第五位の後ろを歩いていく。

最悪最初に見つかつても、愛し子ダーリンがこの場にはいない為、空きをつくることができるということだ。

『やつほー！／escape 聖朝歌ミサカ／return。例の件、順調にすすんだよー／return。最中チェックして、良かったら出力しても良くなるから／return。』

ミサカ総体がミサカネットワークと虚数学区の処理を終えてくれたようだ。

最終チェックとしてレイヤーを見てみても、変な部分は見当たらない。ファイル分けも正確に出来てるからこのまま出力してもいいだろう。

『一通りみただけど大丈夫っぽい。こんだけできてたら、不具合出てもすぐにこつちで直せそうだから。ありがとうね。』

『でもこれが出来たら、もっと強化されるつてのがわからないんだよね／return。』

『簡単なことだよ？私達が本当の意味で繋がる。離れたところでミサカが襲撃にあつても、肉体はそのまままで聖朝歌ミサカが交代して戦えるし、人格のバックアップも個別に出来るようになる。まあ総体と私じゃあ見える角度が違うけどね。ようこそミサカ。人類未到達点へ！』

関節を鳴らしたときのような感覚と共に、体の収まりが心地良くなる。

あるべき位置に戻つたと言えよう。

見えなくても視えるこの間隔は本当に久しぶりだ。

自身が残した権能もようやくわかって、操作することも簡単になった。いや……もとに戻ったんだ。本当に。

肉体面に関しての寿命は変わらないが元の星依として私はこの先有り続けられる。

すごく嬉しい！

『本当に神様だったんだね／return。』

『何。今更？』

『普通思わないじゃん／return。私達全員の記憶とか脳の情報蓄積量とかそんなものすべてを合わせても、貴方の情報量の0.01%にもならないとか／return。』

『詳しい案内は帰ってからにするけど、とりあえずそこで待っていてね？探すのが面倒くさくなるから。』

総体にはせめて私の案内をしておかないやならないな。とにかくすぐこの案件を終わらせなければ。まあ？当然？私ってばとってもいい神様なわけ？そんな殺人だなんて物騒で野蛮なことはしません。

ともかく、私の力の出力点を増やさなきゃいけないよね。

ジャジャーン！魔法MOD。前提は虚数学区のパロメーターで補えるから実装可能です。

これで私の子孫ちゃんと学園都市の能力者の地盤強度がますからね。

科学で観測できる不可思議による科学的な力。とラベルでも何でも書いておけば、人類が勝手に科学の力だと解釈してくれるし？

——世界の最適化を実行——

魔力フィールドを虚数学区・五行機関に名前変更。

魔力持ちを超能力者に変更。

魔力に関する常識を超能力者の自分だけの現実パーソナルリアリティに差替え。

魔術と魔法の互換性を超能力と魔法に変更。

魔力の生成法を演算に紐づけ。

魔法回路を魔術回路ではなく演算式に変更。

魔法に関するテクスチャの変更。

魔法生物の自然湧きを無効化。召喚のみに限定。

新たに【冥界】を追加。

冥府の生成。

——最適化完了——

見慣れたログが頭の中に流れる。私の視野がほぼ元に戻ったためシスターズ妹達の会話が可視化される。

この街全体にあふれるAIM拡散力場を感じることも、外の魔力をも感じ取れるようになる。

とても懐かしい感覚。

「木原君さあ、爺は能力者じゃないよね？」

「ああ？大人が能力者なわけねえだろ？」

「そう。ならいいか。」

確保した隊員以外にもう人はクローンミサカと男二人。そのうち爺は一人だけ。

ミサカには男一人がついているが、ミサカに対して友好的な振る舞いをしているのに対し、もう一人の男は友好的ではない為そちらの方の演算を妨害する。

「あれ？この感じどつかで？」

「何喋ってんだ？」

「人間の癖に繋がってる。」

「はあ？」

「多分、爺だけど脳波ネットワークが構築されてる。弱くて小さいけど。脳波に関する医療機器とかはないはずだし、なんだこれ？」

「脳波ネットワークだあ？爺さん何してんだか。……確か例の件……。」

考え込んでる木原君は放おって置いて、とりあえず脳波ネットワークを切ってみるか。

……いや、脳波を切るって何さ。

こういうのってどういうのを切ればいいんだろう？運命とか赤い糸とか？

てか一人間が脳波ネットワークとか不敬すぎひん？

絶許。今の聖朝歌^{ミサカ}は虚数学区^{ミサカ}のブースタあるし？そもそも信仰なくとも行けるやつだし？

いや、何言いつしてんだか。神^{わたし}自らが手を下してもかつこ悪くはないよ。そう。

チートとか言われるだろうけどさ！不快なものを除去するのに全力になったっていいわけだし？なんなら邪神なわけだし？この世界の神のルールなんて知らないし？

いいでしょ？いいよね？

よし。

「おい、何立ち止まってんだ？」

「木原幻生だと思おう人間を見つけたから先制攻撃。」

「ツチ。すぐそこか？」

「視界外。」

「は？」

私は遠隔で首を絞める。

離れているはずなのにヨボヨボの皮膚の感触を感じ、掴んでいる喉が苦しそうに動く。

指先から鼓動が伝わってくるのがわかる。

愛^{ダーリン}し子が怪訝そうにこちらを見ているが、掴んだから離せないし話したくもない。

「何があつたの？」

「今、木原幻生を捕まえた。」

「捕まえたあ？どういうことなの？」

「よし！よし！引きずり込む！オラァ!!」

グンツ！と目の前の空間が歪むと、首を抑えてもがき苦しんでいる老人が浮いている状態で現れる。

それと同時に低い音が頭の中で鳴り響くのと同時に、目を開いているのにも関わらずに目の前が真っ暗になった。